

# 【本編完結】とあるTS女 死神のオサレとは程遠 い日記

ルピーの指輪

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

浦原の妹に転生。

しかし、彼のような明晰な頭脳もなければ、剣も鬼道もからっきし。

あるのは並外れた霊圧の高さだけ。オサレとは程遠い脳筋だけど生き残るために頑張ります。

# 目次

## 原作開始前

一ページ目	1
二ページ目	11
三ページ目	21
四ページ目	30
五ページ目	41
六ページ目と藍染惣右介の考察	51
七ページ目	60
八ページ目	72
九ページ目	83
十ページ目	93

## 尸魂界篇

十一ページ目	105
十二ページ目	115
十三ページ目と恋次の奮闘	126
十四ページ目とルキアの独白	137
十五ページ目と浦原陽葵VS藍染惣右介	147
十六ページ目	158
破面篇	
十七ページ目	170
十八ページ目	181
十九ページ目とルキアの戦慄	191
二十ページ目と碎蜂の独白	202

二十一ページ目

214

千年血戦篇

二十二ページ目

227

二十三ページ目

240

二十四ページ目とユーハバツハの最期

(最終回)

250

番外篇

後日談 其の一

265

後日談 其の二

277

後日談 其の三

291

# 原作開始前

## 一 ページ目

○月?日 晴れ

とりあえず、日記帳というものを手に入れたのでつけてみようと思う。

最近、私の現状というものが少し奇妙だということに気付いた。それも含めて自分なりにまとめようと思っている。

まず私は前世の記憶を持っている。転生者という認識で間違いない。

現在、3歳という年齢でこれだけ文章がかけるといえるのは何よりの証拠だろう。だつて覚えているんだもん。ある程度の漢字は。

私の語彙力についてはどうでもいいとして、現在置かれている立場だ。転生する前は普通に日本人としてサラリーマンをやった私だが、何やかんやあって死んでしまう。

そして、目覚めたら女の子の赤ちゃんになっていて今に至る。まあ前世は男だったの  
で、最初のうちは違和感しかなかったが……。

周りの人間は日本語を喋るが薄々勘付いていることがあった。

ここ、BLEACHの世界だよね……。

みんなの着てる服が妙に古風で過去の世界に転生したのかと思っていたが、尸魂界ソウル・ソサエティという聞いたことがあるような単語を耳にしたとき私は確信した。

知ってる漫画の世界だと……。

その前から疑ってはいたんですけどね。私には一つだけ年上の兄貴がいるんだが、そいつの名前が喜助だったんだ。んで、私もなんだけど、姓は浦原。

偶然だと思つたよ。兄が浦原喜助でも……。すっげー頭が良くて、ヘラヘラ笑いながら全てを見透かしているみたいなのを只者じやないとは前から思ってたけど……。

私の名前は浦原陽葵ひまりっていうんだけど、兄が割と天才肌だからこつちまで期待されて困ってる。

何でも死神にさせたいんだって、両親は私も彼も両方とも。何だろう……とても嫌な予感がする……。

死神って、あれだよ。虚ホロウとかいう化物と戦うんだよね。

ムリムリムリムリ無理だつて。あんな化物と戦ったらすぐに死んでしまうに違いない。

それなりに家が裕福みたいだし、私は長生きとかか化物に惨たらしく殺されるのはゴメンだ。

絶対に死神にはなるもんか。

△月○日 くもり

日記を付けてからもう2年ばかりが経つ。

生活の変化と言えば、5歳になった私と6歳になった喜助は五大貴族である四楓院家に奉公に出されることとなった。

ええ、ええ会いましたよ。夜一様に。いや、可愛かったなあのは。それで凜としていた。ついでにすげー、いい匂いもする。まだ幼女なんだけどもう可愛かった。

兄貴とは何かあったのか知らないけど、もうすでに親しそうだった。私も彼女と仲良くなりたいたい。そう下心丸出しで思っている。

とにかく、家の格なんてウチと天地ほどの差があるんだけど、幼いときから気さくないい人なのよ。奉公しがいがあるってもんだ。

あと握菱鉄裁さんにも会ったな。怖そうだと思いきやめっちゃ優しい。

その人によると私の霊圧？はこの年齢にしては並外れて大きいらしい。喜助や夜一様よりも大きいんだってさ。でも関係ないよね。死神にはならないんだから。

私らは家がぶっ潰されないように尻尾振らなきゃいけないんだって。兄貴が変なことしないように注意しとかなきゃ。

▽月?日 雨のち晴れ

早いもので、四楓院家に来てもう4年も経つ。この辺りの人間って長寿の人が多いから年月に関する感覚が私とは違う。4年って結構長いじゃん。でも鉄裁さんからすると最近みたいな感覚らしい。

最近といえば、兄貴が変な発明に目覚めた。ガラクタを貰ってきてはそれを直したりすることが趣味だった兄貴はそれをさらに発展させて新しい玩具を作るようになったのだ。この趣味が高じて後に色々と主人公をサポートするんだもんなあ。

それで、夜一様は夜一様で隠密機動だかなんだかの訓練を受けさせられるようになっていた。

すげー、身分が高いのに厳しい訓練をして腕つぶしを鍛えなきゃならないのはこの世界ならではだよな。まあ、長が弱いと示しがつかないからなのか……。

んで、私も訓練に付き合わされている。これが死ぬほど辛い。子供がやることじゃないよあんなこと。

あと、瞬歩ってなんだアレ!? 意味わかんないんだけど、どうやって修得すりやあいのの? 霊力を足に集中して重心をどうのこうのして……それから筋力を——わかるかあ!

訳のわからん技をやれと言われてボコボコにされる生活……辛くてしょうがない



……。

□月○日 晴れ

兄貴が元服とかいう儀式を経て一人前の大人と認められたらしい。

私かというと、霊圧だけは馬鹿みたいに大きくなってるみたいだけど、白打も剣術も鬼道も全部才能ナシって言われた。

兄貴の発明はそろそろ玩具の域を超えてきて修行グッズみたいなものも創り出し、夜一様を楽しませている。

こっちは相変わらず瞬歩すら出来ずに毎日の特訓でボロボロになる日々だったのに。漫画だと当たり前みたいに使われている技術なんだけど、全然出来る気がしない。何回床に穴をあけて怒られたことか……。

白打の才能は全くと言って良いほどなかったんだけど、とりあえず一発が当たればK Oみたいな組手が続いて獅子女しおんなっていう不名誉な渾名がついた。脳筋みたいに思われていて辛い。

「陽葵ひまりの力はいつかきつと役に立つ」って夜一様は期待してくれているけど……。あ、夜一様……。最近ちよつと色気まで出てきてますます魅力的に……。これ、私が先に碎蜂ルートに入っちゃうんじゃないの？

兄は兄で私を溺愛してくれるのは確かなんだけど、その方向性が間違っているというか近年の霊圧の急上昇は彼の発明品による特訓のせいなのではないかと疑っている。

そもそも一発当てれば良いみたいな戦法は彼の指南から生まれたものである。

「陽葵ちゃんひまりは余計なこと考えずに靈気を込めた拳を当てた方が早いっすよ」

兄がこんなアドバイスをするものだから、霊圧を込めた右ストレートの威力が半端ない威力になっていった。

この前、試しに全力で地面を殴ったらミサイルが落ちた後みたいなクレーターが出来た。これじゃ、まるでウポオーギンの超破壊拳ビックバンインパクトとかゴンさんのジャジャン拳である。漫画が違うし、オサレでもなんでもない。ていうか、格好悪い……。

◇月?日 晴れ

進路について問われるときが来た。というより半ば強制的に真央霊術院を受験する感じになってしまった。

夜一様から同期になりたいって言われたら二つ返事でオッケーするしかないじゃない。すでに私は至るところが成長しまくってる夜一様の虜だった。だってあの人、スキップ激しいんだもん。あのおっぱい押しつけられて拒否できる人間って居るんだろうか……。まあ、私より先に兄貴を誘ったみたいだけど。

あと、死神にならないと決めてたのは確かなんだけど、死神ならないならならぬで隠密機動に入るか、もつと厳しい仕事をするかしか進路がなかったんだよね。進路の幅狭すぎだろ。

これでも下級貴族の娘なので嫁の貰い手がいれば働かずに食うことも出来るのだが、すでに獅子女という渾名が完全にその足を引つ張っているし、結婚したいとも思わない。

死神なら何とか身のフリ方を考えれば比較的に安全な仕事が出来ると兄貴に吹き込まれて受験を決意したのだ。

だけど、問題は霊圧以外に何の能もない私が試験を突破できるかどうかだ。それについてとはとても不安ではある。

◇月◎日 くもり

今日は真央霊術院の入試の日だった。

やつちまった……。何をやつちまったって試験に落つこちたとかそういう次元の話じゃない。

実際、試験の出来は良くはなかったと思うけど、才能は無くとも何年も稽古を強制的にやらされてたので、人並みの成績にはなってくれた。

で、問題は面接のときに起こった。なんか特技はないかと聞かれたので唯一出来る靈氣を拳に集中するという特技を披露した。

それを見た試験官が面白半分にかういったのだ。

「それで、壁を殴ってみろ」 って……。

私は思わず「ツエズゲラかよっ」 って人生で絶対に使わないであろうツツコミが思いついたけど、それは言わずに我慢する。

んで、バカ正直に壁を殴ったんだ。するとどうだろう……学校の壁が壊れただけなら良かったんだけど……その余波で屋根が倒壊して大惨事になってしまった。

一応、真央霊術院って特殊な結界で守られてるみたいだけど、私の強化した拳はその耐久力を超えてたらしい。

そんな騒動があったせいで私は入学試験で初めて建物を壊した大バカ者みたいなレッテルを貼られることになった。

ちよつと待つてほしい。殴れと言った男が悪いんじゃないかしら……。

もしかして入試に落ちちやった？

◆月○日

不本意な騒ぎはあったけど、私は無事合格。当たり前前だけど、兄貴と夜一様も合格し

ていた。

あとから聞いたけど、四楓院家の関係者が落とされるなんてことは余程のことがないとあり得ないらしい。先に教えて頂きたかった。

このままでは学校生活もめっちゃめっちゃになりそうだと危惧した私は兄貴に霊圧を抑えられないかどうか相談する。

すると彼は私にリストバンドをプレゼントしてくれた。これは自身の霊圧を全開にし続けたいとまともに動けないという謎アイテムだ。でも、霊力はリストバンドに集中するから見た目の霊圧はガクツと下がる。

「慣れて自然に動けるようになれば、今の力を大体2割程度で出せるようになれるっスよ」

いや、霊光波動拳の修の行——呪霊錠かよ！ どう解釈すれば今よりも霊圧を上げたことになるんだ？ 私は心の中でツツコミを入れた。

しかし、実際にそのおかげで霊圧は下がってるし、要するに剣八の眼帯みたいに取らなきゃ良いんだからと思ひ直す。

明日から死神になるための授業だ。兄貴と夜一樣は特別クラスの一組に入ってるから別々だけど、好都合だと思つた。どうせ物覚えの悪い私は付いていけないだろうし。

それにしても結局、死神になるのか。脳筋の死神なんてオサレとは程遠いだろう

な  
し。

## ニページ目

△月◎日 雨

真央霊術院での生活はまあまあ楽しい。授業も四楓院家でのトレーニングと比べれば天国だ。

成績は夜一様と兄貴がトップ争いをしてる。というより、スペックがそもそも他の子と違うので本人たちは争っている感覚すらないのだろう。

普通にやつて1番か2番を取っている感じだ。

私かというと中の上くらいの成績を何とかキープしてる。

漫画のせいで忘れてたけど、死神の仕事って虚をぶつ倒すことだけじゃなかった。

整ブラスっていう迷ってる霊を尸魂界に送ったりするのも大事な仕事だったりする。こんな設定すつかり忘れてたわ。後半とか最早滅却師グインジャーとしか戦ってなかったし、そんな単語

初期の初期しか出てなかったはずだし。

要するに尸魂界と現世の魂魄の量を均等に保つことが死神の最も大事な仕事ってことなんだけど、これが意外と繊細な作業なのである。

一護とかすげーよな。ルキアの補助があつたとはいえ、いきなり死神代行とか無茶ぶ

り何とかしたんだもんなー。私なんかこのまま現世に出ると魂葬のとき魂魄破裂するって注意されたし。霊圧が抑えられてもまだまだ微妙なコントロールが苦手なんだよね。

ちなみに一護が知らん内に修得してた瞬歩もまだ使えないままである。パワータイプがスピードに翻弄されて負けるよくある未来しか見えねえ……。

でも、兄貴のリストバンドのおかげで何とか悪目立ちせずにやっていける。無事に卒業して夜一様に褒めてもらいたい。

□月♡日 晴れ

完全に慣れちゃったみたい。リストバンドに……。

霊圧の急上昇がまた始まった。何これ、病気なの……。剣術の試合なのに咄嗟に剣を躲してぶん殴って勝負を決めたり、瞬歩の練習でも足に霊気を込めすぎて大ジャンプして頭を思いきり天井で打ったりして酷いものである。

兄貴にお願いして吸収される霊力の量を上げてもらうも、もう諦めて霊圧のコントロールの訓練に全振りしろと言われた。

「霊力さえ高ければ鬼道も白打も出来なくても何とかなるっす。陽葵ちゃんは深く考えずに手加減を覚えるだけでいいんすよ」



——要約すると無能なんだから色んな技の修得は諦めろということだ。で、霊圧の高さだけが取り柄なんだから、それを極めろと……。

兄貴の言うことは漫画じゃ間違いなしだったからなー。これは聞いていたほうがいいだろう。

つーか、死神になれても始解すら使えなかつたら、剣八コースじゃない？ いや、彼には戦闘のセンスがあつたからそれよりも酷い。

とりあえず、高まつてくる霊圧をコントロール出来るようにならなきゃ日常生活も送れないかもしれない。

ドラゴンボールで悟空がスーパーサイヤ人のまま生活していると食器を何個も壊したりしてたみたいな現象も起こりかねない。そうなつたら、いよいよ私は鼻つまみ者になる。

この日から兄貴の指導の下、霊圧のコントロールの特訓が始まった。

◆月○日 くもり

あかん、あかん。これは、あかんで。いやいやいやいや、なんてこつた。うわー、こんなマジかー。

《以下、十数行に渡って内容のない言葉がひたすら綴られている》

びつくりした。まさか、こんな展開になるなんて。

兄貴が私と霊圧のコントロールの特訓をしてると、そこに夜一様がひよっこり現れた。彼女とはカリキュラムが違うから最近殆ど会えてなかった。

相変わらずスキンスリップが激しくて、私が男だったら絶対に前かがみになるようなことをいっばいしていった。なんであの人はあんないい匂いなんだろう。これはもう、百合コース待ったなしである。

それで、私の霊圧を見た夜一様は自分と本気で試合したいと申し込まれたのだ。素手同士で……。

ここで勝てたら格好いいんだけど、結果は惨敗。よく考えたらみんなが斬魄刀を使う中、この人だけだよ素手で戦って最後までインフレに付いてきたのは……。白打で戦った方が刀使うよりも強いつてマジだったんだね……。

でも、試合が終わったあと、夜一様はすげー汗かいてた。私は泥まみれだけど彼女が手加減して当ててくれたので疲労はそんなにない。

なんで、そんなに疲れてるのか質問すると……。

「阿呆。手加減を知らないお主の拳を受けたら明日の予定を全部キャンセルせねばならんじやろうが」と言われた。

なんでも、ブンブン振り回す私の拳が凶器にしか見えずに躲して当てることに死ぬほ

どの集中力を注いだのだそうさ。

そっか。当てたら夜一様といえども危険な目に遭わせるところだったのか。こりや、マジで頑張つてコントロール出来るようにならないと。

真面目にそんなことを考えてたら夜一様から思いもよらない一言が飛び出す。

「じゃが、陽葵も頼りになるようになった。お互い埃まみれじゃし、一緒に風呂にでも入るか！」

——時が止まった。完全に私の時がこのとき止まっていた。セルフでザ・ワールドを体験していたのである。

よ、よ、夜一様とお風呂で、そんなん良いのくく？ だつて主君だよ、この人。もう何年かすると当主になる人だよ。四楓院家の……。

なんか、初めて女の子の体に生まれて良かったとか不埒なこと思ったわ……。

しかし、そんな私に全裸の夜一様は刺激が強すぎたのか……背中を流し合った後でソツコーで湯当たりしてしまった……。彼女の肢体をもつと目に焼き付きたかったのに——目を覚ますと介抱してくれてた鉄裁さんの顔のドアップである。

だから、何とか記憶に焼き付けた夜一様のナイスバディを思い出そうとすると鉄裁が横入りする。邪魔である。私の煩惱から消えてほしい……。ちくしょー！

△月□日 くもり時々雨

たまには転生者らしく原作知識についてどう利用するか考えてみようと思う。

何事もなくこのまま無事に死神になつて生きていったとして……大きな面倒事が必ず待っている。

まずはヨン様こと藍染惣右介だ。彼つて同期くらいかなつて思ったけど学校にはいないから先輩かちよつと後輩かどつちかだろう。

藍染のせいで兄貴も追放されて夜一様も出ていくことになるんだもんなー。まあ、そのおかげで主人公が無事に誕生するんだから、後々のことを考えるとグツジョブだし、ユーハバツハは彼無しでは倒せなかつただろうから結果的には大正義なのかもしれないけど。

じゃあ、私はどう身を振れば良いか……考えた結果……何もしないほうが良いんじゃない？つて結論に至つた。

よくある凄い力を持った転生者が立ち回つていい方向に転がり込むとかそんなことバカな私には出来ないし。つーか、そこらの転生者なんかよりもウチの兄貴が数段有能

だし……。

出来るだけ介入せずにどうしてもという時は気の利いたアドバイスを送れるように準備しとくぐらいで良さそうだ。

転生者なら何か秘密特訓してアバンストラッシュとか牙突とか小学校のときに傘を振り回して練習した技とか覚えたくなるかもしれないけど……本っ当に不器用なんだ私は。

修行しても強くなれる気がしない……それどころか中途半端に強くなったら狙われるリスクすら感じる。パワー系の脳筋つて噛ませ犬確定だし……。剣八くらいまで行けたら別だけど……。多分、私は頑張つて狛村くらいだ……。黒棺でやられちゃう役になるだけだ……。

最近、霊圧を抑えることをようやく覚えただけで、未だに右ストレート以外は使い物にならない現状なんだ。授業もギリギリ合格点をもらってる感じだし……。

だけど完全催眠だけはかかりたくない。あんなのかかったら間違つて愛しの夜一樣に斬りかかるなんて事もあり得る。返り討ちだろうけど。

要するに藍染の始解を見なければ良いんだ。つまり目を瞑つても違和感を感じられなきや良いということ。

だから、兄貴にお願いしてみた。目を瞑つても、目を開けてるように見えるアイマ

スク”を作ってくれて。自衛するために……。

ドラえもんじゃないんだから、そんな都合の良い道具なんか出てくるはずないと思うじゃん？ あの兄貴は何でも作れるからやばいんだって。浦えもんって呼ばれてた意味がよくわかる。

兄である浦原喜助はたったの3日で約束のブツを作ってくれた。

さつそく装着してみる。うん、何も見えない。真っ暗だ。私は兄貴に文句を言った。どういふつもりかと……。すると……。

「こつちから見るとバッチリ目を開けてるように見えるっすよ。あとは陽葵ちゃんが霊圧の感知能力を高めて視界を失っても自由に動けるようになるだけっす」

兄貴はめっちゃめっちゃ明るい口調で無茶ぶりをしてきた。「だけっす」じゃねーよ。

どうやら、私がこのアイテムを所望したのは目を瞑っても戦えるくらいの霊圧感知能力が欲しいからだと勘違いしたようだ。

要するに「後ろの天津飯が右の手刀でオラを狙ってる」みたいに気を察知して動きを知るような事が霊圧を感知して出来るようになればアイマスクをつけても自然に生活が出来ると……。

この日から兄貴との修行メニューに視覚を断って戦うという無茶なトレーニングが加わった――。

「最近、陽葵ちゃんが妙にやる気になってくれて色んな道具が試せるから嬉しいっス」  
兄貴は強くなるというより、私を使って実験出来るのが楽しいみたいである。まあ、  
こうしてると夜一様にも会えるから私も楽しいんだけどね……。

◇ 月□日

真央霊術院をついに卒業した。兄貴たちは3年も前に卒業しててもうとつくに席官  
になつてるけど……。

これで、正式に護廷十三隊のメンバーだ。もちろん、私は兄貴や夜一様がいる2番隊  
に所属することとなった。

しかし、確かにおめでたい日なのであるが、私は自分の脳筋加減を呪っている。

真央霊術院に入院したときに配られ、常に寝食を共にしてきた斬魄刀——浅打が正式  
に我が物となるのだが、入隊式のときに新隊員たちがそれを一斉に振り抜くみたいなそ  
んな余興があり、私も浮かれてそれを振り抜いた。

霊圧のコントロールのことなどすっかり忘れて刀を振り抜いたものだから、刀の大き  
さがビルくらいデカくなって会場を破壊してしまったのだ。

よくある転生者が無双する小説とかだと「オレ、なんかやっちゃいましたか？」で済  
むのだが、やっちゃいましたかじゃ済まされなかった。

入隊初日に始末書を書くのは前代未聞らしい。そして、偉い人に謝りまくってきた。兄貴と夜一様まで一緒に……。

「さすがに擁護出来ないっす。そのためにずっと訓練してきたんすから」あの兄貴に普通にドン引きされてしまった。早く始解を修得せねば……。不器用な私は何年それにかかるのか不安で仕方ないのである——。



## 三ページ目

♣ 月□日 晴れのち雨

死神として護廷十三隊に就職した私はある記録を打ち立てた。

それは、一ヶ月で書いた始末書の数の新記録である。若かりし日の京楽春水さんがやんちゃというか、仕事を今以上にサボりまくってたときの記録を抜いたらしい。

断っておくが私は真面目に働いている。無遅刻無欠勤で鍛えた感知能力を使って虚<sup>ホロス</sup>も整も見つけてきちんと仕事をしている。

しかし、どうも私の仕事は雑らしい。特に虚<sup>ホロス</sup>の処理が……。とりあえず斬魄刀はちよつと油断したらデカくなって、周囲の建物に被害が出るし、ぶん殴って倒そうとすると躲された場合、その余波で道に大穴が空いたりや塀が割れたり、民家の屋根が吹き飛んだりした。

「いやー、未練のない記録だったけど抜かれるとどうも悔しくもあるねえ。しかも君のような働き者に抜かされるんだから分らないものだよ」

——八番隊長の京楽さんが自分の記録を破った者が現れたという噂を聞いたらしく二番隊の隊舎にわざわざ私の顔を見に来た。

彼は面白そうに私を観察して肩を叩いて気にするなと慰めてくれた。

働きの無能が1番迷惑をかけるということを身を以って体感したよ……。

「早いとこ始解を覚えるくらいししないと2番隊の予算が修繕費で食い潰されるっすね」

冗談っぽい言葉でも兄貴の目は笑ってなかった。私に始解を教えるつもりらしい。

いや、死神になったからにはいつかは卍解まで極めたいと思ってるけど、斬魄刀の大きさをコントロール出来ない時点でお察しの通り始解ができる気配すらない。

努力はしたんだよ。ちゃんと、斬魄刀と対話が出来るように……。

実際に斬魄刀を一日中弄ったりもしてみた。とにかく四六時中だよ。目をつぶって触感を確認したり何百枚何千枚と斬魄刀を写生したり、ずーっとただ眺めてみたり、舐めてみたり、音を立てたり……、嗅いでみたり……。それでも夢に斬魄刀は出てくることもなかったし、いつの間にか斬魄刀の声が聞こえるなんてこともなかった。

兄貴にそれを伝えたら「全然やり方が違うっす。無駄な努力でしたね」と言われて会話は終わった。

とにかく始解は早く修得したい。兄貴の厳しい特訓にも付いていくつもりだ。

◇月◎日 雨

やばい……。始解が全然修得できない。兄貴も予想以上に物覚えの悪い私にちよつと引いている。

私くらいの霊圧だと普通は始解の修得はもちろん、卍解に至つてる人もいるみたいだ。兄貴なんて院生時代から「起きろ——紅姫！」とか言つてたし……。素質なんだろうなあ。

覚えられないものは仕方ないのでどんな斬魄刀が良いか考えてみようと思う。

始解の中で当たりだと思ふのは流刃若火とか千本桜とか氷輪丸みたいな高火力のモノや鏡花水月や逆撫みみたいな五感を刺激する系のモノだ。

逆に私は頭が弱いから花天狂骨みたいに駆け引きが必要な斬魄刀は勘弁して頂きたい。鬼道が苦手だからやつぱり鬼道系がいいな。格好いいし……。

鏡花水月くらいチート性能なものいい。催眠系はどんな漫画でも強いからね。

一護の斬月もシンプルで悪くないんだけどね。私の霊圧とかそういう事情を考えるとか月牙天衝みたいな技は相性良さそうだし……。

「私自身が斬月になることだ……」とか言つてみてー。

「命を刈り取る形をしてるだろ？」とか「詫びるように頭を差し出す——故に侘助！」とかオサレだよな。最悪、能力はどうでもいいから名言製造機みたいな始解でもいいや。

そうだ。斬魄刀つてなんか本体みたいなのが居るんだよね。人だったり、動物だったり……。斬月のおっさんみたいなのは微妙だよな。それだったら動物の方がいい。

さすがに可愛いらしいお姉さんとかはないよなー。だったら正直言つて能力どうでも良いんだけど……。これ、さつきも書いたな……。

あー、早く始解を修得したい。始末書に追われる日々から解放されたい……。

◎月〇日 くもり

まだ始解は修得出来ない。でも一般隊士の中で現世での虚討伐数ホロウが2年連続で断トツ一位になったので晴れて私も席官の仲間入りを果たした。大虚もギリアンだけメスクラウンデ何体か倒した功績も考慮されたみたいだ。建物などの倒壊数も全隊士の中でトップになっちゃったけど……。

今日から二番隊の第二十席という立場になる。夜一様（既に二番隊の副隊長）にも祝福されて、今度二人きりで飲みに行く約束をした。二人でデートじゃ！ よっしゃー！ マジで嬉しい。

「陽葵ちゃんがもうちよつと破壊行為を自重してくれてたら、欠員が出た第八席に入ってもらつてたんすけど……。始解が出来ないのかなり足を引つ張つてるんすよね」

兄貴（既に第5席）は私が建物や道路を壊しまくって、始解も修得出来ないことが

出世を遅らせていると溢していた。

いやいや、第二十席でも十分だから。給料がかなり上がるし……。

お金に余裕が出来たから夜一様になんかプレゼントを買おうかしら……。うーん。何がいいだろうか……。

☆月●日 晴れ

あー、めつちや楽しかったー。夜一様とのデート。

夜一様の行きつけの店に行つて飲みまくつて……。二、三件はしごして……。最後は四楓院家の屋敷に戻つて部屋飲みした。

夜一様に料理の一つも出来るのかと尋ねられ、得意ではないけど酒の肴になるようなモノならと何品か作つて出すと大層喜んでくれた。

仕事についても熱く語り合つたりもした。始解がいつまで経つても出来ないと思痴をこぼしたら、彼女は優しく私の頭を撫でてくれて――。

「儂など覺えたところで使つとらん。お主にだつて無敵の右ストレートがあるじゃろうが。それで大虚メノスを倒せるなら十分じゃ。もちろん、建物を壊すのは程々にしたほうが良いが」

夜一様は始解などしなくても虚ホロウが倒せればそれでいいと言つてくれた。

よくよく考えてみればそりやそうだ。始解で倒しても卍解で倒しても、白打で倒した

のと結果としては同じなんだから。——私はどうやら焦っていたらしい。

気付いたら明るくなるまで飲んでいて寝て起きたら既に真つ昼間だった。いつの間にか私の胸のつつかえは消えていて、晴れやかな気持ちだ。

隣では夜一様が無防備な寝顔を見せている……。

ああ、夜一様……本気になってしまいそうです……。

◆月〇日 晴れ

今日は珍しい人と会った。十二番隊隊長の曳舟桐生さんだ。

漫画だと彼女は将来的に霊王を守護する零番隊に所属するが、まだこっちにいる。

確か兄貴がこの人の後釜に収まるんだよな。あの人が隊長になるなんて信じられないが……。というのも隊長っていうのはやっぱり別格というか天上人みたいなものなのよ。

話を曳舟さんに戻そう。彼女は私を見るなり「素質があるかもしれない」と声をかける。

緊張しながら、どういふことなのかと尋ねると、彼女の特技である霊圧を込めて他人の霊圧を回復させる料理を作る素質が私にあるとのことだった。

生まれてこの方、素質があるなんて言われたことがない私だったのでそれはもう嬉しかった。

これって、ヒーラーってことだよね？ 漫画だと一護とか恋次が完全回復を果たすのに一躍買っていたような気がする。めっちゃ便利なスキルじゃん。是非とも覚えたい……。

ということでは、私は時間があれば十二番隊舎に顔を出すようになった。特別な料理を修得するために……。

これは珍しく私に合っていたみたいで、凄いスピードで覚えることが出来た。溢れる霊圧を料理で発散できるので体調も良くなるし……いいこと尽くめだ。

その繋がりでは、曳舟さんを母親のように慕っている猿柿ひよ里や彼女と親しい平子真子とも知り合いになる。

ひよ里ちゃんは、年下で後輩だけど席次は上で、平子さんは先輩で既に五番隊の副隊長だ。

ヴァイザード

仮面軍勢にはワクワクしたよなー。やっぱああいう強化にはロマンがあるし。

「物ばかり壊す問題児って聞いたけど、料理はまあまあやな」

「年間虚討伐数、一番なんやろ？ なんて、二十席やねん。ウチの隊なら五席以上は固いで」

私の作った料理を試食してもらいながら二人と雑談をすることも多くなった。

でもさ、良く考えたらこれって戦闘中にはなんの役にも立たない特技だよな？ せつ

かく脳筋脱却かと思つたのに……。

○月☆日 くもり

つ、ついに始解を修得することが出来た——。

真央霊術院を卒業して十年……。ようやく私も一人前の死神に……。

だけど、これが斬魄刀で良いのだろうか……。完全にこれつてあれだよ……。金  
属バット”だよね……。

いや、おかしいと思つたんだよ。解号が「かつ飛ばせ」の時点で取り敢えずオサレで  
はねーなど。

斬魄刀の仮の名前は“<sup>アカリ</sup>紅鯉”——精神世界とやらで会つた彼女はラッキーなことに  
可愛い女の子だった。

ええ……、赤い鯉で斬魄刀は“金属バット”——この時点で察せる人間が出てくるの  
は何年後の現世だろうか……。

私の斬魄刀の本体は“カープ女子”だった——。

意味がわからん。なぜ、私の斬魄刀がカープ女子なのだ？ 赤い帽子にユニフォーム  
姿の斬魄刀の本体って聞いたこともないぞ……。

えっ？ 能力？ 刀に自分の霊力を食わせてその大きさに応じて球体型の霊気の塊  
を飛ばすだけの面白くもなんともない地味な性能ですけど……。



あと、鈍器としても使える。ワンパンマンの某S級ヒーローみたいな戦い方になるけど……。

！  
せっかく斬魄刀の解放を覚えたのに……、やっぱりイロモノコースだよ。チクショー

## 四ページ目

▽月◎日 晴れ

始解を覚えてから、バカでかい斬魄刀に悩まされることはなくなつた。

これで始末書の山から解放されるとか思つたけど、そんなことはなかつたぜ。

紅鯉アカリの能力は靈力を食つた分だけデカくなる靈気の塊（要するに靈丸）をぶつ放すというものなんだけど、最初に実戦で使つたら靈力食わせ過ぎて山が抉れた――。

良く考えたら、浅打と比べて靈圧の高さをより反映させるんだから破壊の規模がデカくなるのは当たり前だ。

始解を手に入れたメリットはサイズが小さくなつたことくらい。近距離戦も、今まで素手でぶん殴つてたのが、バットでぶん殴るようになったからより凶悪になつちやつたし。

この前、研修中の後輩を連れて行つたら、虚ホロウがあまりにもグロテスクなやられ方をしたもんだから、肉料理が食えなくなつたと苦情を言われた。最近の若い子は繊細なんだな……。

どうでもいい話だが、紅鯉アカリは現世にプロ野球というものが存在しないことに腹を立て

ていた。ならばせめて、尸魂界に球団を作れと喚き散らす。

ウチの斬魄刀はアホの子なのかもしれない……。見た目は茶髪のショートボブの子でとても可愛らしい感じなんだけど……。

「尸魂界でドラフト会議をしたいんじゃないけど。ペナントレースが見たいけえ」

三番隊副隊長の射場千鉄さんみたいな広島弁で訳のわからんことを熱弁する紅鯉。ドラフト会議ってなんだよ……。

あと百年ちよつとくらい待ってくれと言っても全然聞いてくれない。夢の中で「それ行けカープ」をエンドレスで歌われて最近ノイローゼ気味だ。

これなら始解を覚えない方が良かったかもしれない……。なんか、最近上手く行かないことだらけだなー。

◇月◎日 くもり

マジか！ 出世だ、大出世！ 今日から第八席だって、第八席！ これはグッドニュースだ。

始解を覚えたことがプラスとして働いたのかと思っただけど、そのせいでますます現世の被害が拡大するという苦情を受けたから……。ということらしい。

簡単に言っちゃえば現世に迷惑かけるから尸魂界の護衛の方の戦力に回されたって

こと。始解も使えるし戦闘力的にもそつちの方が適任だから、さつさと出世させて現世からの厄介払いをしたんだって。

いよいよ、破壊行為のマイナスの方が虚討伐ホロウのプラスを上回ってきたらしい……。靈感のない人間からすると天災扱いされてるみたいだから……。私の担当地区があまりにもな状況過ぎて……。

こうして私は第八席……。兄貴は第三席。そして夜一様は二番隊の隊長となった。

さらに夜一様は二番隊隊長と兼任して隠密機動総司令官及び、同第一分隊「刑軍」総括軍団長とか長つたらしい肩書がつく。というのも彼女はその類稀なる才が認められて、だいぶ前に四楓院家の22代目の当主となっていたのだ。彼女は四楓院家において初めての女性当主である。

だから二番隊の隊長になることも何年も前から決まっていたんだけど、この人が仕事しなくないとゴネまくって就任が遅れていたという状況だった。

ちなみに兄貴は隠密機動第三分隊「檻理隊」に入っている。そのうち分隊長を任せるとか夜一様は仰つてた。

だから私も今更ながら隠密機動に入らなくても良いのかと夜一様に尋ねてみるも――

「隠密など、お主に一番向いとらんじやろう」

当たり前のような顔をしてそう言われ、私の意見は一蹴された。

彼女の意志もそうだが、それ以外にも隠密機動で主に私と組手をしたことがあるメンバーにあの獅子女は入れないでくれとか言われていたみたいだ。そういえば、兄貴がしきりに死神になることを勧めてきたのはあの渾名が付いたときぐらいだった気がする……。

なんか、夜一様にも兄貴にも気を遣わせてるんだな……。

まあ、二番隊の要職には兄貴や副隊長の大前田希ノ進さんみたいに隠密機動も兼任してる人が多いから、二番隊イコール隠密機動みたいな見方をされてるけど、あくまでも別組織だもんな。だから、無理して入らなくてもいいんだろうけど……。

そもそも、私が現世駐在の死神になったのって隠密機動に入れないためだったんだな……。

「まあ、お主が居なくとも大丈夫じゃ。現世に居てばかりだったお主は知らんと思うが……最近、面白い奴も入ったしもう。そうじゃ、今度お主にも会わせよう」

色々と忙しくなっている夜一様と世間話をする時間は貴重だった。しかし、私も尸魂界勤務になったことだし夜一様だけではなく、こつちの人々と交流する機会がこれから増えるかもしれない。

◎月◎日 晴れ

今日は夜一様新しい側近として最近可愛がっているという隠密機動の子と会った。あー、このおかつば頭知ってる。碎蜂じゃん。そっか、ようやく彼女が隠密機動に入ってきたか……。随分と私や夜一様と歳が離れてたんだな。

何か漫画だと夜一様以外にはツンツンなイメージだけど、今はさすがに初々しい感じだ。どうやら夜一様は私を友人として紹介してるみたい。恐れ多いなあ……。

「碎蜂はお主と最初に会ったときと感じが似ておつてな。おまけに堅苦しい呼び方までも同じときてる。気が合うと思つてのう」

ああ、あれか。百合の波動でも感じ取つたのか……。碎蜂といえは……。だもんなー。そういや、初めて夜一様と会ったとき「夜一さんでいい」みたいなこと言われて兄貴はそれに従つて、あたしは「姫様」から「夜一様」にシフトチェンジしたんだっけ。

意識してないけど、碎蜂と似たような経緯で「夜一様」呼びになったのか……。

「よ、夜一様から二番隊で最も信頼している戦闘力の持ち主だと聞いています。お会い出来て光栄です」

碎蜂は私なんかに緊張しながら喋っていた。「隠密機動では私の悪口ばかり聞いてたんじゃないの？」って質問したら困った顔をしてたけど……。私は彼女と違って隠密機動に入れないからちよっぴり羨ましい。

んで、夜一様の見立てどおり割と気が合ってしまう。彼女には失礼かもしれないけど、二人とも脳筋タイプだからかもしれない。夜一様の幼いときの話や好きな料理などの話を興味深そうに聞いてくれた。意外にも素直ないい子でびつくりした。

可愛い妹分が出来た感じだ。将来的に兄貴が蛇蝎の如く嫌われるのは知っているが、彼女とは仲良くしたい。

◇月△日 くもり

うわああああっ！ 覚悟してたけど遂にあのヨン様と話す日が来てしまった。

数年前に平子さんが隊長になったから近々こうなるだろうなーって思ってた矢先の出来事だ。さすがに鏡花水月を唐突に使うなんてことは無かったから良かったけど。

平子さんの後ろからジロジロと観察されてるみたいで不快だった。藍染のこと知ってるからこそその過剰反応なのかもしれないが……。

「この方、この霊圧の大ききで本当に第八席なんですか？」とか聞いてんじゃねーよ。嫌味かよ！ エリートコースを歩んでたこいつは始末書王だった私のことを本当に知らなかった可能性はあるけど……。

かなり抑えていたのに、あの反応は潜在してる霊圧量まで測られたっほいな。

とはいえ、私なんか霊圧だけしか能のない脳筋ってことはすぐに分かるだろうし、兄

貴とか平子さんの方が警戒に値するだろうから目を付けられることはないだろう。さすがの藍染だつて私が転生者で漫画を読んで彼の計画を知ってるなんて予想も出来ないだろうし……。

しかし、やつぱり藍染はすげー奴だ。何も知らなかったら普通にイイヤツだつて思っちゃうもんな。絶対に。

現状こいつを止めることは無理だ。だつてあいつは尻尾を掴ませないだろうし、信じてくれそうな兄貴や夜一様じゃ恐らく返り討ちに遭う。

それにそれで藍染が警戒ししたらどう動くか読めなくなる分、私の未来を知ってるという優位が無くなるのも怖い。

考えとかなきやいけないのは、兄貴と夜一様と一緒に現世に行くのか、それとも尸魂界こっちに残るか、だ。

現世ルートの場合には100年くらい何もすることがないけど、最初から主人公の一護の仲間としてサポートが出来る。藍染たちからも離れられるし……。安全かもしれない。

尸魂界ルートだと藍染たちの動きを監視出来るし、一護たちがやって来たとき絶妙のタイミングで味方になれる。鍛錬も出来るし、戦闘の経験も積める。

デメリットはこっちの方が風当たりが強くなるということ。あの二人の関係者であ



る私は疎んじられるかもしれない。

あと、兄貴や夜一様がない……無能が一人残っても無力なのではとも思ったりする……。

もちろん、考えたところでそのとおりになるかは分からないけど、少しずつ覚悟を決めたほうが良い時期に来てるかもしれない——。

◆月□日 くもり

うわああああっ！ 覚悟してなかったトラブルが発生してしまったあ！

隠し持っていたエロ小説を落として拾われてしまったあ！ 八番隊の副隊長——矢朧丸リサさんに！ 一生の不覚！

「なんやのこれ？ 女の子同士で」

しかもガチ百合の内容なのも読まれてしまったあ！ つーか、なんで読むの！ エツチスケツチワンタツチ！ このドスケベが！ 興奮のあまり猛烈に抗議すると、「スケベやない！ 興味津々なだけや」と返される。

せっかく碎蜂に貸してやろうと思ったのに、この仕打ちである。

ちなみにこの後、碎蜂にこれを見せたら、すっげー顔を赤くして「ふ、不潔です」って怒られた。

でも、これを自分と夜一様に置き換えて使うものだと言えど……恥ずかしそうな表情をしつつも持って帰りよった。やっぱり趣味は合うみたいだ。

あつ！ やべー！ 矢胴丸さんが後日碎蜂に借りに行くことを伝えてなかったな。あの人、二番隊隊舎で「エロ本貸して」とか大声で言わないよな……。

そういうえば、碎蜂と知り合ってそれなりに時間が経ったけど、私は「陽葵さん」なのに兄貴は「浦原」って呼ばれてた。

やっぱり夜一様と特別っぽい仲の彼が気に食わないらしい……。

☆月〇日 雨

ちよつと前に、久しぶりにあの温厚な兄貴に怒られた。ことの発端は彼が夜一様との修行用で作ったという双極の下の修行場に連れていってもらったことだ。

主人公である一護の卍解の修得も行われた回復温泉があるところね。つーか、あいつたつたの数日で卍解覚えたんだよな。訳わからん……。

兄貴は卍解を自分が修得したから、私にも覚えて欲しいみたいなのを言っていた。

いやいや、始解修得に何年かかっただと思ってるの？ 卍解なんて、何十年かかるかわからない。つーか、あのカープ女子を具現化させても外れ能力になる未来しか見えない。

「正解って、結構使い勝手が悪い能力多いんだよね……。平子さんの正解なんて特に……。」

「とにかく、今の陽葵ちゃんの全力が見たいんで、リストバンドを外してください」  
兄貴にそう言われて私はすっかり存在を忘れていたリストバンドのある合言葉を言つて取り外す。

このとき、私は特に何も考えずにリストバンドを外してしまった。これがいけなかった――。

吹き荒れる靈力の嵐。私の靈力は兄貴の作った修行場の天井を簡単に貫いて、天空まで立ち昇る。

「早く靈圧を抑えるっス！ このままじゃ、双極が崩れ落ちる！ 早く！」と兄貴は吹き飛ばされながら大声を上げるも、久しぶりに全靈力を解放したので私も訳がわからなくなり靈圧をコントロールすることが出来ない……。

結局、兄貴は正解を使用して何とか踏みとどまり、私の体を一時的に靈圧が抑えられるように造り変えて、そのスキにリストバンドをつけてくれた。

兄貴の正解――“観音開紅姫改メ”を初めて見た。やっぱ、すげーな。迫力もそうだが、その能力もチートも良いところだ。一時的だけど、自分の体が自分じゃないみたいに強化されて完璧な靈気のコントロールが可能になったもん。

しかし、兄貴はそれくらいは自分で出来るようになってると思つてたみたいだ。始解を修得してるのだから……。

いや、リストバンドで抑えた霊圧のコントロールをギリギリで何とかしてるだけだったんだけど……。

結果、兄貴の自慢の修行場を荒らしたただけじゃなくて、双極付近で発生した異常な量の霊圧がちよつとした事件になってしまい、それを誤魔化すためにかなり彼は神経を擦り減らしたらしい。秘密の修行場のことはバレなかつたみたいだけど……。

とりあえず、だらしなない妹で済まぬ……。

しかし、この日からやたらと変な視線を感じるんだよな。藍染もそうだけど、何か色んな人から――。

## 五ページ目

□月●日 雨

兄貴が隠密機動第三分隊「檻理隊」の分隊長になって一ヶ月くらい経った。

碎蜂の兄貴へのデイスリが日増しに酷くなる。どうやら、夜一様が一番彼に信頼を寄せているのが気に入らないらしい。

とはいえ、身内の鼻疽を除いても彼は有能だ。なんで私が彼の妹なのにこんなに無能なのかわからないくらい。

まあ、確かに真面目なタイプではない。天才肌でクセが強く、研究者気質であるためマイペースなのは否めない。でも、悔しいかな……彼は与えられた仕事を100%こなした上で自由を謳歌してるのだ。ていうか、夜一様とて真面目なタイプじゃないんだから、あの二人が気が合うのは当然なんだよなあ。

「陽葵さんは身内なので、浦原第三席の怠惰な態度を矯正する義務があります  
！」

んなこと言われても、私の方が兄貴の世話になってる手前、何も言えないんだよね。真面目な無能がここにいるし。

兄貴が隊長に推薦などされたらもつと怒るんだろうなあ。

そんな碎蜂と私が最近ハマってるのが「夜一様遊戯<sup>ゲーム</sup>」である。賽子<sup>サイコロ</sup>を二つ振って丁半で夜一様役を決めて、出た目の数に応じて二人で考えた台詞を夜一様になりきって言うのだ。

私が考案者だけあって、バカバカしいゲームなんだけど、これがやってみたら中々の破壊力で、私なんて普段から視覚を封じたりしてるから碎蜂の結構上手い声真似でイケたりする。

彼女も彼女で私が夜一様の真似をすると割と興奮してくれた。まあこんなの誰かに見られたら発狂モンなんだけど……。

んで、昨日それで酔っ払いながら盛り上がり過ぎて気付いたらお互いの唇を重ねてた。つまり接吻してたってこと……。 「儂と愛し合ってはくれんか？」とか絶対に言わないセリフとか調子に乗って書いたりしたのがいけなかったか……。

それからお互いに気まずい……。こ、これはゲームの延長上ってことでノーカンでいいよね……？

▽月<sup>♁</sup>日 晴れ

今日は夜一様がいい加減に瞬歩が出来ない私に痺れを切らしたのか、直々に指導して

くれると言ってくれた。『瞬神』という二つ名を持つ夜一様直伝で瞬歩を学べるのだ。光栄な話である。

よく考えたら、10歳になる前くらいのと時から練習して出来ないって私のセンスの無さは筋金入りだと思う。

ちなみに兄貴はとづくにさじを投げていた。「そんなことより霊圧のコントロールが先つスから」とか言ってる。それもリストバンドの補助があつてやつとだからなー。

つーか、本当に難しいんだよ。瞬歩って……。隊長格は当たり前前みたいに使ってるけど……。繊細な霊力と重心の移動が必須となるこの歩法はデリケートなどとは程遠い私に圧倒的に不向きな技術だった。

それはいいとして、久しぶりに夜一様と二人つきりと意気込んでいたら、知らない屋敷に連れてこられる。

どこなのかと質問すると、『朽木家の本家』の屋敷だと彼女は答えた。朽木家っていうのは、あのルキアとか白哉とか居た四楓院家と同様に五大貴族で超名門だ。

現在の護廷十三隊にも六番隊の隊長である朽木家の当主・朽木銀嶺さんや副隊長で銀嶺さんの息子である朽木蒼純さんがいる。んで、本家なので当然この二人とも会うこととなった。

この二人とは今日が初対面だったから、めっちゃめっちゃ緊張した。

あつちは「君があゝの始末書王か……」みたいなリアクションである。それで覚えられ  
るくらいなら無名のほうがよほどマシだ。

なんで瞬歩の練習で朽木家に行ったのか疑問に思っていると、夜一様は蒼純さんの息  
子である白哉少年に教えるついでなのだという。

ちなみに夜一様は特に頼まれたとかそんなんじゃない。アポなしで訪問してる。

未来の隊長の白哉くんはまだあどけなさが残る子供で夜一様の訪問に迷惑そうな顔  
をしていた。しかし、夜一様に挑発されて瞬歩の鍛錬をやる気に……。子供の頃の彼は  
チヨロい子だった——。

そして、天才だった——。

えっと、既に瞬歩の型は出来上がっていて、夜一様のアドバイスを聞いてすぐにほと  
んど完璧にこなすって何なの？　なんで、大貴族の血筋って天才しか居ないんだ？

「陽葵も童わっはに負けるわけにはいかんじやろう。よし、お主ら鬼事で競ってみよ」

夜一様の一声で白哉との鬼ごっこ対決が始まる。子供と勝負するのは気が引けるけ  
ど、彼女の前で恥をかきたくない私は必死だった。

で、大人気なくも圧勝してしまう。必死で頑張って子供の白哉に体を触れさせなかつ  
た。

ええ、もちろん瞬歩なんて使ってない。足に霊圧を集中させて強引に脚力を強化して



爆走しただけである。火事場の馬鹿走力というのか、それでも子供の瞬歩を上回るスピードで動くことは出来た。

これには夜一様も呆れ顔である。

砂埃を屋敷の庭中に撒き散らしたので、後で銀嶺さんたちにめちやめちや謝った。彼らは人間が出来ているのか、寛大な心で許してくれる。庭の真ん中にクレーター作ったのに……。

何かワザと瞬歩を使わずに、白哉に手心を加えたとか勘違いしてた。

いや、マジで使えないんですって正直に言っても「白哉のプライドを傷付けないように気を遣わせて済まない」みたいなことを言われてしまう。

白哉は白哉で、「第八席でこれほどとは、父上やお祖父様のような隊長格になる為にはやはり血の滲むような鍛錬が必要なのだな」と口にしてメラメラとやる気を見せていた。

蒼純さんは最近、天才だと持て囃されて天狗になっていたから、良い刺激になったと嬉しそうな顔をしていた。

まさか、夜一様はそのために私を——？ 彼女の思慮は雲のように掴みにくい……。

◆月☆日 くもり後晴れ

夜一様が空席になる予定の十二番隊の隊長として兄貴を推薦するらしい。近々隊首試験を受けるそうだ。

例の修行場で霊圧のコントロールの練習をしながら、私はその話を聞いた。

兄貴は卍解も修得し、白打も鬼道も一級品。その上、頭も良いのでどう考えても三席に収まるスペックじゃない。

漫画の知識的な話をすればローズさんが一昨年隊長になったし、時期的にそろそろじゃないかなって勝手に思った。

んで、碎蜂がやっぱり荒れた。夜一様が乱心なさつたと……。

彼女に手を引かれ半ば強制的に一緒に兄貴のストーカーをさせられる羽目に……。まあ、この前のあの一件で気まづくなつた空気が解消された気がするから付き合ってたけど……。

彼女は兄貴の粗を探して夜一様に報告するんだそうだ……。

私の霊圧を知り尽くしてる兄貴の尾行なんて出来るわけないんだけど、彼もわざわざバレバレの尾行をしてる私らに声をかけるほど無粋じゃない。

この中で真剣に尾行してるつもりなのは碎蜂だけなんだけど、中々どうして彼女の尾行術も上手ではない……。隠密機動でやっていけるのか私ですら心配になってしまふほどだ。

兄貴は一日中町をぶらついて、世間話をしたり、子供と遊んだり、経費でお土産を買ったり、昼から酒を飲んだりしてた。そんな様子を見ていた碎蜂は怒り心頭である。報告書を夜一様に見せて失脚させてやると意気込んでいた。

そんな彼女は兄貴の目の前で夜一様に報告書を提出したが、「お主が喜助に懸想しておるのは知っておる」とか言われて変な勘違いをされちゃった。

どうも、ストーカーするくらい兄貴のことが好きなのだと思われたらしい。酷いオチである。

結局、兄貴は町をぶらついて脱走を企てている死神の集団の情報を集めていたのだ。死神って勝手に辞めること出来ないんだよね。ブラックなのよ、そのところ。

彼はバツチリ仕事をこなしていて、脱走者の集団を見事に一人で制圧して任務を終わらせた。さらにその足で隊首試験にあっさり合格してしまう。

とりあえず、隊長就任おめでとう。兄貴……。ついでに私も第七席に繰り上がったよ……。

碎蜂はあまりの兄貴の手腕にさすがに文句は言わなかった。何かワナワナしてたから、私の奢りで飲みに行った。

さて、魂魄消失事件まであと九年くらいか。まだ鏡花水月の催眠にはかかってないけど気を付けなきゃな……。

◎月〇日 くもり

兄貴が十二番隊の隊長になってから、同隊副隊長の猿柿ひよりちゃんからの苦情が私のところへ毎日のように届くようになった。

余談だけど、彼女にその関係で怪我を負わせたのは申し訳ない。最初の苦情のときにイライラしてた彼女は私の顔に飛び蹴りをしてきた。

目隠し特訓のおかげで霊的な衝突を感じすると反射的に霊圧を上げて防御できるようにはなった私は、それで彼女のキックを無意識に防いだものだから、彼女の足が微細骨折してしまったのである。

話を苦情内容に戻そう。兄貴は十二番隊を自分の色に染めるために研究室を作ったらしい。

んで、二番隊が管理してる蛆虫の巣という護廷十三隊に入ったものの、危険因子と判断された人たちが投獄されてる場所から涅マユリさんを連れ出して自分の部下にしたんだそうだ。

つまり、得体の知れない感じになってきてドン引きしてるみたい。

私は兄貴の人格はああ見えて割と誠実だから信じてあげて欲しいと彼女に頼んどいた。あの人は誤解されるタイプなんだけど、世話焼きだし、面倒見もよい。

でも、漫画読んではいつか裏切るだろコイツ、とか思ってたのは内緒の話。

兄貴も兄貴で隊長として悩んだりもしてたみたいだけど、平子さんにアドバイスもらって吹っ切れたらしい。十二番隊のために怒れる人間になろうと決意したりするあの人はやっぱりちよつと格好いいと思っってしまった――。

いやー、すっかり隊長らしくなってきた、碎蜂に席次を抜かされちゃった私とは大違いだよ。

◇月〇日 雨時々くもり

任務の帰りに例のアイマスクして森を歩いていたら、何か変なモンがこっちに伸びてくる気配を感じた。

私は攻撃されたから敵だと思って、それを掴んで思いつきり引つ張って、岩に思いきり叩きつけてやる。

目隠しをとって確認したら、狐目で銀髪の死神の少年が気絶してた。とりあえず全力で逃げる私。

まさか市丸ギンじゃないよね……。神槍掴んじやってたの……。いやいや、そんなわけ無いか……。

◎月♡日 雨

良く考えたら、私だけ完全催眠にかかってないのって、かかっているフリの演技とか何にもしてないんだからモロバレじゃね？

だって、この人がいつ催眠使っていると分からないから、一人だけ皆と反応違ったら変だって思われるよね……。

今さらそれに気付く。やばっ……！ 背筋がゾツとした。

特製アイマスク付けてたのって、もしかして無駄だった？ ていうかもうバレてたりする？

私ってやっぱ脳筋だわ……。

## 六ページ目と藍染惣右介の考察

▲月◇日 くもり

あの銀髪は市丸ギンだった。本人が二番隊の隊舎にいる私のところを訪ねて来たから間違いはない。

始解のコントロールにミスったからとか何とか何とか関西弁で言い訳してきて謝ってきた。饅頭の手土産を持参して。わざとらしい……。

ここで私はやらかしてしまう。ついうっかり、「藍染に頼まれたんだと思った」とか思っていることを口にしてしまったのだ。

ハツとしたけど、遅かった。だってはつきり声に出してるもん。

市丸はニタアと笑って「なんでそこで藍染副隊長の名前が出ますのん」と嘯く。

あの笑顔はちよつと不気味だった。だっていきなり市丸が死角から不意打ちしてきたなんて漫画を読んでたら藍染の仕業だと思っちゃうじゃない。それを正直に言ったのはバカだけ……。

「そういえば、何で逃げるとき瞬歩使わへんかったんですかあ？」とか「力を隠してる理由を教えてくださいよ」とか「ボクにトドメを刺さなかったのはなんでですか」とか――

―あの狐目、私が動揺しまくっているのを良いことに質問攻めにしてくる。つーか、こいつ気絶したフリしてたのかよ。かなり加減したはずだから、またコントロールをミスったと思っただじやないか。

おまけに最後は「藍染副隊長は知ってはりますよ。陽葵さんのこと、色々と……」ときたもんだ。

何のことかと尋ねてもニコニコして教えてくれない。「また来ます」じゃねーよ。お前、五番隊だろ？ 平子さんに告げ口するぞ。

☆月◎日 くもり

二番隊に他の隊からの密偵がいるのではという噂が立った。何やらウチの隊の情報が入った書類が紛失したということらしい。

隠密機動も多い二番隊でスパイを働くとはなかなかいい度胸である。いや、それだからこそか……。

恐らく狙いは隠密機動の抱えている機密だろう。腹を探られて困る連中が多いからな……。

碎蜂など怒り心頭でスパイは自分が捕まえてみせると鼻息を荒くしていた。結構大きな声だったけど、そのスパイに聞かれてはいないだろうか……。



しかし、ああ見えて夜一様は警戒心が強い方だし、簡単に機密なんて盗まれやしない。スパイとやらは相当の手練と見て間違いないだろう。

碎蜂ではないが、私も注意して周りを観察せねば……。

あわよくば、スパイを見つけて夜一様に褒めて貰おう。

◆月◎日 晴れ

最近、任務に出かけるたびに大虚メノスに出くわす。ギリアンばかりだけど。

大虚メノスもちよつと離れた位置から攻撃してきたり、行動パターンがいつもと違っているので不気味な感じだ。

二番隊の他の隊士も近くにいることが多いので、巻き添えを食らわせないように動かないとならないから、かなり面倒である。

あいつら、意外とすばしっこい奴もいるからぶん殴るのも大変なんだよね。でも、紅鯉の力で霊丸ぶち当てる方が難しいから結局ぶん殴って倒す羽目になるっていう。

最近、マジでこんなんばっかり。避けられると確実に地面に底の見えない穴が空くから、殴るのに神経すり減らしてる。

これ、今はいいけど破面とか相手にするようになったらどうなることやら……。

夜一様から被害を出さないように任務を遂行し続けられれば第三席まで上げてもら

えるみたいなことを言われてるから、かなり気を付けてるんだけど——素早い大虚相手だとそももいなくなる。始末書の山から解放されたと思つてたのに……。また、出世が遠のいた……。

藍染のことで悩んでるのに、まったくツイてない。

♣月\*日

ここんところ、毎晩碎蜂と酒を飲んでる。彼女との付き合いもそろそろ長くなつてきたな。初めて会つたときは初々しかつたけど、今は頼もしい感じに成長してる。

私の席次も追い抜いちやつたし……。やつぱり妹みたいに思つてたからそれはちよつぱり悔しいかな……。

「将来的には陽葵さんが三席となり、私が副隊長になるので、二人で夜一様を支えていますましよ」

——うん、碎蜂の中ではこれからもずっと私の上司でいるつもりみたいだ。まあ、上の立場になつたからとて飲みの席では敬語で話してくれるんだから、彼女は礼節を重んじてくれるいい子なんだけど……。

しかし、こんないい子が性格変わつちやうんだよな。夜一様が兄貴と居なくなつたら……。

彼女の夜一様への気持ちを考えてとそれもわかる気がする。あの人はいつも眩しくて……私たちの太陽のような人だから――。

◎月○日 雨のちくもり

今日は兄貴に久しぶりに会った。彼が十二番隊に行つてから中々会えない日々が続いていたから……。

「大<sup>メソスタグランデ</sup>虚の出現率が陽葵ちゃんが任務に出たときだけ100倍に上がっているんですけど、何か心当たりあるっスか？」

ひゃ、百倍？ そ、そんなに大虚つて出ないの？ それも私の時だけ……明らかに異常じゃねーか。

いやー、心当たりって言われても……やっぱり藍染が何か企んでるからなんかな？ 大虚を私にけしかける意味とか全然分かんないけど……。

でも、そんなことを言ったら色々と変な事になるし……。分からないって答えておこう。

兄貴は「そっスか」とだけ答えて二番隊隊舎から去っていった。うーん、兄貴のことだから私が嘘ついても分かってんだらうな。

でも、余計なことと言わんほうが良いと思うんだよ。私は……。

それにしても、これが本当に藍染の仕業として、やつは一体何を考えているのだろうか……。



「浦原喜助が妹にようやく接触したか……。ほう、そして彼女は心当たりがないと答えたと……。面白い……。」

二番隊に潜ませている密偵からの報告を聞き、私は彼女について考察する。

——浦原陽葵、うらはらひまりこれほど一人の人物に興味を惹かれたのは初めての経験かもしれない。

私の叡智を以ってしても推し量ることが出来ない人物がまさか護廷十三隊などに居ようとは。

私が天を握るにあたって警戒すべきは総隊長の山本元柳斎くらいだと思っていたのだが……。

あの浦原喜助の妹は読めないという点で彼を遥かに凌駕するほどの危険因子だ。山本元柳斎など、如何に力があるうとも対策は幾通りも思いつくのだから。

最初に彼女を知ったのは平子真子が雑談をしている様子を背後から見ていたときだ。ただならぬ潜在能力を内に秘めた金髪の女はどこか既視感があった。

聞けば、二番隊の第八席だという。私としたことが思わず聞き返してしまった。この実力でなぜ八席なのかと。

隊長格にも勝るとも劣らない霊圧の大きさ……どこの隊でも三席以上は任せられて然るべきだろう。彼女は始末書を幾つも書くほどの不祥事を起こしているからだと答えたが、私の目は誤魔化せない。その内に秘められた野心を……。

その証拠に初対面の私をあれほど警戒してみせており、しきりに斬魄刀に意識を集中していた。認めたくはないが、同類の臭いを感じ取ったのだろう。私と同様に……。

その後、私は彼女について調査をした。そして予感確信に変わる。あの女はあの浦原喜助の妹であった。

浦原喜助——唯一、私が頭脳において自身を凌駕すると認めた存在。野心がない腑抜けだと思っていたが、あの兄妹は揃って曲者を演じ、野心をずっと隠していたのだ。私とは異なる方法で……。

浦原喜助は確かに切れ者で愚鈍な連中の中では有能と言っても差し支えない人物であるが、所詮は想定内に収まる程度の人物だ。

妹の陽葵は違う。調べれば調べるほど不可解さが増す。

破壊行為によつて出世を無理矢理遅らせていることは解る。しかし、瞬歩をはじめとする技術や鬼道を一切使わないことには何の目的があるのだろうか……。

無能を過剰に演じているというならば、わざわざ正解を使っていると主張するかの如く霊圧を噴出させるような行為の説明がつかなくなる。

さらに、もう一つ大きな疑問がある。私の鏡花水月が効いていないということだ。気が付いたのは、市丸ギンを彼女にけしかけた時のことである。

私は浦原陽葵の霊的な感知能力もすべて含めて別方向からの攻撃だと錯覚するように催眠を仕掛けた。しかし、こともあろうことに彼女は市丸ギンの神槍を掴んだ。

霊圧差によって弾いたなら予想の範囲内だった。催眠状態にあつて、高速で迫る斬魄刀を掴むという行為は私の予想を覆してくれた。

ここに一つの結論が生まれる。浦原陽葵には鏡花水月が効いていない。つまり、それは見せたと思っていた始解の解放を見ていなかったことを意味する。

市丸ギンからの報告だと、彼をけしかけたのが私だということを知っているらしい。それをわざわざ伝えたのは何か狙いがあつてのことなのか……。それとも私に対する挑戦なのか……。

この日を境に、彼女の観察をさらに強化した。メノスグランデ大虚との戦闘データの採取から、真

央霊術院時代の成績表を入手まで徹底的に浦原陽葵について探りを入れた。奴も天を握ろうと野心を持っているならば、何らかの痕跡が残っているはず……。

しかし、私の欲しい答えは一切手に入らなかった――。

いいだろう。不確定要素があることもまた一興だ。一つのことには縛られて大義が果たせぬならば、私はそこまでの存在だったということだ。

計画は予定通り実行する。浦原陽葵を侮るつもりは無いし、浦原喜助が何かには勘付いたとしても、私には彼らを無力化する手段があるのだから――。



◆月☆日

魂魄消失事件が発生した。そして、69こと六車拳西率いる九番隊が調査に乗り出すこととなった。漫画と同じ流れである。

さて、私はどう立ち振る舞えば良い？ 兄貴たちを信じて静観すべきか……それとも……。

## 七ページ目

◆月〇日 晴れ

今日は書くべきことがたくさんある。

まず魂魄消失事件の調査をしていた、九番隊の隊長である六車拳西さんと同隊、副隊長の久南白さんの霊圧の反応が消えた。

瀨霊廷はこれを最悪の事態と判断して、現地に増援を送ることに……。

ひよ里ちゃんを九番隊に行かせていた兄貴は、彼女がまだ戻ってこないことを心配し自分を現地に行かせて欲しいと名乗り出たらしい。

しかし、漫画と同様に総隊長である山本元柳斎はそれを許さなかった。

三番隊隊長・鳳橋楼十郎さん、五番隊隊長・平子真子さん、七番隊隊長・愛川羅武さんを現地に行かせることを決定。更に、鬼道衆副鬼道長・有昭田鉢玄さんと八番隊副隊長・矢胴丸リサさんが加わり、現地への救援部隊としてそこに向かうことになったとのことだ。

夜一様はそこまで私に伝えると、「喜助ならおらんぞ」と兄貴がいないことを私に教えてくれた。どうやら兄貴はこっそり現地へ向かったみたいだ。彼女は自分に一言も伝



えずに行ってしまったことが不満だと口を尖らせていた。

ここまででは漫画と同じ展開のだが、そこから予想だにできなかった話が舞い込んでくる。

夜一様はさらに二番隊に仕事が出来たと口にしたのだ。

なんと、瀟靈廷を中心にして例の魂魄消失事件とは真逆の方向のとある場所に大虚メノスが大量発生したらしい。

で、各隊長が出払っている今、ここ10年での大虚討伐数メノスが断トツで一番多い私と、隊長であり、確かな戦闘力を持つ夜一様がいる二番隊に連中討伐の白羽の矢が立ったのだ。

「魂魄消失事件に続いて事件続きじゃのう。まるで、何か良くないことを企んどう奴が居るみたいじゃ」

夜一様は戦闘の準備をしながら、私にそう声をかけた。それは大事なことです、服を着てから言ってほしかった。思わずガン見しちゃったじゃないですか。目に焼き付けるように。

同性の前でももう少し恥じらってもらいたい。やっぱ、色気が凄いつすわ、夜一様は。

しかし、このタイミングで二番隊に出撃要請って……。藍染のやつ……。マジで私を警戒してんのか。こりゃ、このあと兄貴と一緒にスケープゴートにされそうだな。とにか

く、大虚をパパッとやっつけて早く戻ろう。

碎蜂と副隊長の大前田希ノ進さんも共に大虚討伐に向かった。

「まさか、十体もの大虚が一度に出てくるなんて——夜一様、お怪我は……?」

「ある訳無かろう。んっ? まだ出てくるといのか……。それもあの数は……」

「百を超えている! 至急増援を……!」

「良い。陽葵……! 周囲に結界を張ってやる。思う存分戦れ……! 大前田! 準備しろ!」

百体の大虚……! 藍染のやつ、何が目的でこんなに派手なことを——。私を足止めするためだけにこんなことするなんて考えられないし……。

大前田さんと夜一様が鬼道で幾重にも重ねて結界を張る。結界の中は私と百体を超える大虚の群れ……。

夜一様は思う存分殺れと仰った。けどリストバンドを外すと兄貴の作った修行場すら破壊してしまったし結果も壊しかねない。それにコントロールが不可能になるのは避けたい。だから、この状態で奴らをぶっ倒す。

つい昨日のことだ。兄貴がリストバンドによる霊圧の抑制量を強くしたのは。彼曰く、私の霊圧を十分の一まで抑えられるように調節したらしい。

さらに私の任意で合言葉を言わずとも、以前までの抑制量である五分の一まで調節で

きるようになっていた。

「陽葵ちゃんの枷としてはこれでも小さすぎるくらいですけど、これならかなり霊力のコントロールは楽になるはずですよ」

兄貴の言ったとおり、今日は調子よく霊力をコントロール出来てる。これはありがたい。紅鯉アカカサを片手に私は大虚の群に向かって走り出した。

打つ！ 撃つ！ そして討つ！ 狭い範囲に敵が密集していて、リストバンドのおかげで変な加減をせずにバットを振ることが出来るのでドンドン大虚を狩れる。

いやー、今まで本当に要らんことに神経を削られていたんだな。霊力のコントロールさえ出来たら、ちゃんと当たるじゃん。

と思っていたら、一体の大虚がめっちゃめっちゃ素早かった。私のバットが当りやしねえ。その上、高速で虚閃セロを撃ちまくって来るから鬱陶しいことこの上ない。あの大きさは——中級大虚アージュールカスだな……。今まで倒したどの虚よりも速い……。

夜一様に境界はそんなに長く保たないと急かされた私は焦って頭の悪い作戦を実行した。

霊圧の抑制を以前までと同様の五分の一に調節して、バットに霊力を断続的に補給しながら縦横無尽に振りまくった。

すると散弾銃の如く霊気の弾丸が四方八方に飛んでいく。要するに狙うことを止め

て下手な鉄砲いつかは当たる作戦を実行したのだ。考えることを止めたって言ってもいい。

全方向に靈丸をグミ撃ちをする私。周囲に尋常じゃない量の砂埃が舞い上がる。

「——はあ、はあ……。やったか……!?」

よくわからんけど、負けフラグみたいなセリフを吐いちやった。これはオサレじゃない……。

でも、やったた。

アジューカスもだけど、ついでに残ってた十数体のギリアンも倒してたから悪い作戦じゃなかったみたい。つーか、最初からこれやつときや良かった。

いつの間にかヒビが入りまくっていた結界が解除され、私は夜一様のところへ駆け寄る。

彼女は汗だくになりながら——。

「多少、やり過ぎであったが……大儀じゃったな——」

と、言葉をかけてくれて。私の肩を抱いて笑顔を見せてくれた。私よりも疲れてたけど……。

良く考えたら、結界なんて張るよりも夜一様が私と一緒に戦った方が早かったんじゃない。それを彼女に尋ねてみると、夜一様は当たり前だと言わんばかりの表情で答えて

くれた。

「阿呆。それだと、お主の手柄ではなくなるじやろうが。……しかし、今度は補助が無くてもこのくらいの武勲は立てねばならんぞ」

なんと、こんな緊急時に彼女は私に手柄を立てさせたいと思つていたらしい。いつまでも出世しない私にここまで気を遣わせていたなんて……。

大虚<sup>メノス</sup>百体討伐は思つた以上に大事だつたらしく、魂魄消失事件の報告を待つている山本総隊長の下に呼ばれた程である。ちなみに会話するのは今回が初めてだ。

「浦原陽葵、第七席。今は有事故に、直ぐという訳にはいかんが……その武勲に相応しい報奨を用意しよう」

総隊長からそう声をかけられた私を見て夜一様は嬉しそうに微笑んでいた。

出世できる事は嬉しいけど、このあとの兄貴たちのことを考えると……どうも素直に喜べない。

「浮かない顔をしておるのう。喜助がな、妹を頼むと煩いのでな。彼奴<sup>あやつ</sup>がいつになく真剣な顔をするものじゃから。儂に出来る限りのことをしてやつただけじゃよ。まさか、こんなに早く機会が巡つてくるとは思わんかつたがのう」

夜一様が強引に私に武勲を立てさせた理由を話した。

まさか——兄貴は魂魄消失事件の話聞いたときから自分が瀟靈廷から居なくなる  
ことまで想定して私のことを夜一様に——。

兄貴はそこまで私のことを——。

そして、この日……兄貴はもちろん。誰も帰ってこなかった……。やはり、漫画と同  
様に兄貴は嵌められてしまうのだろうか……。

◆月◎日 くもり

夜が明けたら兄貴と鉄裁さんは捕まる。四十六室に……。

藍染の根回しは完璧だろうからそれは覆せないだろう。私には何もして来ないのが  
不思議ではあるが……。

やはり、私は兄貴や夜一様から離れたくない。彼は色々と考えがあるのでろうし、私  
を巻き込みたくないと思ってるんだろう。でも、私は出世なんかよりあの二人のために  
動ける方が幸せなんだ。

だから、私はあの修行場に向かった。彼らが来るのを待ったために——。

「驚いたっスね。陽葵ちゃんがここにいるなんて。夜一サンに聞いたんスか？」

兄貴の言葉に首を横に振る夜一様。彼女も私がここに来ると思っただけでなかつたみた  
いだ。

虚化した平子さんたちや、研究中の特殊な義骸など……尸魂界から現世に逃げる準備は整っている。

私もついて行きたいと二人に力説した。しかし、彼らはそれを許してくれなかった——。足手まといだからだろうか……。

「違うっすよ。藍染惣右介が陽葵ちゃんを恐れてるからっす。一度、瀨靈廷から脱走すると簡単には戻って来れない。危険ですが陽葵ちゃんには藍染サンの計画を食い止める切り札としてこつちに居て欲しいんすよ。もちろん無理にとは言いませんが……」  
兄貴……、私のことを買い被り過ぎだつて。でも、何か私のことを認めてくれてるみたいで嬉しい。

「百体もの大虚を討伐したお主は英雄じや。喜助の罪を問われるようなことにはならんじやろう。二番隊……儂の抜けた穴を埋めてほしい」

良く考えたら、私までいなくなったら碎蜂が一人だしな。何だかんだ言つて友達付き合ひも長いし……。

一護たちが百年後にこつちに来たとき……二番隊だけでもサポートに回ることが出来れば或いは藍染を破面編の前に倒したり出来るかもしれない。

二人に諭されて、私はこつちに留まることにした。いざとなつたら藍染だけでも刺し違えてでも倒す覚悟で——。

夜一様……、百年後にまた会いましょう。ついでに兄貴も……。

◆月☆日

兄貴たちが消えたという話で瀨靈廷は大騒ぎになる。もちろん私も尋問された。分からないって言ったら特に突っ込まれなかったけど。

隊長格が何名も居なくなるという事態は重く護廷十三隊にのしかかる。先の大虚討伐の功績をもって、私は二番隊の副隊長に昇進した。隠密機動に属さず二番隊の隊長格になったのは異例中の異例らしい。ただ、隊長にはさせられないらしく、なりたいたいなら別の隊に行つてほしいと言われた。

いつの間にか大虚百体討伐が二つ名みたいになつていて、逸話のような感じで瀨靈廷中に広まつている。周囲からさらに化物扱いされるようになって、ちやつてるし……。

やはりというか、当然だが碎蜂は荒れた。兄貴と駆け落ちみたいに夜一様が消えたのは彼女に大きなショックを与えたからである。

正直見ていられなかったのも、私は強引に彼女を飲みを誘つて小さな嘘をついた。

「夜一様は瀨靈廷に迫りくる危機を回避させるために私たちを信頼して二番隊に残し、こちらを去つていかれた。必ず彼女は帰ってくる。私たちはいつ彼女が戻つて来ても良いように二番隊を守つていこう。夜一様は碎蜂がいるから安心して出ていけると



言っていた」

なんてことを言った後、私は後悔する。悲しみに暮れる碎蜂がこんな言葉くらいで元気になるはずがない、と……。

「なぬ！ 夜一様が私に二番隊を……だと!? そうか！ 信頼してるからこそか！

夜一様！ 任せてください！ この碎蜂があなたの二番隊を守り抜いてみせます！」

背中に炎のエフェクトが見えるくらい彼女は燃えに燃えて覇気に満ち溢れた表情を見せる。

ま、まあ、何となく分かっていたよ。お互いに根が単純なのが似てるから……。元氣になったのなら何よりだ……。

藍染がヤバい奴つてことは絶対に黙つところ。それが彼女のためである。

☆月◎日

やる気になった碎蜂の成長は目覚ましく、あつという間にミサイル卍解を修得して、隠密機動のトップまで駆け上がった。ちなみに碎蜂はこの卍解を氣に入ってる。夜一様を卑劣な罠に巻き込んだ主犯にキツイ一撃をくれてやるのだそうだ。

ここで大前田希ノ進さんは引退。彼女が二番隊の隊長となる。つまりまたもや彼女と立場が逆転してしまったということだ。

ともあれ、私が副隊長であること以外は漫画と変わりないと思って安心していた。しかし、彼女が隊長になったのと同時に意外な人物が二番隊に入ってきた。な、なんでお前がこつちに来るんだよ！

「そら、陽葵さんに憧れとるからに決まってますわ」

新しい二番隊の第三席となった市丸ギンはわざとらしいセリフと共に私に挨拶した。「また来ます」ってこういうことかよ！

さらに彼の口から驚きのセリフが飛び出す。

「なつてあげましょか？ 陽葵さんのスパイに。ボクは藍染隊長に言われて陽葵さんを監視に来たから、二重スパイってやつやね。あんたの下に付く言うてんのや」

あつげらかんとした表情で耳元で囁きながら私の監視に来たことをバラす市丸。そして、あつげらりと藍染から寝返るみたいなことを言ってきた。

こいつの腹も読めない。確かにこいつの目的は藍染を倒すことなのは知ってるから利害が一致するのは確かだが……。

「別に信用せんでもええですよ。ボクが一方的に情報渡しますから。このこと、藍染隊長には内緒にしといてくださいいね」

こうして新生二番隊は新たな一步を踏み出すことになる。

漫画よりも精神的に安定してやる気満々な碎蜂が上司で何を考えてるかかわからな

い市丸が部下になつたけど、一護たちが来るまで私は乗り切れるだろうか――。

## 八ページ目

●月◇日 くもり

やることがない。余計なこととはしないと決めてるから……。

特に何か藍染にちよつかいかけようとも思ってたないし。割と暇である。

藍染も藍染で何か勝手に警戒してくれてるのか知らんけど、市丸を監視につけてるだけで何もしてこない。もう夜一様がいなくなつて30年くらい経つただけだなー。

リストバンドも十分の一に抑えるようになったからなのか、成長期がようやく落ち着いて来たからなのか、霊圧の上昇が緩やかになってくれた。これなら、ちよつと体を慣らせば何とか普通に戦うことが出来る。

いやー、今までみたいに霊圧の上昇が体が慣れるよりも早かつたら困ったことになつてたよ。涅マユリさんにでももつとすごいリストバンド作つて、頼まなきやいけなところだった。

彼には「無間」みたいな修練所作つてくれつて頼んだりしたけどね……。

最初は断られた。でも、「兄貴でも無理だったから涅さんでも無理かー」みたいなこと言ったら割と乗り気になってくれる。漫画で兄貴に対抗意識を燃やしていることは知っ

てるからね。

もちろんタダで訳にはいかなかった。被造死神計画「眠」に協力するために、異常に霊圧が上昇する私の細胞を提供してほしいと言われて、血液を渡すことになった。

しかし、さすがは兄貴と並ぶチートな天才マユリ様だ。修練場の大きさは36畳くらいと手狭だけど、少々暴れたところでビクともしない。

さすがにリストバンドは怖くて外せないけれど、上昇する霊圧を慣らすのには最適な場所である。この修練所のおかげで私は始末書の中から解放された——と言いたいんだけど、五分の一に調節するとやはり地形が簡単に変わってしまう。

副隊長になったのに給料が上がらないのは修繕費が普通に引かれるようになったからだ。地面にクレーター作る生活から解放されたい……。

それにしても「眠」計画って何だったっけ？ マユリさんが今一番力を入れてる研究するのは阿近さんから聞いたけど……。思い出せぬ……。

◎月<sup>☽</sup>日 くもり時々雨

市丸のやつが卍解を覚えたらしい。「13kmや」とか「音速の500倍」とかで話題となったアレである。

まあ、嘘なんだけど……。

確か、毒攻撃だったっけ……。藍染が変な形態に変化するきつかけになった。

つーか、こいつ何気に隠密機動に向いてるのか、戦果を次々とあげて基本的に男に厳しい碎蜂すら何の文句も言わせなくらいの優秀さをみせている。

大前田希ノ進さんの息子である大前田希千代・第四席も彼のせいで出世が遅れて焦ってるみたいだ。「聞いてた話と違う」って父親に愚痴ってるらしい。

そんな市丸は私に卍解修得を自慢げに話して、私の卍解はどんな能力なのかと聞いてきやがる。うるさいな……。卍解どころかこっちは瞬歩の修得に一生懸命だよ。

スピードタイプに翻弄されていつも物量作戦を強いられるからな。

「なんなら、陽葵さんにだけ見せてあげましょか？ まだ藍染隊長にも見せてないんやけど」

みたいなことを言ってくるけど、漫画で読んで知ってるし、碎蜂と飲みに行く予定があつたから断った。

でも、間違つて「毒は怖いから」とか言っちゃったもんだから、市丸は珍しく目を見開く。なんか、こいつの前だと失言多いな私。

「やつぱ、陽葵さんが一番怖いわ」とニヤリと笑っていたけど、変なこと藍染に告げ口しないよね。ていうか、藍染も知らない秘密知ってるから、私のこと殺そうとか考えないよな……。

本日の教訓——口は災いのもと。

◆月♡日 晴れ

最近、碎蜂がさらに修行に熱を入れている。もつと強くなる必要があるとことある毎に口にしながら。

どうも、鬼道と白打を組み合わせた新しい技を開発してるらしい。

何でそんなに焦ってるのか聞いてみた。理由を聞くと、どうやらそれは私のせいみたいだ。

「戦闘で陽葵さんばかり派手な活躍をするから、隊長の私のハードルが上がっている。期待を裏切るわけにはいかない」

隊士たちの中で「碎蜂隊長最強説」みたいな噂が流れてるらしい。

「大虚百体討伐」の通り名を持つ私と真央霊術院を最速で卒業した神童で若くして卍解を修得したと言われている市丸の上司である碎蜂はすべての隊長の中でも最強なわけではないという説みたいだ。

私から見ると碎蜂は十分強いけどなー。鬼道も白打も出来て、スピードは一級品だし……。

そんなことを告げてても彼女は意見を曲げない。私が隠密機動に居たら私が隊長に

なっていたはずだからと譲らないのだ。

「あの晩……大虚の大群を一人で片付けたあなたを見て……夜一様ほどではないが、ちよつと見惚れてしまった。それが今は堪らなく悔しい」

頬を赤らめながらそんな昔のことを今さら告白する彼女。こ、この人こんなに可愛いかつたつけ？ そんなことを思いながら、酒も入ってる私は碎蜂と無言で見つめ合う。

いやいや、何を変な気を起こしてるんだ。私には――。

「夜一様が居るんだから」

同じセリフを同時に吐いて首を振る私たち。何やってんだ。お互いにいい歳なのに……。

私も碎蜂もどつか拗らせてんだよなあ……。

◇月◎日 くもり

朽木白哉が結婚した。なんやかんや、子供の頃から彼のことを知ってる身からすると自分の加齢を感じてしまい何とも複雑である。

緋真さんという女性は確カルキアのお姉さんだったよな。夜一様のスキヤンダルがあつても、彼が死神になつてからは私と半年に一回くらいどつかで飲みに行く仲だった。なので緋真さんも紹介された。一人で行くのも何か恥ずかしかったから、碎蜂と市丸を



無理矢理連れてく。

市丸と白哉は二人とも護廷十三番隊のホープで次期隊長候補と噂されてるので、何か煽りあつてくれねーかなと思つたけどそんなことはなかった。

しかし、こいつも落ち着いたよな。昔はすぐに熱くなるタイプだったのに……。やつぱ親父さんが亡くなつてからかな。冷静沈着になつたのは……。

緋真さんが「皆さん、ご結婚の予定などは——」などとぶつ込んだ質問をして三人とも色々と拗らせているのを思い出して悶えたのは内緒の話だ。市丸はへらへらしてるけど、知ってんだかなんか私は。

ともすると、ルキアたちが真央霊術院に入ってくるのも間もなくということか……。緋真さんの体つて弱いんだよな。

♡月◆日 くもり

真央霊術院に大メノスクランデ虚退治の専門家という訳のわからん肩書で特別講義を行うこととなつた。

講師なんて生まれてこの方どころか、前世でも経験がない。

そもそも、人に物を教えるほどのことを成してないし……。「大虚の倒し方はぶん殴ることです」なんて言えるはずがない。

取り急ぎ、碎蜂に泣きついた。脳筋仲間といえど仲間だが、私などよりもよっぽど常識人だ。

何とか講義っぽい感じが出来るように、理屈を並べた文章を一緒に作成する。ありがたいえ……。もう碎蜂には頭が上がりません……。

「二番隊の宣伝も忘れないで下さいよ」と微笑みながら私に伝える碎蜂は天使にしか見えなかった。

そして、講義は無事終了。私の名前つてそれなりに院生にも伝わっているのか結構質問攻めに遭った。

特進クラスの一組での講義では阿散井恋次、雛森桃、吉良イヅルがいることを確認。彼らはすでにかなり優秀な人材だと人事からお墨付きをもらってるらしい。

その後、他のクラスの講義もして緋真さんに似た女の子を発見する。どう考えてもルキアだよなー。

彼女は私が特進クラス出身じゃないと聞いて嬉しそうにしてた。どうも、友人たちに先を越されて劣等感を抱いてたらしい。

院生時代はどんなことをしていたのかと聞かれて、目隠しをして過ごしたりとか、霊圧を吸収されながら生活してた（現在進行形）とかは流石に答えられなかったので、基

本的なことをひたすら反復練習したと答えておいた。

まあ、基本をずっと続けてまだ瞬歩を覚えられないんだけどな……。

ともあれ、漫画に出てきた人物が次々と現れると時間が過ぎたって感じがするな。

◇月☆日 晴れ

市丸と飲みに行った。なんかそろそろ隊長にならないかという話が出てるらしい……。藍染が次の計画を進めるためにそんな指示を出してるのだから。その証拠に東仙もいち早く隊長になっている。

「藍染隊長は不気味がつてますわ。陽葵さんのこと。ボクも怖いですもん。結局、肝心なことはよーわからんし。まあ、隊長になったとしても、よろしゅうお願いしますわ」彼は隊長になったとしても二重スパイを継続すると言ってきた。藍染にはそう言つて私を安心させる作戦だと伝えてるらしい。

こいつみたいなの駆け引きをするタイプ本気で苦手なんだよな。信用させて後ろからグサつてするとかあると思うし。割と聞き上手なところもあるから酒を飲む上じや悪いやつではないんだけどね……。

それに、こいつの『毒』はほとんど一撃必殺だもんな。なんで、碎蜂よりも隠密機動向けの能力なんだよ……。

市丸が出ていったら碎蜂は寂しがるだろうな。優秀な部下で人当たりも良いこいつのことをそれなりに気に入ってるし。

希千代くんは喜びそうだ。席次が一つ上に行くから。喜びが露骨過ぎて碎蜂に蹴られそうだけど……。

この子の出世が遅れてるのは私のせいだから可哀想なところはあった。かなり有能な子なのに……。

ともあれ、市丸の隊長就任はもうちよつとかかるだろう。漫画と違ってこいつ三席だし……。兄貴の例もあるから三席から隊長でもまったく問題ないけれど、副隊長からの方が楽なのは間違いない。

それにこいつ、なんか知らんけど出来るだけ二番隊に居られるように引き伸ばすとか藍染に言ってるみたい。居心地が良いとか言ってるけど、どこまで本音なんか……。

◇月●日 くもり

珍しくマユリさんに、十二番隊舎にある技術開発局に呼ばれた。

行ってみると技術開発局には小さな金髪の少女がいた。はて、こんな子漫画にいたっけ？

「君のおかげで『眠計画』が想像以上に早く成功したのだヨ。あの男の血縁の細胞を

使ったのは気に食わんが……」

マユリさんの機嫌がめちやめちやいい。

いや、ちよつと待って。細胞つて……、あのと時渡した血液のこと？ で、この女の子……。えつと、その……。まさか……。

私の頭の中である名前が思い浮かんだのと同時にマユリさんは口を開く。

「——涅ネム。まあ、君の血液を使ったから君の姓をとつても良かったんだが、どうもイメージがわるくてネ」

ネムって、マユリさんの娘というか……最高傑作のアレだよな？ わ、私の血液からって嘘でしょ……。この薄い金髪は似てるけど……。うわあ……。……。

——こんなにドン引きしたのは初めてだった。つーか、私はなんつーことに力を貸したんだ……。

「君と同様に成長と共に霊圧が上がる性質も引き継いでいる。上昇率は君に遥かに劣るが問題ない。無から生まれし成長し続ける被造死神という全死神の夢を叶えたのだからネ！」

まさか、この子も私みたいに霊圧が上がり続ける体質をもつてるのか……。この人、やつぱりヤバイ奴だったな。修練所作つた代償が思つたより精神的にくる。

「もう少し成長したら、君の戦闘データを間近で取らせるために、君にこれを貸してや

ろう。娘だと思って好き勝手に廻っても構わんヨ」

頭が痛くなってきた。子供が出来ることなんて一度もヤツてないのに母親にされたの？ このマッドサイエンティストめ……。

この日は涅ネムが近い将来、二番隊にやつて来ることが決まった——。ホントにどーしよ……。

二番隊が漫画とかけ離れていく——。私はしようがないにしても、市丸に続いて涅ネムが入るなんて——。

## 九ページ目

◇月◎日 晴れ

ヤバイ……！ ネムがかわいい。可愛いじゃなくて、かわいい。小さいときの自分みたい……。いや、小さいときの自分が可愛かったとは思ってないけど。

二番隊に配属されて、彼女はすぐに我が隊のアイドルになってちやほやされてる。

私もだけど、特に碎蜂はそれ以上に猫可愛がりしていた。物覚えが私の細胞を使ったとは思えないほど良くて、何でもすぐに修得するので、碎蜂はかわいい弟子が出来たと喜んで色々と技を教えたりしてる。

ええ……、私が出来ない瞬歩など速攻で覚えてるし、白打の高等な技も修得済だ。霊圧のコントロールが多少苦手なのは私と似てるみたいだけど……立っ瀬がない。

隊長の碎蜂には……ネムが二番隊に入るにあたって「技術開発局が無から生み出した被造死神なんだって」みたいな説明をして、私の細胞の情報も使われてるということも話した。

彼女は「なるほど……」と腕組みをしながら言っていたけど、絶対に理解してない。

長年の付き合いの私にはわかる。目が泳いでたから。

「またようわからんことを。十二番隊と結託して何を企んではりますのん？ 目的を探れって藍染隊長がうるさくて敵わんわ。おもしろいからええんですけど。ヒントくらは教えてもらわんと」

市丸はネムの頭を撫でながら、私にそんなことを聞いてきた。

藍染は私の性質を受け継いだネムを自らの希望でマユリさんに造らせたと思ってるみたいだな……。んなわけねーだろ。

ていうか、なんで市丸までネムを可愛がってんだよ。そんなキャラだったっけ……。「何かすぐにオレより強くなりそうなんっすけど、強さで席次が決まる十一番隊みたいなことしないですよね？」

希千代くんだけ、ネムの存在に不満げだった。未だに四席なのに、席次が落ちる可能性がないかと焦ってるようだ。

碎蜂が彼女をかわいがっていることが怖いとも言ってた。とりあえず彼にはネムは将来的には十二番隊に戻る予定だから……。と告げておく。

「陽葵様の戦闘の基本は打撃ですか？ 他の方と違って特に急所を狙っているようには見えませんが……。目的は何なのでしょう？」



私の戦闘データを採取する命令を受けてるネムは基本的に私についてくる。まさか、寝室まで付いてくるとは……。どこまで忠実なんだ……。

とりあえず、難しいことは考えずにどこでも良いから当てることにだけ集中してって答えておいた。ネムはよく意味が分からないのか首を傾げる。マユリさんは合理主義っぽいから私の脳筋っぷりと思惑パターンが合わないんだらうな。

つーか、この子を脳筋の私と隊長に預けて大丈夫なんだろうか……。私が教えたのって靈力込めた右ストレートぐらいなんだが。

### ★月☆日

なんか、市丸が巨乳の姉ちゃんと話してたから、絡みに行ってみる。相手はやっぱり松本乱菊ちゃんだった。

つまり市丸の想い人だ。こいつのすげーところはこの人の為にずうーと自分を殺して牙を研いでいたところなんだよな。その根性がヤバイ。

「ボクの怖い上司や」みたいな感じで彼は私を乱菊ちゃんに紹介した。誰が怖い上司だ。誰よりも優しいだろーが。そう言っつて市丸の頭を小突くと乱菊ちゃんはクスリと笑って、漫画どおり彼女は気さくな感じで十番隊にいと自己紹介してくれる。

そういや、最近だよな。十番隊の隊長に志波一心くんがなったのは。主人公一護の父

親には一度会ってみたいな一。

乱菊ちゃんは今副隊長になる予定だと言ってた。市丸の席次を抜くと胸を文字通り張っていたけど、こいつも近々隊長になるから……。

ともあれ、最近は妙に平和な日々が続いてくれて何よりだ。

◇月☆日 晴れのち雨

去年くらいから、二番隊に振られる仕事の割合が隠密機動関係よりも虚殲滅が多くなってきた。

市丸曰く、ネムの加入により藍染が彼女のこと調査するために例によって大虚メノスケランデの出現率を操作してるかららしい。

その上、山本総隊長も二番隊の戦力が増していると判断してるからなのか、優先的にこちらに荒っぽい仕事を回すようになってきた。

ネムは私をよく観察している。攻撃を受けそうになると反射的に霊圧を高めて防御しつつ反撃する技術を私以上の精度で身につけた。目隠し特訓もしてないのに……。

斬魄刀を持たない彼女の右ストレートはすでに大虚をも圧倒する程に成長していた。それどころか、碎蜂の白打と瞬歩、市丸の天才的な戦闘技術までも学んでいる。希千代くんからは——いち早く逃げる危険察知能力かな……。

そんなネムの加入でさらに碎蜂はやる気になった。

隠密機動の關係であまり好きでないと云ってたミサイル卍解・雀蜂雷公鞭を惜しみなく使うようになり、一発が限度だったこの卍解の使用制限が最近上がったとのことだ。2発以上撃つと体に負担がかかったりしたのは使う回数が極めて少なかったからだだったんだな……。

市丸もえげつないスピードでめちやめちや伸びる卍解・かみしにのやり神殺鎗を私に見せつけるようにして使ったりすることも多かった。なにそれ、挑発のつもり？ だから、本当に卍解出来ないんだってばよ。

そんな出撃がしばらく続き、変な噂が瀨霊廷内で広まった。護廷十三番隊で最強の戦闘狂集団は十一番隊でなく、二番隊なのでは？ という噂だ。

二番隊の隊士からしてみれば迷惑な噂だったみたい。血の気の多い十一番隊の隊士に絡まれたりして……。

それで、そこから最悪の事件は起こる。あの戦闘狂の中の戦闘狂と出会ってしまったのだ。

十一番隊隊士が多勢でうちの隊士にイチャモンつけてるところを見て、私はやんわり止めようとしたんだけど、ネムがちよつとやんちゃしちやつて……。その場にいた十一番隊隊士をボコボコにしまって……。放って置くわけにもいかずにそいつらを担い

で十一番隊の隊舎に連れて行っただ。

まずはハゲ頭の男が出てきた。んで、めっちゃ切れてた。十一番隊の隊士たちに。小さな女の子に喧嘩で負けるなんて情けないって。こいつ、斑目一角だろ……。

んで、ナルシストっぽい優男が美しくないとか何とか文句つけてきたところで、私は退散しようとしたんだけど、ネムよりも小さなピンクの髪をした女の子がどこからともなく出てきて、「劍ちゃん、この人、すっごく強いよ」とか私を指差して言ってきた。この子は草鹿やちるかな……。

すでに嫌な予感はしていたが、眼帯ウニ頭が出てきやがった。十一番隊隊長——更木劍八が……。

こいつは長く戦いたいっていう訳がわからん理由で眼帯で霊圧を抑えてるヤバい奴。なんでやちるちゃん、私を指差して煽るようなことを言うんだよ……。

「わかる……。お前は俺と同族だ。比べてみようぜ。どっちが強えか！」

ありえねーだろ。この人……。私にいきなり斬りかかってきやがった。私は反射的に紅鯉アカリで刀を受け止めて、弾き返す。

そこから地獄みたいな時間が流れた。ドンドン強く鋭くなる劍八の刀を受けたり避けたりしながらどうやって逃げようかと思案する。

あつ……！ こいつ眼帯外しやがった。霊圧が急上昇するのを感じた私は眼前に迫

る刃を見て、リストバンドの抑制量を1/5に変化させる。

——そして、無意識にありつただけの霊力を込めた巨大な霊丸を上空から襲ってくる剣八にぶつ放してた。

剣八は吹き飛ばされて森の中に落下したみたい……。うわあ……。やり過ぎた……。だ、大丈夫かな……。私は心配して急いでそつちまで行つたけど、逃げたら良かった。

私が側に来るとムクツと起き上がり、ニヤリと笑いながら刀を振るつたのである。

そこからまた地獄再開であつた。何時間もの間、剣八の刀を必死で弾き返す作業をしたのだから——。

しかし、その地獄は夜が明けて明るくなつた頃に唐突に終わりを告げる……。剣八が斬りつける動作をピタリと止めたのだ。そして、私の紅鯉アカリをジーンと見つめて口を開いた。

「よく見たら、お前……。金属そバツトれじや斬り合えねえじゃねーか。道理でつまんねーわけだぜ」

そんな当たり前のことを言つて首をコキコキ鳴らしながら何事もなかったように十一番隊隊舎の中に戻つていった。これには見物していた十一番隊の隊士たちも啞然である。

あー、怖かった。あの人……。まだまだ強くなりそうだったし……。下手したら殺されて

たかも……。

それから、うちの隊員は絡まれなくなった。そして、十一番隊の隊士とすれ違おうとするさいくらいデカイ声で挨拶されるようになる。

とりあえず、剣八とは二度と戦いたくないな……。

♣月◇日

ついにネムが十二番隊に戻ってしまった……。

悲しくて仕方がない……。碎蜂など、「大前田の四席などくれてやるから、ていうか大前田を差し出すから残ってくれ」と涙目になって抗議していた。本当に涙目になって良いのは希千代くんだと思う。

さらにしばらくしたら市丸も三番隊の隊長になる予定だし……。隠密機動に似合わないくらい賑やかだった二番隊も元通り静かになるかもしれないと私は思っていた。

そんな十二番隊の隊長である涅マユリさんにまた私は呼び出される。行ってみると包帯を腕と足に巻いたマユリさんが不機嫌そうに苦情を言ってきた。

「君は何をネムに教えたのだネ？」

私は特にネムに教えたことなどない。敢えて言えば右ストレートくらいである。

そう説明すると彼はネムにお仕置きをしようと手を出すと反射的に霊圧を急上昇さ

せてガードする上にカウンターまで仕掛けてくると口を尖らせる。どうやら、その怪我はネムに嘯みつかれたからみたいだ……。

そういうえば、こいつそういう奴だったな……。漫画と違って私の反射的な行動を学習してるから返り討ちに遭ってるのか……。

「まったく、信じられない脳筋だヨ！ 君のせいでまるで野蛮な獣じゃないか！」

呆れて物が言えないという表情で私を見てくる。うるさいな。あんたが勝手に人の細胞を使って、造ったんじゃないか。こつちに預けたのも半ば強引だったし……。

「まあ、戦闘力だけは予測の1.75倍まで上がっていたけどネ。そこだけは感謝しておいてやるヨ」

ネムが予想以上に強くなっていたこと自体は嬉しかったらしい。

こつから、この子がどんな風に成長するのかわからないけど……応援してる。私は彼女の頭を撫でながらそう思った。

「というわけで、もうしばらくこの野蛮なのを、君たちのところに送っておくことにするからネ」

マユリさんはまたおかしなことを言い出して、私は首を傾げた。

どうやら、ネムの成長率が二番隊にいるときの方が顕著に高かったので、研究のためにもっと長い間こちらに預けたいということらしい。

ウチは、まあ……構わないと思うけど……。

碎蜂は歓喜！ 希千代くんは今度こそ席次が奪われるのか戦々恐々！ 市丸は何考  
えてるか分からなかった。

もうちよつとの間……二番隊は騒がしくなりそうである……。



## 十ページ目

★月○日 晴れ

市丸ギンがついに三番隊の隊長になった。つまり私よりも上の立場になったってことだ。もう簡単に頭を小突くことも出来んな……。

兄貴もやっていた隠密機動第三分隊「檻理隊」の分隊長も兼任してたから割と二番隊の隊士は彼を慕っている。本人も隠密機動は自分に向いてる仕事だったから楽しかったとか言ってた。本音は分からんけど。

「更木隊長と戦い合うてくれておおきに。あれで藍染隊長、陽葵さんの戦闘力を正確に測ることが出来たって言うてましたわ」

彼の二番隊での最後のセリフがこれ。あの剣八との面倒ごとが市丸の隊長就任を急がせる結果になったそう。

私の成長率と現在の霊圧を計算すれば、大体どれくらいの強さになるのか見当がつくんだって。なんかよく分からんけど、それで市丸に近くで戦闘を観察させる必要が無くなったんだとか。

ただ、未だに不可解なことが多いから引き続き監視は続けると嬉しくないことを言っ

てるらしい。ストーリーカーじゃねえか……。

大体あの事件のせいで始末書何枚書いたと思ってるんだ。こっちは出来るだけ建物の被害が出ないように必死で頑張ったのに……森の景観が損なわれたって怒られたんだぞ。

「じゃあ俺が三席っ——」

「第三席は涅ネム。異論は認めない」

「うっ……」

みたいなやり取りが行われて、いつの間にか碎蜂はもちろん私よりも大きくなってナスバディに成長したネムが二番隊の三席に就任した。

希千代くん……無言で私に訴えないでくれるかなあ。ネムはいつか十二番隊の副隊長になるから……。大丈夫だって……。

こうして市丸ギンは三番隊の隊長に就任したのである。

副隊長は五番隊から吉良イヅルくんを引っ張って来たらしい。市丸の抜け目のないところはきつちり五番隊隊舎にも顔を出したりしてコミュニケーションを取ったりしてるところだ。

漫画と人事的なことはほとんど相違ないみたいだな。この辺は私も関係ないもん

なあ。

♣月★日 雨

久しぶりに山本総隊長に呼び出しをくらう。ちよつとした破壊行為くらいで総隊長からは呼び出されないだろうから、何だろうかとちよつと怖かった。

一番隊の隊舎にある総隊長の部屋には総隊長の他に一番隊の副隊長の雀部さんと何か十三番隊の隊長である浮竹さんが居た。

どういふことなのか話を聞いてみると十三番隊の副隊長にならないかという打診であった。つい先日、十三番隊副隊長である志波海燕、同隊三席でその妻である志波都が殉職されたとの報は聞いていたけど、私にその後釜に入れというのは寝耳に水である。

何故、私なのか。有能な人材はまだまだ居るんじゃないかと二番隊を離れたくない私は断ろうとした。

しかし、十三番隊は浮竹さんが病弱な上に副隊長と三席を失っているので戦力低下が著しい。そこで、現存する副隊長の中で最も戦闘力が高いと評価されてるらしい私に白羽の矢が立つたんだという。

でもなあ。私は夜一様の二番隊を離れたくないし……。

「浦原さえ良ければ、二番隊と兼任つてことでもいい。戦闘の手助けさえしてくれ

ば」

「隠密機動の仕事もやつとらんから他の副隊長よりも暇だと聞いておるぞ。事務仕事は他の者にでも任せれば兼任出来よう」

浮竹さんが二番隊と十三番隊の副隊長を一時的に兼任するという案を出し、山本総隊長が戦闘だけやつてりや良いじゃんみたいなノリでそうしろと促してくる。

なので、修繕費を給料から天引きされるのを何とかしてくれと交渉し、十三番隊と二番隊の副隊長を兼任することを了承した。

えっと、マジで私って戦闘さえしてりやいいみたいないないの……？

「無理を頼んで悪かったな。浦原が引き受けてくれて嬉しいよ。正直、俺だけじゃ隊の空気を変えるのは難しいと思ってたんだ。それだけ、あの誇り高い男の存在は重かった」

最後に浮竹さんはそんなことを付け加えた。

ちよつと待って。そういえば、志波海燕くんって朗らかな性格ですげー慕われてなかつたっけ。ルキアちゃんとかにも……。

そんな中にさ、兼任でーすって感じで新顔の私が入って行ったら颯感買うんじゃない？ 大丈夫かな……。

とりあえず、十三番隊は三席を二人置く特別措置を取るらしいから、ウチもそれにな

らつて二番隊も希千代くんをネムと同じ三席に引き上げて上位席官の数を増やすことにした。

これから週三くらいで十三番隊に顔を出す感じになり、虚との戦闘の助っ人を主に担当することとなった。うーん。この人事は読めなかつたなあ。

総隊長曰く昔は死神の数も少なかつたから一時的に二つや三つ隊を兼任するという人事はよくあつたんだつてさ。変なことはいらないように気を付けなと——。

♣月▼日 くもり

やっぱり微妙な空気だった。まあ、浮竹さんがいい雰囲気を作ろうと頑張ってくれたおかげで嫌な感じとまでは行かなかつたが……。

そつか、この隊の副隊長は今でも海燕くんなんだ——。

浮竹さんがなぜ敢えて十三番隊とほとんど関わりがない私を呼んだのか、理由が分かつた気がした。

能力とかそんなのは関係ない。十三番隊を知る人間なら誰も副隊長に着任しようと思ふことが出来ないだろう……。間違いなく……。

二番隊と一時的に兼任というのは中途半端で気が引けるような気がしたが、逆に良かったかもしれない。完全に私が彼の場所を奪つたりしたら、我慢が出来ない隊士も出

てくるだろうから……。

浮竹さんだつて、辛いはずだ。だけど、その気持ちを嘔み殺して隊士たちの安全を考え、私という人間を入れようと決意したのだろう。

中でも朽木ルキアちゃんの精神状態は悪い。当然だろう、想い人であった男を仕方ないとはいえ斬つたのだから……。

彼女と会つたのは真央霊術院で講義をしたとき以来だ。あの時とはまるで顔付きが違つていて驚いた。

こういうとき、人生の先輩として気の利いたこと言えると良いんだけど……。私つてほら色々と不器用だし、何か知つたような顔して説教とか出来るタイプじゃないでしよ。

「元氣出せよ」とか、「気持ちは分かる」なんて、無責任なことは言えないし……。そんなことを思っていたら、意外にもルキアちゃんの方から私に話しかけてきた。

「陽葵殿、私があなたほど強ければ……と、思わずにいられない日はありません。海燕殿が自らの誇りを懸けて戦つたことはわかつているのですが……私は、私は——ひ、陽葵殿……？」

氣付いたら私はルキアちゃんを抱き締めて泣いちゃつた。わんわんと……年甲斐もなく……。

最近は涙腺が緩くて……、本当にダメだ……。私なんて部外者も良いところなのに……。十三番隊の隊士の人たちの方がよっぽど泣きたいだろうに……。

「な、なぜ陽葵殿が泣いてるのですか？」

「だって、何か泣けてきちゃって。ごめんね。ルキアちゃんが一番辛いのは分かっているんだけど……」

いきなり大泣きしてる私にルキアちゃんは困惑。周りに居た隊士たちも唾然としてる。こういう感情を抑えられないところはダメだよなあ。

「私は亡くなった海燕くんの代わりにはなれないし、みんなから慕われるような度量もない……。——でも、みんなの仲間になりたい。悲しい時は一緒に泣いて、楽しい時は一緒に笑えるような……。二番隊と兼任で中途半端な奴だけど……力を尽くして頑張るから……よろしくお願いします」

頭の悪い自己紹介だと思う。こんな脳筋の馬鹿を仲間だと認めてもらうには時間がかかるかもしれないけど……。今日から十三番隊でも頑張ろうと思う——。

それにしても涙が似合わないな。私は……。

隊士たちもなんか、あいつ泣くことできるん？　みたいな感じになっちはいないだろうか……。赤鬼が泣いた……。とかそういう感じ……。

★月 日

二番隊で戦闘を繰り返し……。十三番隊でも前線に出て次々と虚をぶつ叩く日々。上は私のことを護廷十三隊の兵器だとも思ってたんじゃないのか……。

事務仕事はマジで一切振られなくなった。ひたすら戦闘の毎日だ。

二番隊はネムと希千代くんが二人とも細かい作業が得意で、私以上に効率よく仕事を終わらせている。

十三番隊は小椿仙太郎さんと虎徹清音ちゃんが張り合いながらもいいコンビネーションで仕事をこなしていた。

「聞きしに勝る豪腕。大虚をも一撃で屠る腕前は噂以上です。同じ始解でもこれほ

どスケールが違うとは」

一緒に仕事をしたルキアちゃんはどんな噂を聞いてるのか知らないけど、私の始解の威力を褒めてくれた。

私はルキアちゃんの袖白雪の方が鬼道系だし、格好いいと思うけどなあ。

十三番隊の副隊長を兼任するようになって数カ月。泣いたり笑ったりしながらちよつとずつこつちにも馴染んだような気がする。

ルキアちゃんは相変わらず固いけど……。



「私は不器用だったからね。靈力を込めて殴るしか能のない死神になるしか無かったんだよ。でも、ルキアちゃんは才能が豊かだからさ。いつか隊長になれるんじゃないかな」

彼女が漫画と同じように時を過ごすことが出来れば、将来的にはこの十三番隊の隊長になつてゐる。正解もいつの間にか修得してたし……。この子つて才能の塊なんだよなあ。私と違って……。

「わ、私が隊長だなんて。陽葵殿は突飛なことを仰る。買い被りすぎですよ。私なんて——」

「謙遜しないの。ルキアちゃんは強いし。もつと強くなるよ。私は知ってるから」  
私はルキアちゃんの黒髪を撫でながら彼女にそう声をかけると、彼女は少しだけ頬を赤らめて俯く。

今後、この子はある少年と関わり壮大な物語が始まる。大丈夫……。私も力を貸すから——。頼りにならないかもだけど……。頑張るね……。

◆月◎日 晴れ

ある日、六番隊の副隊長である阿散井恋次くんが二番隊の隊舎にいる私のところを訪ねてきた。彼もルキアちゃんと同様に真央靈術院で会つて以来だから何年ぶりだった

……。

なんか戦い方を教えて欲しいとか言ってくる。いやいや、私なんか瞬歩も出来ないんだから、教えられることなんて何も無いし……。

「更木隊長との死闘、見てました。朽木隊長が若い頃に手ほどきを受けたという噂も聞いてます。俺はあの人を超えたいんです！」

阿散井くんのシリアスな表情を見て私は心底面倒だと思った。

彼に物を教えることが……じゃない。無能だと知れると彼を傷付けるんじゃないかって心配してるのだ。

この人は元十一番隊でそのときにその第三席である斑目一角から戦い方を教わったらしい。だから、本当に教えることなんて何も無いんだよね……。すんごく有能な人だし……。立場は私と同じく副隊長だし……。

でも、2つの隊の副隊長を兼任して忙しいとか、何とか理由をつけてやんわり断つても彼は引かない。

「じゃあ何か一つで良いので技を教えてください」

技って……、殴ることしか能がない私だよ。まあいいか。それで……。早く終わりそうだし……。

私は阿散井くんを連れて岩場に行く。ネムも律儀に私の三步後ろを歩いている。大

きくなつても二番隊にいるときは、マユリさんの言うことを忠実に守って私を観察して  
るからだ……。

ちようどギリアンくらいの大きさの岩があつたので靈力を集中してそれを殴りつけ  
た。

——ガラガラと音を立てて碎けて粉へと変化する岩。

私にできることと言えばこれくらいしかないんだけど……。

でも、よく考えたら技を教えるつて言つてこんなの見せたら普通に怒られるような気  
がするぞ……。そう思った私は何とかその場を取繕おうとした。

「あ、阿散井くん。ごめん——」

「すっげー！　そうか、斬魄刀無しでもこれくらい出来なきやならねーのか。靈力を  
込めた拳をこんなに強化できるなんて知りませんでした！」

阿散井くんはしきりに頷きながら納得していた。ちよつと、待つて……。こんなのに  
そんなに感心しないでくれ……。逆に恥ずかしくなるから……。

そつから阿散井くんはひたすら岩を殴り始めた。彼の戦闘のセンスは天才的だ。そ  
れに努力家で根性もある。

その上、ネムが当然のような顔をしてその辺の岩を見事に破壊して見せたからより一  
層彼のハートに火が付いてしまった。

夢中になって岩を殴る阿散井くん。私はオーバーワーク気味だったので必死に止めたが、彼は聞かない。

そんなひたむきな彼はついに――。

拳を骨折した――。

白哉くんから、「何かはよく解らぬが、変なことを教えなくてくれ」と怒られる私。済まぬ――。

## 十一ページ目

♡月♡日 くもり

最近、五番隊の副隊長である雛森桃ちゃんがよく話しかけてくる。

彼女は既に藍染を崇拜しているみたいだ。彼の話をしている彼女の態度から、それは丸わかりだった。

漫画だと、そのせいで散々な目に遭ってるんだよね。日番谷くんと一緒に……。

桃ちゃんが昼食とか、買い物とかガンガン誘って来るものだから、二番隊の隊舎にいるときは碎蜂とネムを、十三番隊の隊舎にいるときはルキアちゃんと一緒に付き合う感じになった。

吉良くんや阿散井くんと比べて真央霊術院では私に特に興味を示さなかったと思うんだけど、いきなりどうしたんだろう……。

「ボクが忙しいから、桃ちゃんにスパイさせるって言うてましたわ。彼女、演技が苦手みたいやけど、どうせ陽葵さんを騙すのは無理やろうから、バレることも計算してるんやろうなあ」

久しぶりに会った市丸の言葉に私はお茶を吹き出しそうになった。

マジか……。桃ちゃん、スパイだったの……………？

——全っ然気付かなかった……………！ よく、死神になった理由とか護廷十三隊のことをどう思ってるのか熱い話を振ってくるなあ……………とは思ったけど……………。

スパイって感じではなかったし……………。藍染は何を探らせてるんだらう……………。

「そら、陽葵さんのこれからの計画に決まってるやろ。ネムちゃんを造らせた目的も含めて探りを入れてはるんや。ボクがいつまで経っても突き止めもんやから、女の子なら油断しはると思つたんちゃいます？ 例え、スパイだとバレたとしても逆に桃ちゃんを懐柔しようとするとか。陽葵さんが何らかのアクションを起こせばそれを観察すればいいだけやし」

はあ……………？ 私の計画……………？ まさか、一護とかがやつて来ることを待つてるのがバレてるとか……………？ 藍染ならあり得るかそれくらい……………。

やつぱりヤバい奴だよ、あの腹黒眼鏡は……………。

ネムについてもまだ疑ってるのか……………。あれは不可抗力だから、いくら理由を聞かれても答えようがない。

まあ、ネムはかわいいから生まれてくれて良かったとしか思っただけ……………。

「それにしても陽葵さんの演技力はさすがですわ。桃ちゃんのこと、とつくに気付いとるはずなのに初めて聞いたみたいなりアクションは忘れんのやから。ホンマ、怖い人

やなあ」

いやいや、本当に初耳だったんだってばよ。藍染のやつ……純粋な桃ちゃんをも早速手駒にしやがるとは……。

とにかく、気を付けないと——。って何に気を付ければ良いんだっけ？ ダメだ、化かし合いはすげー苦手だ……。

◇月●日 雨のち晴れ

十三番隊で現世に出向してる隊士がバットとグローブとボールを持ってきた。

どうやら野球場で虚が現れて、私が使ってる紅鯉アカリがスポーツで使われてる道具だということを知つたらしい。で、面白そうということで、道具を造らせたとのことだ。

ついに尸魂界ソウル・ソサエテに野球の文化が入ってきやがった。

その隊士は斬魄刀が金属バットになるような私は野球という競技に当然詳しいと思つていたようで、私にルールを尋ねてきた。他の隊士たちも未知の競技に興味津々である。

断つておくが私は野球は別に好きではない。前世で草野球なんてやってないし、大人になつてから球場に見に行ったことなど一度もない。パウプロをちよつとやったことがあるくらいだ。

アカリ  
紅鯉が野球、野球五月蠅いのにウンザリしてたのはそういう理由である。

だから、ルールとか聞かれても困ったんだけど、途中から適当で良いということ気付く。

んで、実際にやってみようということになった。

「陽葵殿の強さのルーツになってる競技か」

「陽葵様のデータを取るようにマユリ様から命令されてますので」

ルキアちゃんやネムも野球をやりたがってるみたいだったので、みんなで作ってみることに……。

最初に打席に立って見本を見せてほしいと言われたので、私はバッターボックスに立つ。

ネムが投手で、捕手は彼女が半ば強引に引つ張ってきた希千代くん。私が希千代くんってキャッチャー似合いそうだよねとか口を滑らしたからだけ……。

そして、ネムがボールをヒョイと投げる。おおっ！ 結構速い球を投げるじゃん。しかも初めて投げてるのにコントロールもいい……。

とか思ってたその球を見逃すと、気付いたらボールを取ろうとした希千代くんが吹き飛ばされていた——。

ネムのボール、ちよつと威力が強かったのかな……。希千代くん、「痛つて〜」とか



言つて既にボロボロなだけど……。

私はネムにもうちよつと力を抑えて投げるようお願いした。じやないと彼が死んじやうかもしれないと思つたから。

そして二球目——さつきよりもかなり遅い……。ネムは私と違つて加減が上手だな……。

私はボールをよく見ていつものようにフルスイングした——。

「……………」

——静寂。そう、静寂があたり一面を支配した。私は「カキーン」と小気味よい音を鳴らしてボールが飛んでいくイメージでバットを振つた。

しかし、鳴つた音は「ブオンツ」である。空振りしたわけではない。確かにバットはボールを捉えた。でも力加減を間違えたせいでボールが破裂して弾け飛んだのである。

「なるほど。陽葵殿は飛んでくる球を敵と見立ててそれを蹴散らす訓練をこうやつて行つていたのか……」

ルキアちゃんが変な生真面目さを見せるが、そんな特訓したことない。

というか、他の隊士たちは希千代くんが吹っ飛ばされたところでドン引きして、私がボールを粉碎したところで完全に引ききってしまった——。

とりあえず、野球が尸魂界で流行りそうにないので良かったかもしれない——。

◎月♡日 晴れ

前に私の技というか霊力を込めたパンチを真似ようとして拳の骨折をしちゃった阿散井くん。

彼はまだまだ諦めていなかった。説明下手な私ではなく頭のいいネムにアドバイスをもらって、技術開発局が造ったグローブとサンドバッグを使って特訓をしてるんだそうだ。

——どう見てもボクシングの特訓に見えるなあ。

「陽葵さんも叩いてみてくださいよ。もう一回、見てイメージを膨らませたいです」  
阿散井くんがそんなことを言うものだから、私はグローブを使ってサンドバッグを殴ってみた。

おおっ！ 殴っても壊れないっていうのは良いな。さすが技術開発局——と、思ったんだけど……、殴った方と反対側の方向から「ぶわアツ」と音を立ててサンドバッグが破裂して崩れてしまった。グローブも穴が空いて拳がむき出しだし……。

いや、ボクシング編の烈海王じゃないんだから……。どうなってんの……。

「陽葵様の霊力が過剰に注入されたことでサンドバッグとグローブが形を保っていられる霊子の許容量を超えてしまつて弾け飛んだみたいですね。予想はしていましたが

……」

何それ、怖い……。てか、予想していたんだっただら止めてよ。ネムって頭が良いのに  
こういうところがあるよな。

「拳一つですべてを粉碎する！ やっぱ、こういうのが男の技だよな！ よよし  
！」

あゝ、忘れてるかもしれないけど、私は女ね。失礼なこと言ってるのを自覚して  
ほしい……。

阿散井くんは技術開発局にかなりの金額を払ってサンドバッグを買ってルンルン気  
分で六番隊の隊舎に持って帰っていった。

そして、後日……。二番隊の隊舎に六番隊隊長の朽木白哉くんがやって来る……。

「頼むから変なものを売りつけないで欲しい。休憩時間中、煩いと苦情が来ている」  
彼はどう間違ったのか私が阿散井くんにサンドバッグを売りつけたと誤解して苦言  
を呈してきた。

どうやら四六時中「バシバシ」とサンドバッグを叩いてる彼が五月蠅い上に怖いらし  
い。

変な噂が立たなきや良いんだけど……。

★月<sup>☆</sup>日 晴れ

この頃、変な質問をやたらとされる。最初にその質問をしたのは乱菊ちゃんだった。

「陽葵さんって、藍染隊長とデキてるんですか——？」

はあああああ？　　なんで、私が藍染なんかと……。つーか、誰だよ。そんなことを言ってきたのは。

「うん。違うのは知ってたんですけど、それを疑ってる子がいるみたいで……」

疑ってる子がいる？　私と藍染がデキてるって？　むしろ避けてるくらいなのになんでだよ。

「私は藍染隊長が陽葵殿を慕っておられると聞きました。誰がそう言っていたのか、名前は言えませんが……」

ルキアちゃんまで、変な話を聞いている。どういうことだつてばよ……。  
なんで、藍染に私が好かれなきやならんだ。意味が分からない。

「話の出処は雛森副隊長です。私も聞かれましたから。お二人の関係を」

ネムはこともなげに私と藍染について桃ちゃんが聞いて回っていることを告げる。

内緒にしとかなくていいのか聞いたけど、陽葵様の疑問に答えることの方が優先だと真顔で返事をしていた。

「つーか、なんで桃ちゃんはそんなことをみんなに聞いて回ってんだらう……。誤解されるようなことなんて一切ないのに……。」

「藍染隊長が陽葵さんのこと調べるなんて言わはったからや。桃ちゃん、藍染隊長があんたのことを好きやからそんな命令をしたんやと勘違いしはって、頓珍漢な方向に突っ走ったみたいや」

「どこからともなく、ひよっこり市丸が現れて原因は藍染が桃ちゃんを使つて私を探らせたことだと伝えた。」

「健気やで、あの子。陽葵さんが藍染隊長の理想やと思つとるから着る服から髪型まで似せようとしとる」

「そういや、私が服を買う店とか聞いてきたりしてたな。髪型を変えたのも気にしてなかったけど、私に寄せてるつちや、寄せてるか……。」

「極めつけは、あれや。なんか十三番隊で変な競技やつてたやろ？ ほんで、恋次くんに変なもん売りつけたんやろ？ 桃ちゃんは今、両方ともやつとるみたいやで」

「えっ……。両方ともつて——。野球とボクシングをつてこと？ そんな馬鹿なことつて……。」

市丸の話を半信半疑で聞いてると、噂の桃ちゃんがやつてきた。

「桃ちゃんはバットにボクシングのグローブを括り付けて、色々と間違つてる「磯野！」

野球行こうぜ！」みたいな格好をしている。嘘……、だろ？ どっからどうツツコミをいれればいいんだってばよ……。

「陽葵さん、あたし、頑張ります！」

桃ちゃんが何を頑張ろうとしているのか、問いかける勇気が私にはなかった——。願わくば、早く誤解に気付いて欲しい——。

## 十二ページ目

♠月♠日 雨のち晴れ

ネムと阿散井くんがスパリーリングするようになって一年くらい。

白打の達人である碎蜂の手解きも受けているネムの方が強いけど、阿散井くんもその天才的なセンスを活かして鋭い彼女のパンチを躲せるようになってきた。

「最初の方はフェイントに引つかかることが多かったが、自分の急所に来る奴だけを避ければいいだけなら問題ねえ。そこから間合いを詰めて反撃してやる——」

この人の斬魄刀の性質考えるとボクシング特訓要るのかなあって思ってたけど、白哉の千本桜に対応するためには動体視力を鍛えて、相手の懐に潜り込む技術が必須らしい。

だから、ネムを相手にする特訓はまさにうってつけなのだから。しっかし、強くなってるはずの阿散井くんを圧倒するネムって……もしかしてめっちゃめっちゃ強くなってる？

「涅さん、あ、あたしともお願いします！」

そして、相変わらず変な勘違いをしつつ私を監視している雛森桃ちゃんもスパリーリン

グに参加している。彼女は毎日、素振りを1000回欠かさずに行って、その上でシャドーボクシングもしてるみたいだ。

彼女の斬魄刀って鬼道系なんだから意味ないんじゃないのって聞くと、「飛梅から発せられる炎のスピードが早くなりました」と返された。その上で――。

「あたし、すっごく楽しいんです！ 目指すべき方向が見つかったというか……、心の底から頑張ろうと思えますので！」

はにかみながら、笑顔を作る桃ちゃんは恋する乙女は盲目を地でいつていた。目がキラキラしてて可愛いんだけど、進むべき方向が間違えすぎて不憫になる。

でもなあ……。本当に楽しそうにやってるんだよな。サンドバッグ殴るのも、素振りをするのも……。

もうしばらく見守るとするか……。

◇月◆日 晴れ

ネムが十二番隊の副隊長になってしまった。そういう約束だったし、むしろ遅すぎるくらいかもしれないけど、寂しい。

マユリさん曰く、いつの間にか自我が芽生えてボクシングを開始したあたりで実験は既に想像を超えた段階に進んでいたとのことだ。



靈庄も隊長格レベルまで上昇し、白打の戦闘技術も超一流とくれば技術開発局の最高傑作の名に恥じないと得意気である。

「あとはこの暴力癖さえなかつたら言うことは無かつたヨ。君の遺伝子は野生の獣に近いのではないかね？」

松葉杖をついて、頭に包帯を巻いているマユリさんが私に苦言を呈した。

あーあ、また何かしようとして反撃されたんだな……。

「陽葵様の戦闘力にはまだ到底及びませんので、二番隊を離れても訓練を続けます」

ネムは何やら私に追いつこうとしているらしい。追いつこうも何も、頭の出来も戦闘技術も何もかも彼女が上なんだけどなあ……。

市丸に続いて、ネムも二番隊を去って行った……。でも、二人のせいというか、おかげというか、二番隊のイメージって相当変わった気がする。まあ、私も人のこと言えないか……。

♣ 月▽日 晴れ

夜一樣と兄貴が居なくなつてそろそろ百年が経過する。

尸魂界の危機が差し迫るにあたつて——私はなーんにもしてないんだけど大丈夫なのかしら……。二つの隊の副隊長なんてやらされてるから忙しくて何もやれてないん

だよね……。

せめて卍解でも……、と修行するんだけど斬魄刀を具象化させるなんて全然できない。

市丸も碎蜂もそんなに苦勞もせずに覚えちゃったし、最近隊長になった日番谷くんなんて速攻で会得してみんなを驚かせていたし……。凄いよなー。才能がある側の人たちは……。

私なんて未だに虚はぶつ叩くか靈丸をぶつ放すかどつちかでしか仕留められないし……。鬼道もからつきしなんだよね。

つーか、卍解ってどんな能力なんだろう……。

「始解の力の延長線になるはずだ。私の雀蜂もそうだった……」

碎蜂に相談すると彼女はそう答えた。えっと、あの卍解ミサイルって始解の延長線上って認識なの？ なんつーか、線の一本や二本飛び越えてそうだけど……。

確かに弍撃決殺が一撃必殺になってオサレだとは思ってるよ。でもなあ……。これじゃない感も強いじゃない。

「陽葵さんの靈圧なら具象化くらいなら可能なはずなのだが……。もしや対話が上手く行っていないか？」

碎蜂のセリフは核心を突いてるかもしれない。ウチのカープ馬鹿は野球の応援に行

かせろとか無理ばかり言う。

そして、私がそれを聞き入れないから拗ねてしまっている。

卍解修得の条件つてもしやカープの試合を見ることなのか……？ そんなのつてあるのかよ……。

「なるほど。現世でその野球とやらの試合を見ることが卍解を覚える足がかりになるということか。では、この私に任せるといい。隊長の権限で、野球を陽葵さんが見られるように取り図ろう」

マジか……。護廷十三隊の隊長ともなればそんな権限あるんか。

碎蜂は長く副官で居てくれたお礼と言うことで、現世で私が野球観戦出来るように休みだけでなく、義骸まで用意してくれた。ありがたい。

んで、カープの試合を見に行ったのよ。紅鯉アカリは解放もしてないのにガタガタ揺れるくらい興奮していた。

これはいい手応えだ。何とかこいつの機嫌を取れば私も卍解出来るはず……。

スコア表示は8対22……。ええ……。、広島が8点……。、阪神の打線がアホみたいに奮起して22点も取りやがった……。

紅鯉アカリさくくん！

——ダメだ……。、返事がないタダの屍のようだ……。

やっぱり勝ちゲームを見せなきや無理みたい……。しかし、22点は取られすぎだろ……。、笑顔で送り出してくれた碎蜂にどんな顔して会えばいいんだってばよ……。

◎月□日 くもり

ルキアちゃんが現世任務から戻って来ずに行方不明になった。

いよいよ、BLEACHの本編が開始したのか……。うう……。、緊張するな……。

さて、私もとりあえず藍染の動きには注意しとかなきゃ……。、幸い、桃ちゃんは相変わらず私の側にいる。彼女を使つてさり気なく向こうの動きにも気を払つておこう……。、

と言うことで、最近はそうやって過ごして来たんだけど——。

「相変わらず、陽葵さんは嫌なタイムミングで仕掛けて来るんやね。急に分かり易すぎる探りを入れるから、藍染隊長も動き辛そうにしとったわ。こんだけ、バレバレの動

きをいきなりするんやから性格悪すぎやで」

市丸は苦笑いしながら私の言動についてツツコミを入れてくる。

一瞬で藍染のことを探ってるのがバレたみたい。私は気付かれないように、話を振ったんだけどそうでもなかったのか……。やはり、侮れない奴だ。

それで、動揺しすぎて「ルキアちゃんが居なくなつて直ぐは露骨だったか」とかまた口を滑らせる。ポカをしてしまったから始末に負えない。

「やっぱり、陽葵さんも狙ってるんやね。藍染隊長とおんなじ物を。恐ろしいわ〜。ボクがどつちに付くのか試してはるんやろ？ 藍染隊長に教えるかどうかを見極めることで。心配せんでええですつて。ボクの上司は陽葵さんだけですから」

市丸は私が崩玉でも狙ってるって勘違いしてるみたいだ。そんなもん要らんのに……。

彼は調子のいいことを言ってるけど、ホントにそういう態度をやめろ。馬鹿だから、信じたくなるじゃないか……。

こいつが仲間ならどんなに心強いか知っているし——。大体、私が上司つてお前のほうが隊長で立場が上じゃないか……。

◆月★日 晴れ

雛森桃ちゃんの様子が最近より一層、変な気がする。

私が昔着ていた古着が出てきて処分に困つてると言えばそれを欲しがって、渡すとギョツと抱き締めて幸せそうな顔をしたり、二人で一緒にご飯を食べているとボーツとしたり、顔を見て話をする顔と顔を赤らめて目を逸したり……。

とにかく変なのだ……。そんなことを思っていたある日のこと――。

「あの！ 藍染隊長とのこと応援してますー！」

いきなり、桃ちゃんはよく分からんことを叫び出した。

いやいや、まるで私が藍染のことが好きで告白できない奴みたいな言い方は止めていただきたい。

私はそろそろこの子の勘違いを正す良い機会だと思つて、彼女にゆっくりと藍染など全く興味がないことを伝える。

すると彼女はそれならば藍染のことについて探りを入れた理由は何なのか説明してほしいって言ってきた。

この質問は正直返答に困つた。本当のことは言えないから……。

だから私は「いつか桃ちゃん力になれるようにだよ。私こそ応援してるから」とか適当なことを言ってしまう。

それを聞いた桃ちゃんは鳩が豆鉄砲を食らったみたいに驚いた顔をしていた。

そして桃ちゃんは少しだけ間をおいて、決心したような顔つきで口を開く。

「陽葵さんのそういう優しいところとか、びっくりするくらい強いところとか……  
ずっと見てる内に……、その……気になるようになってしまいました。だから、分からないんです。あたしがなんで今……陽葵さんみたいになりたいのか……」

桃ちゃんは自分がどうして私の真似をしているのか分からなくなつたとか言い出す。

えっと、それは君が思いつきり勘違いしてるからだよ……。

「最近……、陽葵さんのことを考えるだけで胸が……。やだ、あたしつたら何を言ってるんだろう……!?!」

おいおい、碎蜂が夜一様に向けるような視線を私に送らないでくれ……。

ていうか、君はこっち側の住人じゃないだろ……。

気付けば桃ちゃんは顔を今までにないくらい赤くして走り去ってしまった。

うーん。よく考えたら、これは藍染の作戦か何かの違いないだろうな。そうやって私の懐に入り込ませようとする作戦だ。

あの野郎——百合をナメんじゃねーぞ。

☆月◎日 くもり

兄貴の研究資料が見つかった。彼が住んでいた部屋の掃除をしていると、偶然にも引

き出しが二重底になっていることに気付いたからである。

そこには私が霊圧のコントロールをするにはどういう特訓をしたら良いのか……、が事細かに記されていた。

どうやらこの課題をクリアすれば、私がリストバンドを外しても生活出来るように霊圧を抑えられるようになるらしい。

リストバンドさえ外すことが出来たらそれだけで霊圧が上がるから多少は強くなれるはずだ。

よし、ルキアちゃんが居なくなつて、白哉くんたちがそろそろ搜索に出ようとしてるし、私も一護たちの戦力になるように特訓を頑張ってみるか……。

何なに、まずは合言葉を言つてリストバンドを外す……。

私は彼の残した資料の特訓の方法を後ろから読んでることに気付いて無かった。

リストバンドを外すのは特訓の最終段階なのに――。

気付いた時にはもう遅かった。前回、兄貴の前で外した時以上の力が溢れ出て、目の前の建物を吹き飛ばしてしまふ。えつと……、確かあそこは四十六室の会議室がある棟だったような……。

兄貴が前の失敗を教訓に合言葉をもう一度叫ぶとオートで元に戻るようにリストバンドを作り直してくれたから、すぐに元に戻すことは出来たけど……一瞬だけでも解放



された霊圧のせいでもんでもない被害が出てしまった。

「陽葵さん、これはどういう作戦なんや？ まさか四十六室怒らせて、禁固刑に処せられるなんて……。藍染隊長は表情に出しとらんけど、不気味がつてるであれは」

そう、私は修行中に誤って建物を壊したことは初めてではないが、今まで当たり前だけど四十六室に被害を出したことはなかった。

今回は人気がない場所を選んだせいでエライもんを壊してしまったのである。

禁固六ヶ月——色んな隊長や副隊長が弁護してくれて護廷十三隊からの除名だけはギリギリ避けられたけれど……。

うへえ……。よりよって、一番大事なときに牢屋に入れられるなんて……。

夜一様との再会を夢見てこのときを待っていたのに……。まさか、独房から一護たちが来るのを待つことになるなんて……。前途多難である……。

## 尸魂界篇

## 十三ページ目と恋次の奮闘

ルキアの奴が人間に力を渡しやがったせいで死罪——なんか陽葵さんまで投獄されてるし、何がどうなってるやがる。

そんな中、旅禍りよかが瀨靈廷に侵入したと報が入った。

そして、あの一角さんまで旅禍に倒されてしまう。正直言って驚いたぜ。現世であいつが死神の力を渡した奴がこつちまでくるなんてよお。

——俺が落とし前をつける。他の誰にもやらせねえ。

俺は懺罪宮に奴が向かうと読んで待ち構えた。

予想通り奴は来やがった。

——黒崎一護……テメーは俺がぶつ倒す。

奴は俺が思った以上に強かった。いや、強いだけじゃねえ。

あの野郎、死角から初見で俺の蛇尾丸を躲したんだ。

あの芸当には見覚えがある。俺に戦い方の進むべき道を指し示してくれた浦原陽葵

さん、そして修行に付き合ってくれた涅槃ム……。

この二人のやり方に酷似してやがるんだ。まるで見えない部分も見えているようなそんなデタラメな勘の良さ。一体、どんな修行をしたら身に付くってんだ——。

よく見りや、靈力を一点集中して爆発的に攻撃力を上げて攻めるところもあの人に似ている。

幸い、俺の方が経験は上だ。そりやあそうだ、あの厳しいスパーリングで鍛えた動体視力はあらゆる攻撃を見切ることが出来る。

当たらねえよ。そんな簡単によお……。

だけど、なんだ……。この違和感……。奴はまだ本気じゃないような……。

——そう思った刹那。俺は斬られていた。斬魄刀が靈力を喰らって巨大な斬撃飛ばして来やがった、だと……!! 切り札（霊丸）まであの人に似てやがるとは。気に入らねえ……!

だが、俺は意地でも負けられねえ。蛇尾丸が折れようが関係ねえ。

まだ、俺の精神（こころ）が折れてねえんだから——。

奴の動きに全神経を集中させろ……。あの斬撃はもう一度食らったら終わりだ。

上手く躲して、間合いを詰めれば……勝機はある!

サンドバッグを叩きまくった経験を今こそ活かすんだ。拳に靈力を集中させて爆発させろ——。

——呆気なく、そう呆気なく俺は奴との間合いを詰める。

あの野郎……何考えてやがる！ なぜ……斬魄刀を投げ捨てるような真似を——。

俺が拳を繰り出すのと同時にヤツも正拳を放つ。

なんだ……!? こいつも俺と同じことを!? この武術は聞いたことがある……確か、空手つてやつだ！

拳と拳がぶつかり合い轟音が鳴り響く——。

そこからは死神同士の戦いとは言えなかつたかもしれないねえ。

お互いに血を大量に流しながらの殴り合い……。口の中が血の味しかしねえ。

グローブを付けずに殴り合うなんざ何年ぶりだろうか……。

まだまだ俺は戦える！ 闘志の一片でも残っていりゃあ逆転出来ることを知ってるからなあつ……！

どれだけ拳をぶつけたのか解かんねえ。どれだけ拳を食らったのかはもつと解かんねえ……。

気付いたら俺の目には空が映っていた。そうか——俺は倒れているのか……。

黒崎一護——テメー、運が良いぜ。俺みたいな副隊長が10人くらい何とかかなりそう

だと言つてたがな……。もし、11人目の副隊長が動けていたら、夢も希望もなかったんだからよ……。

陽葵さん、すまねえ……。あんたに無理言つて色々と良くしてもらつたのに——負けちまつた……。んで、負かした相手を頼るなんて恥ずかしいこと、しちまつた……。

「黒崎！ 恥を承知で頼む！ ルキアを！ ルキアを助けてくれ……！」

黒崎の野郎……。なんで、斬魄刀を捨てたのか質問したら、「何となく」だつてよ。そういう何にも考えてねえとこまで、陽葵さん……。あんたに良く似てやがる……。



◎月●日

ちくしょう。夜一様たちがせつかくこつちに來たつていうのに暇だ！ これも藍染の奴のせいだ……。私を懺罪宮に閉じ込めろつて指示は絶対にあいつだろう。私の霊圧なら普通の牢屋じや投獄の意味を成さないからつて……。

この懺罪宮は殺氣石とかいう、靈力を完全に遮断する鉱石を用いて作られている。

加工後の切断面からも遮魂膜と呼ばれる靈力を分解する波動を放出するので、通常の靈力による攻撃では破壊は不可能らしい。これじゃ外に出られんじやないか。上の方

にはルキアちゃんが投獄されてるみたいなのに……。

市丸は藍染が焦って四十六室の建物を速攻で子飼いの部下に直させたとか言ってたけど——なんかあつたつけ？ 大事なことだった気がするが思い出せない……。

あと、隠密機動の部下の情報によると昨日は無許可で出撃した阿散井くんが負けちゃって、牢屋に入れられたらしい。

んで、今朝頃になって藍染死亡騒ぎが起きて、市丸が殺人犯だと思い込んだ桃ちゃんが暴れたりする騒動もあつたんだとき。

桃ちゃんも投獄されたんか。あの子、結構なひどい目に遭うから何とかしてやりたいな……。

ううっ……、外に出たい。入って数日は飯も食べれるし、仕事もしなくて良いし楽園じゃんとか思ってたけど……。このまま、ルキアちゃんが処刑されるつてのに、それを人任せにして外に出ないって人としてどーなのよ。

どうにか出る方法——誰かに開けてもらうつてのは無理だしなあ……。でも、この靈気を遮断する材質で作られてるここをぶち破るなんて……。んっ……。？ 待てよ……。

そういうや、兄貴が昔……言ってたな。

「密度が常識外れに高い靈子体ならば遮魂膜を突き破ることも出来るっす。そんな芸当出来たら投獄出来る場所が無くなるっすけど」

密度が常識外れに高い霊子体——全然分からんけど、何かギューツとしたイメージかな……？ 私はリストバンドの霊圧を五分の一に調節して、拳にいつも以上に霊力を込める。

——そして、懺罪宮の床を思いつきりぶん殴る。

やばっ——足元から床の底が抜けちゃったから、瓦礫と一緒に私も落ちちゃった……。てか、意外と殺気石って簡単に割れるじゃん。

——落ちた先は地下道だった。っーか、よくよく考えると投獄出来る場所がないって、ビスケット・オリバみたいでヤダな。オリバ系女子とか、可愛くないし……。

さてと、こっからどうするか。投獄されるときに斬魄刀は取り上げられてしまつて二番隊の隊舎に置いてる。多分、碎蜂の部屋にあるはずだ。

流星に藍染や下手したら市丸とも戦うかもしれないのに丸腰はマズいし……取りに行くか……。

ということで、斬魄刀を取り戻しに二番隊の隊舎に向かうことにした。地下水路を泳いで行けば近道出来るはず……。ちよつと濡れるけどまあいいか。

私は地下水路の中に飛び込んだ——。

そして、しばらく泳ぐと知らない大きな霊圧を感じる。  
これってもしかして……。

私が地下水路から飛び出すと既視感のあるオレンジ頭の死神と敵つい男、それとなよなよとした死神がいた。

「……………」

なんか、凄い表情で私を見ている。オレンジの髪って、多分一護くんだよね……。  
うわあ……、それにしても思ったより囚人服が水分吸って気持ち悪いな……。

「……………」

髪型も乱れちゃったし……。ていうか、スツピンじゃん。一護くんに初対面だというのにスツピンってまずくない？ 恥ずかしいな。隊舎に戻ったらまずは化粧して、それから……。

「……………」

「あれ？ ええーつと、君たち誰？」

「——今ごろかよっ！」

私は一護くんたちを放置して化粧をしてないことを随分と悩んでいたみたいで、開口一番に彼は私にツツコミを入れる。いやー、なかなか切れ味の鋭いツツコミじゃない



か。

ちよつと、待つてね。とりあえず、服を搾つて……、髪を整えて、と……。

「う、浦原副隊長!!」

「——っ!? 浦原つて……」

眠たそうな顔をした死神は私のことを知ってるみたいだ。この子はおそらく四番隊の山田花太郎くんだろう……。じゃあ、厳つい男は志波岩鷲くんかな……。

一護くんは「浦原」つて名前にピンときたみたいだね。というか、兄貴のヤツは私のことを話してないのかよ……。

「こ、こいつ副隊長なのかよ! 同じ副隊長でも昨日の奴とまるで霊圧が違うじゃねーか! まるで、大人と子供くらいの差だ!」

岩鷲くん、それはいくらなんでも言いすぎだよ。阿散井くんと比べて霊圧はあるかもしれないけど、大人と子供の差ほどではないかな……。

「に、逃げましょう! 浦原副隊長はあまりに凶暴過ぎるとい理由で投獄されていまして……。色々と危険な人なんです! その実力は隊長に匹敵するって言われて、護廷十三隊で最も恐れられてる人の一人です——!」

「んなこと見りゃ解るよ。こいつがとんでもねえ化物つーことはな。体の震えが止まらねえ……! こんな経験初めてだ……!」

あーっ！ 酷くいい！ 私がヤバい奴みたいな説明すんの止めてよ。っーか、誰だ？  
私が凶暴過ぎて投獄されたとか噂流してんの。一護くんたちも怖がつてんじやん  
……。

よし、漫画の主人公との初対面だ。ビシッと格好良く自己紹介するぞ……！

「初めまして、私は浦原陽葵。陽葵ちゃんって呼んでね」

「……………」

目一杯、愛想よく笑顔を作つて自己紹介するも一護くんたちは恐ろしい奴と相對して  
ますみたくないな表情を崩さない。汗だくの顔をこちらに向けて斬月構えるの止めてくれ  
ない……。

いやいや、そういう態度は藍染とかユーハバツハとかボスキャラまでとつといてよ。

「——ちゃん付けが厳しいなら、陽葵さんでもいいよ……ぐすん……」

私は若い子から「ちゃん付け」されることを諦めた。なんか、年齢を感じて涙が出て  
きたよ。

「——陽葵さん。浦原つて名前だけど、もしかして浦原喜助つて名前を知つてるか？」

「うん。そいつ、私の兄貴——」

「あ、兄貴い……？」

そこから、一護くんたちに私が浦原喜助の妹であることを教えた。

そして、ルキアちゃんを自分もまた助けたいということ伝える。

喜助の妹でルキアの上司ということを両方告げるとようやく警戒を解いてくれた。まあ、何で投獄されたのか聞かれて言い淀んでいたら、また変な顔されたけど……。

一護くんは兄貴に扱かれたみたいで、目隠しで霊圧を感じ取りつつ、霊力を拳に集中して空手をするみたいに変な特訓をさせられたりしたらしい。

なんか、私のせいで兄貴と一護くんの特訓内容変わってない……？

岩鷲くんや花太郎くんは私が付いてくると心強いみたいなきことを言ってくれたけど、私は隊長たちとの戦闘に備えて斬魄刀を取ってくることを説明して、後で合流することにした。

一護くん……、すつごく頼りがいのある男って感じで初対面なのにマジで好感が持った。正直言つて、私は邪魔かもしれないけど、サポートしていけるところは、サポートしたい。

とりあえず、「隊長たちは私なんかよりも数段強いから気を引き締めるように」とアドバイスしとく。

ということ、彼らは引き続き懺罪宮を目指して、私は二番隊の隊舎に向かって走り出した。

よし、ここまでではどうやら漫画どおりに事が進んでるぞ——。そう安心してただけ

ど……。

目の前にはネムにボコボコにされているメガネをかけた若い男がいた。

あれって、もしかして石田雨竜くん……？　そういや、今のネムって単純な戦闘力だけ言えばマユリさんよりずっと強いんだっけ……。

これって、もしかして私のせい？　違うよね？　そうだと言ってくれ……。うわっ

……、あの拳をモロに食らったら……。

どーすれば、いいんだってばよ——。

《日記はまだ続いている》

## 十四ページ目とルキアの独白

◎月●日 晴れ(二頁目)

とりあえず、ボコボコにされてもまだ戦おうとしてる雨竜くんを助けよう。ネムのとだから死なないように加減はしてるけど、マユリさんがナニするか分からんし。

私はネムに攻撃をやめるように声をかける。

「陽葵様、どうしてこちらに？ おやらかしになられて、投獄されていたのでは？」

やらかしに「お〃なんて付けないでくれ。ネムは私の言うことを聞いてくれるので、素直に雨竜くんへの攻撃をやめた。

いやー、ネムの白打も最近は格ゲーの領域に入ってるもんな。雨竜くんも災難だわ。

「大丈夫？ 君、石田雨竜くんでしょ？」と私が彼に声をかけると彼はビクツと驚いた顔をする。

「ど、どうして……、僕の名を……？ そ、それにその霊圧……他の連中とはまるで違う……。こ、こうなったら……」

いや、こんなところで切り札の何かよくわからん最終形態みたいなのは使わないで。滅却師の力を失うんでしょ？ やめなさいって。

私は名前は一護くんに聞いたということと、浦原喜助の妹だということを伝えて……、ルキアちゃんを助けるから、大人しく捕まってもらえないか打診した。

「あの人の妹……？ どうやら本当に攻撃してこないようだな。どっちみち、僕に選択権はないんだろ？ 素直に言うことを聞くとしよう。井上さんも逃げられたことだし」

雨竜くんは賢い子だったので、私とネムにマユリさんという隊長一人と副隊長二人を相手にすることが無謀だと気付き、生き残る可能性が高い方を選択したようだ。

で、このまま彼を二番隊の隊舎に連れてこうと思っただけ……。

「待ち給え。浦原陽葵……、誰に断ってその男を連れて行くこうとしてるのかネ？」

私が雨竜くんを連れてこうとすると、マユリさんが口を挟んできた。誰に断ってつて、ネムだけ……。

「私が隊長だヨ！ 君らは副隊長。その上、君は投獄中だろ？ 脱獄してる時点で処罰されたって文句は言えないはずだヨ！」

あー、何か耳が痛い理屈を持ち出してきた、この人……。

このままだと、変な毒とか使つてきそうだな。本気で……。

ネムもいる事だし……。私はリストバンドの霊圧を五分の一に調節する。

「大体君は普段から——ゲフツ……!？」

済まぬ——。

猛ダツシユでマユリさんとの距離を詰めた私は、彼の鳩尾に一発拳をねじ込む。

この人とは一番戦いたくないくらい厄介さだから、不意討ちするしかなかった。凄まじい形相で倒れるマユリさん。

ここから、猛毒吐き出したりしないよね……。恐る恐る、ネムを見ると彼女は無言で頷いてマユリさんを担いで走り去っていった。

ふう、穩便に片付いてよかったよ……。そんなことを呟いたら、雨竜くんが「1から10まで暴力的だよ！」ってツツコまれた。大怪我してるのに良く口が回るなあ。

そこから、二番隊の隊舎に向かつて行くが、やっぱり私の今の白装束の格好は目立つ。脱獄したって噂も広まり、旅禍共々捕まえるようにと命令が出てみたいだ。

「大丈夫なのか？　あなた、随分と凶悪犯みたいな扱いされてるけど。というか、もう少し霊圧を小さくできないのか？」

雨竜くんを背負って追ってくる隊士たちから逃げる私。彼は背中越しにぶつくさ文句を言ってくる。

死神の黒装束を着て大怪我を負ってる彼は私に暴力で脅されて人質になってるように見えてるらしく、彼を解放しなさいとか言われてしまう。もしかして、これ取り返し

がつかないことしてる……？

若干出てきたことを後悔していると、騒ぎを聞きつけた十番隊の隊長である日番谷冬獅郎くんが、私の前に立ち塞がった。

「浦原！ テメー、何でこんな時に脱獄なんてしてやがんだ」

うわあ……。めっちゃ怒ってるじゃん。とりあえず「暇つぶし」みたいなことを言っただけど、「ふざけんな」って言われちゃった。

鷹の目のミホークみたいで格好いいセリフかと思っただけど、よく考えたら煽ってるわ……。

「藍染隊長が殺されたからやろ？ 陽葵さんはそれを不審に思っただけで出てきたんよ」

その上、市丸まで現れて隊長二人に挟まれる結果になる。うへえ……。斬魄刀もないこんな時に戦闘になったら間違いなく殺られちゃう……。雨竜くんも背中越しに大丈夫なんだろうなとか言ってくるし……。

私は戦慄していたが、市丸は意外な行動に出た。

「斬魄刀取りに行こうとしてはったんやろ」

彼は私の斬魄刀を投げ渡して、去って行く。やっぱり何考えてんのか分かんない人だな。

しかし、それがいけなかったのか日番谷くんは霊圧を上げる。



「そーいや、市丸はお前の元部下だったな。まさか、藍染を殺す指示を出したのはお前か？ どのみち脱獄してんだ。大人しく捕まらねーと、お前を敵とみなすぜ」

あー、この人は藍染☆自演乙☆惣右介が市丸に殺されたと思ってるんだ。

んで、私が影から指示を出してるって……バカ！ 藍染は生きてんだってばよ。お前から騙されてるぞって、説明しても「馬鹿は建物を壊したお前だ」って言われちゃった。むむつ、反論できぬ……。

斬魄刀があるから戦えなくもないけど、大怪我してる雨竜くん背負ってるし、マユリさんはともかく日番谷くん傷つけると何か罪悪感あるし……。そう考えた私は足に靈圧を込めて猛ダツシユした。

「逃げんな！ テメーにや加減しねえぞ！ 霜天に坐せ “氷輪丸”——！」

やべつ！ 容赦なく斬魄刀を解放しやがった。氷の竜が追いかけてきてるから、雨竜くんがもつと早く逃げろとかいうけど、これ以上スピードを上げたら君が死んじやうでしよ。

気が動転した私は紅鯉アカリを解放して靈丸をグミ撃ちした。

氷輪丸から発せられた氷の竜は靈丸が2発当たって四散して、そこからで大爆発が起きる。

爆発のおかげで目くらましが出来てくれて、私は何とか逃げることできた。



死罪となつた私は懺罪宮でその時が来るのを待つ……。

生きたいという気持ちがないと言えば嘘になる。しかし、掟を破つた私の罪は重い。兄様も決して私を許すまい。

死を悟つたとき、私は脳裏に浮かんだのは三人の死神。志波海燕、浦原陽葵、そして黒崎一護……。三人は私に前向きな生き方を教えてくれた。

願わくば……。死ぬ前に陽葵殿には挨拶しておきたかつたな……。

そんな中、四番隊の山田花太郎と共に海燕殿の弟君が私の下にやってくる。彼は私が兄の仇だと知ると険しい表情で睨みつけるが、そこに兄様が現れた。

私は海燕殿の弟——名を岩鷲殿と言うらしいが、彼と花太郎に逃げるように告げる。

だが、岩鷲殿は一護に義理があるのか……。あろうことか兄様に立ち向かつて行く。

ダメだ……。兄様は彼が志波家の者だと知り斬魄刀を解放した。

「散れ……！ 千本桜——！」

兄様の千本桜——。刀身が消えて無数の花卉のような刃と化して敵を斬り伏せる恐ろしい斬魄刀だ。

これを受ければ一瞬で——。

「うわつと！ 危なつと！」

そう思った刹那……。上空からものすごい勢いで岩鷲殿と兄様の間に見覚えのある薄い金髪の眠たげな目をした女性が割って入ってきた。

彼女が右手を左右に大きく振るうと橋の両端に無数の亀裂が走る。

まさか——兄様の千本桜を素手で弾いた？ おそらく、陽葵さんが恐ろしいくらい高濃度の霊力を右手に込めて防壁のようなモノを作り出してそれを可能にしたのだから……。

理屈は簡単でもそれをやってのけることが出来る死神が一体何人いるだろう……。

「陽葵殿——！」

「浦原陽葵……!?! 投獄中ではなかったのか!?!」

私は陽葵殿の顔を見て胸が高鳴るのを抑えられなかった。

彼女がどうしてここに来たのか分からないが、いつもの笑顔をこちらに向けてくれたことが嬉しい……。もう思い残すことはないかもしれない。

「すげえな。陽葵さん……。あいつの技を片手で弾くなんて……」

「——っ!?!」

「助けに来たぜ……」

何ということだ。一護までここに来るとは……。

彼が陽葵殿のことを知っているということとは……。まさか、彼女も私を——？

しかし、再会を喜べる時間はなかった。この場に陽葵殿を追ってきたという日番谷隊長と涅隊長、それに心配になって出てきたという浮竹隊長が現れたのだ。

隊長が一気に四人……。いくら陽葵さんや一護が強かろうとこんな状況を打破出来るはずがない。

「隊長四人か〜、ルキアちゃんを連れて帰れるかな〜」

「相変わらず阿呆なことを抜かす奴じゃ。出来るわけなからう」

「——っ?! 夜一様(さん)！」

現れたのは褐色の肌の黒髪の美しい女性。あの方がまさか四楓院夜一……陽葵殿がずっと慕っている女性か……。

その証拠に陽葵殿が泣きながら彼女に抱きつかうとしている。あつ……、頭を叩かれた。隊長を二人も引き連れてここに来たことが、無謀だと怒られてるようだ。

そして、彼女は一護を治療すると言って彼を抱えると常識外れの瞬歩を見せてここから立ち去ろうとする。さすがは瞬神と呼ばれていた人だ。ここにいる、どの隊長よりも速いとは——。

陽葵殿は力尽くというか、夜一殿を攻撃しようとした兄様に対して激怒して、彼を思い切り殴りつけて吹き飛ばし——そのスキについて強引に逃げて行ってしまった。

兄様——生きていますか……? 私は心配しながらも、彼女の「必ず助けるから」と

という言葉を嘯みしめる。そのお言葉だけでルキアは十分です——。



◎月☆日 晴れ

ドーしよ。夜一様に怒られてしまつて、秘密の修行場を追い出された。兄貴からの新アイテムは貰えたけど……。もつといちやラブしなかった……。――

夜一様と再会して五月蠅いと叱られるまで泣きまくったのがいけなかったのか……。一護くんのウォーミングアップを手伝えと言われて、夜一様に良いところを見せようと張り切り過ぎて彼にもう少しで剣八にやられた以上の怪我を負わせるところだったのが悪かったのか……。――、正解を修得したから手合わせして欲しいという阿散井くんと戦つて、夜一様に（以下同文）何故か自信喪失させてしまったのが悪かったのか……。――。どれが原因なのか全くわからない――。

とりあえず暇だし、ルキアちゃんは一護くんたちに任せて、私は藍染の奴と決着をつけるとするか。破面編なんて始めさせてやらねーぞ。

首を洗つて待つてろ、腹黒メガネ☆自演乙☆惣右介！

## 十五ページ目と浦原陽葵VS藍染惣右介

シロちゃんと乱菊さんを追いかけたあたしは四十六室の凄惨な光景に足が竦んでいた。な、なんで、こんなことになってるの……？ 四十六室が全員……殺されてるなんて……。

そこに市丸隊長が現れてあたしを呼ぶ……。

ここは、完全禁踏区域。見るのも初めてなこの場所で彼は会わせたい人がいると呟く。会わせたい人って誰だろう？

彼に促されるまま、後ろを振り向くと——あの人が立っていた……。まさか……そんな……。

「……久しぶりだね。雛森くん」

聞き慣れた優しい声で彼は私に声をかける。

ああ、生きていてくれてたんですね、藍染隊長……。気付けばあたしは涙を流してた。彼に頭を撫でられ実感する。これは本物の藍染隊長の手だ。いつもと同じ心洗い流してくれる藍染隊長の匂いだ。良かった……。生きていてくれて……。

「少し痩せたね。すまない、君をこんなに傷つけてしまって——」

「いいんです。もういいんです。隊長が生きて下さっただけであたしは何も——」  
「君を部下に持てて本当に良かった……。ありがとう雛森くん……。本当に、ありがとう……」

藍染隊長は何かをやらなくてはならないことがあり、身を潜めるために死んだふりをしていたみたいだ。

そんなこと、どうでもいい。あたしは藍染隊長さえ生きていれば幸せだから——。  
心の底からそう思った刹那……。急に冷たい口調で藍染隊長は呟く。

「さようなら——」

あたしは肩に鋭く刺すような痛みを感じた——。藍染隊長があたしを刺した？  
どうして……。何でそんな——。

シヨックで膝から崩れ落ちたあたしの頭の上で凍てついた声が静かに放たれる。

「邪魔をするにも随分と荒っぽいじゃないか。そろそろ、化かし合いを終わりにしようと思ってるのだが……浦原副隊長」

「桃ちゃんから離れな。ゲスの極み眼鏡……！ あと、ついでに市丸。あんたもことと次第によつちやあ容赦しないぞ！」

なぜ、陽葵さんがここに——!?! よく見ると後ろに大きい穴が空いていた。それに藍染隊長の頬から血が流れている。





全滅してる四十六室。日番谷くんは驚愕しながら私を見る。いやいや、建物はぶつ壊したけど、人は殺ってないから半年の禁固刑で済んでるんじゃない。

そんな中、吉良くんがひよっこり現れて私たちは彼を追ったけど、ふと私はこのあと雛森桃ちゃんが藍染のやつに刺されるのを思い出して急いで元の場所に戻った。

案の定、藍染は桃ちゃんに殺気を剥き出しにしてたので、私は彼に霊丸を思いつきりぶつ放す。

彼女は無傷とまではいかなかったが、致命傷は避けられた。私は藍染と対峙して決着をつけようと意気込む。

しかし、日番谷くんが追いついてきて藍染が桃ちゃん刺したのを見て激怒。

藍染も「憧れはく」とか「私にとって腹心は市丸く」とか言い出す。そういや、漫画だと市丸は藍染のこの副隊長だった時代があるけど、ほぼ二番隊の三席で過ごしてるもんなく。

副隊長じゃなくて腹心か……。東仙のことはどうお考えなんだろう……。

「卍解——！ 大紅蓮氷輪丸！ 藍染！ 俺はてめえを殺す！」

「あまり強い言葉を遣うなよ。弱く見えるぞ」

「嘘……だろ……？」

卍解して、煽り合いをして、藍染に斬りかかる——という三行動をした後に日番谷く

んはびっくりした顔をして、倒れた。

——藍染のやつ……、やっぱり強いな……。強い言葉を遣うと弱く見えるとかは、私にはよくわからん。

「また、僕の邪魔をするか。君もなかなか狸だね。雛森くんも、日番谷くんも本当はどうでもいいはずだろ？　なぜ、助けるのか理解に苦しむ」

藍染は私が日番谷くんを突き飛ばして、彼の斬撃から守ったことに対して疑問を呈している。

日番谷くんを守れたかどうかはビミョーだな。斬られはしないけど、めっちゃめっちゃ痛がつてるし、起き上がれなくなってるし……。力加減間違えちゃった……ごめんね。

だけど、狸ってどういうことだ？　別に私は思ったままの行動しかしてないけど……。

「これほど他人の行動が不可解で理解出来ずに苦しめられたことはなかったよ。しかし、ある一つの結論が生まれた。君を消してしまえば、その苦しみから解放されるってことをね」

藍染が私に斬魄刀を振る。私が紅鯉アカリでそれを受ける。ようやく、私を殺そうって思えたわけか……。

うへえ……、今まで受けたどの攻撃よりも重い……。最初からリストバンドを五分の



「——破道の九十『黒棺』……!」

目の前で狛村とかいう名前の隊長があつさりと藍染つてやつにやられてしまった。なんてこつた。同じ隊長でこんなに差があるなんて……。

白哉と決着をつけ、恋次にルキアを任せて終わりだと思つていたのに……。急に黒幕みてえなのが現れやがつて、俺と恋次はなす術もなくやられてしまった。もう、指一本動かせないのが悔しい……。

藍染つてやつは浦原さんと陽葵さんがルキアに何かを隠してそれを守ろうとしたとか、よく解かんねえこと言いやがる。

そういや、あの人がどこに居るんだ？ 夜一さんと、碎蜂さんつて人みたいに総隊長つて人を止めているのか……。

あいつはルキアから何かを取り出して、もう用済みだからと部下にトドメを刺すように命令していた。くそつ! このままルキアも殺られて……。

——そう思つたとき、藍染に向かって馬鹿デカイ霊力の塊がいくつも飛来してきた。

「縛道の八十——『断空』!」

藍染はデケエ壁みたいなのを出現させて、それを防ぐが、何個も何個もそれは飛んできて壁を突き破り大爆発を起こす。あつ——ルキアも吹っ飛んだ……。

「私とのデートの途中でふけるとはいいい度胸してるじゃないか。藍染く〜！」  
針が刺すような凶悪な靈圧だった。俺がこの前見たときの軽く二倍はある。

その女は白哉や剣八よりも大きな靈圧を携えて藍染と対峙した。そーい、あの人の斬魄刀——なんで金属バットなんだろう……。

「君に出し抜かれる前に出し抜こうと思ったままでさ」

「ルキアちゃんまでポロポロにして、許さない！」

「そら、陽葵さんのごつつい爆発のせいや」

「……うっ。とにかく、お前が全部悪いんだ。バーカ！」

「……藍染隊長が悪いのは正解やけど、説得力ないのはなんでなんやろ」

「そーい、お前、ルキアちゃん刺そうとしてなかったか？」

「はて、何のことやらわからんなあ」

ルキアを吹っ飛ばしたことを藍染の部下の狐目の銀髪の男がツツコミを入れると、陽葵さんは頬を赤らめてバツの悪そうな顔をする。なんか、言い争ってるし、仲が良さそうだな……。

「——浦原陽葵。副隊長ごときが藍染様に狼藉を。……ぐはっ!!」

そんな陽葵さんにドレッドヘアの男が斬撃を繰り出そうとしたが、何か顔をバットでぶん殴られて吹き飛ばされてた。あれ、地面に大穴空けてたスイングだよな……。ピ

クピク痙攣してるから、生きてるんだらうけど痛そうだ……。

「かなめ要じや、相手にならないか。どのみち、君とは雌雄を決しようと思っていた。私が天に立つ前に——」

藍染はメガネを外して霊圧を上げる。

嘘……だろ……。あいつも陽葵さんと同じくらいの霊圧……？

そして、二人の斬魄刀がぶつかり合い——天が割れた——！

「君の戦闘スタイルは知っている。力任せで、白打も鬼道も斬術も技術的には取るに足りないレベルだ。今まではそれで通用していたのかもしれないが……私には通じない！ いい加減、手の内を見せたらどうだ？」

「痛っ！ やっぱ強いなあ……！」

霊圧の大きさは互角でも技術的なことは藍染って奴の方が上みたいだ。陽葵さんは少しずつ傷付いているけど、藍染に攻撃を当てられていない。

「ふむ、斬られる瞬間に霊圧を集中して防御力を跳ね上げる……か。そういえば、霊力の感知は超一流だったね。私の急所を狙った一撃を食らって軽傷とは……それだけで警戒に値する」

「うるさいぞ！ この、ストーカー野郎め！ おりやあああつ！」

陽葵さん、完全に頭に血が上ってるのか馬鹿デカイ霊力の塊を無数に撃ち出す。

爆風で近づくことが出来ない。ルキアは——白哉が助け出したみたいだ。

よく考えたら当たらないなら数を撃つのは有効かもしれねえ。これなら藍染も——ひとたまりもないだろう。

「……その無尽蔵の靈力だけは厄介だと思っていたよ。悪いが、君にペースを掴ませるつもりはない。——雷鳴の馬車……糸車の間隙……光もて此を六に別つ——縛道の六十一りくじようこうろ〃六杖光牢〃!!」

「嘘っ！ 動けない！」

しかし、俺の考えは甘かった。藍染はとつくに空中に回避行動をとっていて、陽葵さんは六本の光の帯みたいなので動きが封じられた。

「当然だ。完全詠唱した私の縛道だ。いかに靈圧が規格外な君といえども、動くことなど叶うものか……。——容赦はしないよ。破道の九十九——〃五龍転滅〃!! これで終わりだ。君との因縁も……」

さらに藍染は地割れを起こして地面からビルくらいの大サイズの光の龍を繰り出す。

何だよあれ……。今まで見たどんな技とも次元が違う。

俺も恋次もここから離れねえと……無事じゃ済まなそうだ。

だが、光の龍が陽葵さんに接近したその時……! 彼女は決心したような表情で何かを叫んだ。



「……ン解ッ——!!」

まるで台風みたいな……、異次元の霊圧が彼女から吹き出す。

し、信じられねえ。ただでさえ、馬鹿デカいあの人の霊圧がさらに何倍にも膨れ上がった。

陽葵さんって、卍解は出来ねえとか言つてなかったか？ いや、そんなことはどうでもいいか……。

あの人を拘束していた光の帯は弾け飛び、光の龍は——彼女がバットを一回振っただけで……粉々になって消滅してしまつた——。

つーか、陽葵さん……さつきから周りの人のこととか全然考えてねえな。俺も恋次もさつきからトドメが刺されるんじゃないやねえかってくらい岩の欠片とか石とかが頭に当たつたりしてんだけど——。

「なるほど、それが君の卍解か。詠唱破棄したとはいえ、まさか私の『五龍転滅』を打ち破るとは——」

「——喋つてる時間が惜しい。泣いて謝るまでぶん殴る!!」

「——っ!?!」

陽葵さんの言葉が俺に届いたとき、藍染は既に空高く吹っ飛ばされていた——。

## 十六ページ目

◎月▼日（二ページ目）

《藍染とドンパチやつてる様子が書き殴られている》

んで、藍染のやつ。縛道で私の動きを封じてきやがった。

こうなりや、ぶつつけ本番。兄貴が作ったっていう、あれを使うとしよう。

その前にこの拘束を何とかしなきゃ——。

「安全装置解除」——略して「<sup>アンカイ</sup>安解」。これがリストバンドを解除するときの合言葉だ。

なんで、兄貴がこんなキーワードにしたのか分からない。

それはいいとして、霊圧の急上昇に伴って私を縛っていた拘束が解けて体が自由になる。

そこで、私は錠剤を飲んだ。その錠剤こそ兄貴が夜一様に渡した新アイテムである。

霊力の流れを制御して、身体に強制的に留める効果があるこの薬——私が苦手な霊力のコントロールを補助してくれる。

つまり、薬が効いてる間は私が霊圧をフル解放しても大丈夫ってことだ。

その時間はたったの60秒で、もう一回使うためには24時間のインターバルを要するらしいけど……。

要するに、60秒以内に決着をつけなければいけないことだよ……。  
迫りくる藍染の五龍転滅を紅鯉アカリでぶん殴るとそれは粉々に砕け散る。

「なるほど、それが君の卍解か。詠唱破棄したとはいえ、まさか私の『五龍転滅』を打ち破るとは——」

いや、『卍解』じゃなくて『安解』ね。聞き間違えたのかな……？ まあいいや、喋ってる時間が惜しい。泣いて謝るまでぶん殴ってやる。

靈力をたっぷり吸わせて紅鯉を振ると、今まで見たことないくらいの大きさの靈丸が渦を巻きながら、猛スピードで藍染に向かって飛んでいって、空の彼方までぶっ飛ばした。

何か凄いの出たんだけど……。

『ありやあ、ジャイロボールじゃけえ。凄いんよお』

うおっ！ 久しぶりに紅鯉アカリの声が聞こえてびっくりした。

あれがジャイロボール……？ 絶対に違うだろ……。

藍染の奴、吹っ飛んでいったけど生きてるかな？ 死なれちゃ、後々困るんだけど……。

そんなことを心配してたら、上空から藍染の声が聞こえてきた。

「滲み出す混濁の紋章——不遜なる狂気の器……、湧きあがり・否定し……、痺れ・瞬き……、眠りを妨げる……爬行する鉄の王女……、絶えず自壊する泥の人形……、結合せよ、反発せよ、地に満ち己の無力を知れ！ 破道の九十——『黒棺』!!」

オサレな詠唱とともに真つ黒いモノが私を取り囲む。

これって、どうすりや良いんだ。まずい、これは粕村さんの二の舞になるやつだ……。完全に油断した……。

あれ？ 黒いモノ無くなっちゃったけど……。なんだったんだろう……。今の……。

「ば、莫迦な……。完全詠唱した私の黒棺を食らって無傷……だと？」

いや、黒棺ってなんかもつと血が吹き出て怖い技だろ？ 狙いを外したのかな……。とにかく、藍染のやつを適度にぶっ叩いておかないと……。

「読めたぞ。君の正解は異常に引き上げた霊圧で鬼道に特化した防御力を極限まで高めるという性質のモノだ。しかし、私の特技が鬼道だけとは思わないことだ——」

藍染は確かに凄い。鬼道だけじゃなくて、体捌きも、斬術も超一級品だ。

霊圧が上がったとはいえ、この短い時間でこの男を捕らえるのは難しいかもしれない。

そう思った私はある作戦を実行した。

「首を斬り落としてやる——！」

藍染が刀を振るった瞬間、私は彼の斬魄刀の刀身を掴んだ。彼はようやく焦りの表情を見せる。

そして、藍染の腹めがけて紅鯉を思いきり突き出した。

藍染は盛大に吐血して、地面を抉りながら吹き飛ばされる。もう時間がない——。私は彼にトドメを刺そうと彼に近付いた。その時——。

夜一様や碎蜂が私を攻撃してきた——。えつと……、どうということ……？

「はあ、はあ……、完全催眠……。君には効いてなくても、他の連中は違う。大切なんだろう？ その連中は……」

何とか彼女たちの猛攻を回避しながら、私は口から血を垂らしながらも余裕な表情をしている藍染のムカつく顔を見た。

ちくしょー！ そういうことか。私が藍染に見える催眠を使ったってことか……。私に催眠が効かなくても関係ないってか……。

正直言つて、「勝てる！ 誰であろうと絶対に勝てる！ 超パワーを手にしたのだ——！」とか思った時点でオサレ負けしてたのかもしれない。

いつしか、護廷十三隊全体に襲われる私。

反撃する間もなく、制限時間の1分が経過して霊圧のコントロールが出来なくなり、周りのモノを全部吹き飛ばしてしまおう。

こんな状況になってしまって、とても悔しいけど、私はリストバンドを元に戻した。

「君の卍解の力は分かった。浦原陽葵ひまり、雌雄を決するのはまた今度にしよう」

藍染が催眠を解いたのか、みんなは一斉に彼の方を向く。

そして結局、漫画と同じように大虚メノスクランデ共が現れて、反膜ネガシオンで藍染を包み込んで撤退みたいな展開になってしまった。

くそっ！ 私が戦った意味って何だったんだよ……。

しかし、ここである人物が意外な行動をとる。藍染はそれを訝しく思い、その人物に声をかけた。

「ギン、何のつもりだい？」

そう、市丸は反膜ネガシオンをヒョイと躲して、中に入らなかつた。

あいつ、どういいうつもりなんだ？ 藍染の味方に付いたんじゃないのか……。

「ボクは陽葵さんのスパイですから。藍染隊長が隊長辞めはるんでしたら、ここでお別れですわ」

ヘラヘラと笑いながら、藍染に反逆すると言い放つ市丸。

はあ？ 堂々とスパイ宣言とかすんなよ。みんながこつちを見てるじゃん。

「後悔するよ。私が彼女に負けることなんてあり得ないのだから」

「後悔するのは藍染隊長の方です。陽葵さんのこと、悔り過ぎて笑えますわ。藍染隊長はボクだけが腹心とか言われはったけど、ボクにとつての上司は陽葵さんだけでしたから」

どこまで本気か分からんけど、こいつがこいつなりに結論を出してこつちに踏みとどまると言ってくれたのはよくわかった。

私が入司つて、今はあんたが立場が上だし……。何より、碎蜂が可哀相だろうが……。  
「あつ、もちろん碎蜂隊長のことも尊敬してますよ。そない拗ねないでもええですよ」

ムツとした碎蜂にフォローを入れる市丸。二番隊で一緒にやつて来たから彼との仲間意識は私や碎蜂、それにネムや希千代くんにだって確かにあった。

あいつ、一応そういう義理とかは感じてくれてたのかな……。と、見せかけて実はこつちに残つて藍染のスパイとかそんなオチは止めてくれよ……。

こうして、藍染と東仙は撤退して、ルキアちゃんを巡つての騒動は一段落ついた。

もちろん、崩玉を奪われたからこつちの負けも同然なだけ……。ルキアちゃんも、桃ちゃんも無事だし、市丸もこつちに残つてくれたから……。良かったかな……。

◎月 ♡日

あたしと市丸の処分が決まった。今月から二十五年間……減俸25%だつてさ。酷いよね。こっちはみんなの為に頑張つたのに……。

禁固刑については四十六室がいつ殺されたのか分かんないつて理由と、藍染から桃ちゃんやルキアちゃんを守つた功績も考慮されて免罪された。

減俸に関しては建物とか諸々を壊し過ぎだからという理由だ。私の指示で藍染を探つていたということになってる市丸も連帯責任を負うという結果になった。

「莫迦者！ 甘過ぎるくらいじゃ！ 此度の負傷者の何パーセントがおぬしの戦いの巻き添えになつた者だと心得る？ 少しは加減を覚えろとあれほど——」

不満顔してたら、総隊長にお説教を食らう羽目になる。つーか、市丸が減俸で済むなんて奇跡だな。

藍染のこつからの計画とか知つてることを吐いてもらうぞ。

「いうても、藍染隊長もボクのこと半信半疑やつたからなあ。鏡花水月の回避方法くらいは突き止めたかつたんやけど。だから、そろそろ教えてくれまへんか？ どないして、鏡花水月を完全に防いでるのかくらい」

なるほど、漫画と違って市丸が私に付きつきりだつたから、藍染は鏡花水月の秘密を彼に教えてないのか。



だから、市丸もこっちにつくことを決心したんだな。別に私に鏡花水月が効いてないのはアイマスクして動いてるだけだから……。

「んなアホな。なんや、そのアイマスク。そら、藍染隊長も分からはずやで。理由がアホすぎますもん」

そんなもんかね。まー、いつの間にか藍染対策というか、修行の一環みたいになっちゃって意識してなかったからなー。

でも、このアイマスクは凄いやな。今まで付けてるってバレたこと一度もないもん。流石は兄貴が傑作だと自負するだけはある。

しかし、市丸の「正解を使つてないことは藍染隊長には言わん方がええですよ。その方がオモロイですから」という台詞にはどんな意味が込められてるんだろうか……。

◎月♡日

夜一様はやっぱり現世に帰るんだそうだ。碎蜂なんて隊長を明け渡すとまで言っていたが、ダメだった。

「おぬしらが、新しい二番隊を作った。それを今さら儂が戻ったとて良くはならんじゃろう」

彼女は二番隊が護廷十三隊の随一の武闘派集団だと言われていることを聞いて笑わ

ずには居られなかったらしい。

そんな変化は自分には無理だったと。碎蜂の器量の大きさがそれを可能にしたのだから、自分を超えているとまで彼女に言った。

隠密機動の方も何ら問題なくこなしてるからこそその言葉だったんだろうけど、碎蜂は号泣して大変だった。

ネムを紹介すると、夜一様は首を傾げて「おぬしの娘と言うことか？」と口にする。

まあ、私の遺伝子を使っているからネムはどう思ってるか知らないけど似たようなもんだと答えておいた。

「陽葵様のことは母親だと認識してますが……」

今日まで知らなかったけど、ネムは私を母親だと思つてたらしい。

小さいとき、懐いてずっと一緒にいたのはそれだからなのか……。かわいいから私も嬉しかったけど。

「ふむ。じゃが、造つたのはあの淫なんじやろ？ 喜助のやつ姪が出来たと聞いてどんな顔をするじやろうか。——楽しみじゃな！」

ニヤリと笑つて兄貴の顔を想像する夜一様。どーなんだろう。兄貴は「良く出来てるな——」くらいしか思わないんじゃないか？ 寧ろ、結婚できないだろう私に娘が出来て良かったくらい言いそうなもんだ。

現世に遊びに行きたいなく。

◎月…日

一護くんたちが帰って行った。浮竹さんから死神代行証をもらって。

次会うときは、虚化とか覚えてるんだろうか。

破面編に突入しちやつたのは残念だけど、次こそ藍染をぶっ倒すぞ。

ルキアちゃんはこっちに残るみたい。緋真さんのこととか白哉くん聞いたからだろ。うな。

爆発に巻き込んでしまつて悪かつたということと、兄貴が色々と変なことをして済まなかつたと、彼女に謝罪しておいた。

「あの浦原はやはり陽葵殿の肉親でしたか。あのとき、どこか懐かしい気持ちになりましたから。名前を聞いてもしやと思いましたが。今、こうしていられるのですから、私が陽葵殿を責める理由などございませぬ」

ルキアちゃん、人間出来過ぎだろ。完全に巻き込まれまくつてるのに……。

あまりの優しさに涙が出るわ。ありがとう。本当に……。

◎月  
♪日

あれ？　なんで桃ちゃんはまだ私の側から離れないんだろう。

なんか前よりもグツと距離が近付いたみたいな……。日番谷くんはあれ以来ムツとして話してくれないし……。やっぱ、突き飛ばしたこと根に持つてるのかな。

「陽葵さん、五番隊の隊長をやってくれませんか？」

桃ちゃんは何をトチ狂ったのか私に藍染の後釜に入れとか言ってきた。冗談じゃないよ。あいつの後釜なんて……。

それに、藍染は桃ちゃんは彼ナシでは生きていけないように仕込んだって言ってたけど……割と平気そうじゃん。

「あいつを裏切ったら殺すからな」

日番谷くんがすれ違いざまに怖いことを言ってくる。いやいや、裏切るなんてしないけど、そんなことを言われる筋合いはないでしょ。なんで？

「今度は二人きりでお食事に行きましょう。えへへ」

まあ、桃ちゃんが元気そうならそれで良いか……。

### ●月☆日

破面が一護くんを狙ったとの情報が入って、ルキアちゃんと一緒に現世に行くことに。

一 護くんと深く関わってるからか。てか、碎蜂とネムも一緒なんだね……。  
漫画とメンバーが違うのは私のせいなのかしら――。

## 破面篇

### 十七ページ目

●月◆日 くもり

明日から久しぶりの現世だ。しかも空座第一高等学校の女子の制服が着れるなんて。

いやー、まだまだ私もイケるじゃん。どっからどう見ても女子高生だもん。

一緒に現世に行く阿散井くんにそう確認したら目を逸らしながら、「そ、そっすね」みたいな微妙な返事をしやがった。

ルキアちゃんはそのな彼を蹴飛ばして「陽葵殿はまだまだお若いであろう。領け、領けのだ」とフオーローしてくれるも段々むなしくなってくる。領け、領

上だけでもさ。この子だっていい歳じゃん。私のほうが歳

「こういう子供っぽい服はどうも好かん」

頬を赤らめて制服姿を恥じらう碎蜂だが、君の横乳が見える戦闘服の方が割と性的なんだぞと、かれこれ百年以上思ってる。

ネムはいつの間にかこんなに巨乳になってたんだ。私の遺伝子なのに……。いや、私だつて揉んだりするにあたっては満足させるくらいはあるよ？ でも、あんたのそれは成長しすぎだろ……。

「つーか、制服のサイズ小さくない？ 乱菊ちゃんじゃあるまいし、谷間みえてんじゃん。」

「相変わらずの仏頂面だけど、現世に行くことはそれなりに楽しみなんだそうだ。」

あとは阿散井くんが推薦した、十一番隊の一角くんと弓親くんが一緒に来ることになった。

阿散井くんと一角くんはガラが悪いヤンキーみたいだな。どう見ても不良じゃねーか。

『現世に行けばカープの試合が見れるけえ、楽しみじゃのう』

ウチのカープ馬鹿が何か言ってる。前に一護くん、セ・リーグの状況聞いたけど、今年のカープも8月の時点で優勝どころかAクラスも絶望的らしいぞ……。

彼に「カープ好きなんすか？」って問われて「ウチの斬魄刀がね」って答えると本気で心配をされてしまった。頭の……。

とりあえず、兄貴の家に泊まるつもりではいるけど、テレビくらい持つてはるはずだ。運良くナイターの中継がやっててカープがいい感じで圧勝してくれたら、もしかするか

もしれん。

9月のカーブが強いのかよく分からんけど……。

●月♡日 晴れ

現世に来て初日から色々とあり過ぎだったよ。順を追って書こう。

一護くんたちと再会を喜んだ私たち。碎蜂は織姫ちゃんと仲良くなってたのは知らなかった。

ネムは男子からすげー見られてた。特に一護くんの友達の何だっけ……、浅野啓吾くんがルパンみたいなダイブしてぶん殴られてたな。

死んでないか、真面目に心配してしまった。一護くんの幼馴染のたつきちゃんって子は彼女の格闘センスをひと目で見抜いて意気投合。なんだかんだでネムも学校を楽しんでるみたいだった。

それで、ルキアちゃんはどうも覇気が足りない一護くんを一喝して彼にやる気を取り戻させる。

どうやらウルキオラやらヤミーとの戦いで内なる虚が目覚めたりして、死神の力を発揮するのが億劫になってるみたい。てことは、もう平子さんに会ったりはしたのかな？

挨拶してきたけれど、彼は私には会いたくないか思ってるかもなあ。



ひよ里ちゃんや矢胴丸さんとも久しぶりに会いたい。でも、今の時点で仮面軍勢ヴァイザードと関わるのはダメなのかも。

放課後は一護くんの家に行く。屋根裏から侵入して……。

そして、私たちがここに来た理由を説明した。破面のこととか、ギリアンやらアジューカスやらヴァストローデとかそんな話を。隊長である碎蜂が代表して。

「ヴァストローデ級の戦闘力は隊長格より上だ」とか、「ヴァストローデ級が十体以上いたら尸魂界は終わり」とかそんな説明もすると一護くんが私を指差してきた。

「あのさ、そもそも陽葵さんより強えのがいる時点で尸魂界終りそうなんだけど。ヴァストローデ級つてもっと上なのか？」

「……………」

一護くんの発言にみんなが黙ってしまふ。なんで、黙るんだよ。碎蜂、腕を組んで考え込むような話じゃないだろ。

隊長格より上なんだから、ヴァストローデ級は私よりも上に決まってるじゃないか。十刃エスパーダの誰がヴァストローデ級の破面かは知らないけど。

「この人を基準にしたら色々とおかしくなるから無視してくれ。ウチの隊長と夜通し戦ってほとんど無傷だった化物だぞ」

「戦闘力という面だけで見れば陽葵様は隊長格以上です。碎蜂隊長くらいを基準にし

なくてはなりません」

「だからといって碎蜂さんが弱いつてことじゃねーぞ。寧ろ、この人の上司が出来るんだから有能な方だ」

「こら、恋次！ 陽葵殿が問題ばかり起こす困った人みたいな言い草は止せ。十三番隊はこの方にどれだけ助けられたことか！ 始末書も増えたが問題などない！」

えつと、とりあえず私は戦闘にしか能がなくて、碎蜂はそれをフォローしてくれる有能な上司で、十三番隊は私のせいで始末書が増えることを一護さんに教えてあげたわけね……。

それで今日のところはお開きになったんだけど、問題は泊まるところを何処にするかって話になった。

私と碎蜂とネムは兄貴の家に行こうと思うって口にする、碎蜂がそれを嫌がる。兄貴の世話になるのは嫌だから織姫ちゃんのところに行ってみるんだって。夜一様も来るかもしれないに……。

ルキアちゃんは一護くんのところの世話になると当然のように口にして、一角くんと弓親くんは適当に探すと言ったので、私もネムと二人で帰ろうとしたんだけど……。

「頼みます、陽葵さん。お兄さんを紹介して下さい！」

阿散井くんが兄貴を紹介して欲しいと頭を下げる。なんか意味深な言い方するけど、

どういふことなんだろうと話を聞くと、一護くんを短期間で鍛え上げた手腕を聞いて、修行をつけてほしいとのことだ。

あー、良かった。てつきり彼にそつちの気があるのかと思つてしまった。それでも別にいいけど、兄貴を紹介するのはちよつと勇気がいるじゃない。

で、兄貴のところにもネムと阿散井くんを連れてつたんだけど、修行の件は面倒だからヤダつていいやがる。私には変な修行を頼まなくてもつけたクセに。

「陽葵ちゃんはそのうでもしなきや、日常生活に支障をきたしましたから。必要度合いが違うんすよ。この子の霊圧放置してたら藍染サン以上に尸魂界が損害を被るでしよ？」

兄貴の言い分にめちやめちや納得する阿散井くん。

いやいや、君はどつちの味方なのか言いたい。

「陽葵様、それよりも『カープ』とやらの試合をご覧になるのではなかつたのですか？」そんなやり取りをしていると、ネムがナイターの中継をテレビで見ようと言つていたことを思い出させてもらう。そうそう、ちようどこつちでカープの試合がテレビでやるつて一護くんの家でテレビ欄を見せてもらつて知つたんだよね。

兄貴にテレビを見せてくれとせがむと、「いつからプロ野球なんか」みたいな顔をされ

だが、ジン太くんと雨ちゃんうるおと鉄裁さんにチャンネルを譲ってもらえないか頼んでくれた。

そして、なぜかカープの試合をみんなで観戦することに。阿散井くんは「雛森、こんなもんをやりたがってたのか」みたいな感想で特に興味を示さなかった。

兄貴は全く野球の試合には興味を示さず、ネムと何やら会話をしていた。「良いものを上げるっス」とか言ってたけど、何をあげたんだろう……。

試合は貧打も貧打でお互いにゼロ行進が続く。んで、9回の表——ワンナウト満塁……バッターは——みたいな場面で大きな霊圧が幾つも発生したのを私たちは感知した。

——まさか、破面たちが来たのか。こんなに早く来るなんて……。

アカリ  
紅鯉アカリが嫌がってるのはわかってたけど、行くしかない。阿散井くんとネムを引き連れて外に出ようとすると、兄貴が「限定霊印されてるなら、アレを取っても問題ないはずっスよ」とかアドバイスしてきた。

あー、そうか。リストバンドで十分の一にした霊圧がさらに限定霊印で五分の一にされてるから、今の霊圧は五十分の一になってるのか……。道理で体が重たいはずだ。

「でも、アレを取ったら絶対に限定解除しないでくださいね。絶対っスよ」

真顔の注意を受ける私。やだなー、そんなことしたらそこら中のモノが全部吹き飛ば

されて更地になることくらい分かつてるよ。

私のことバカだと思ってるのかな……。

まあ、確かに十刃<sup>エスパーダ</sup>とかと殺り合ってしまったなんて展開になったら、リストバンド付けてたせいで、瞬殺<sup>エスパーダ</sup>つて展開もあり得るな……。『安解』しとこーつと……。

私はリストバンドを外してみた。いつもはそれで大変なことになるけれど、限定霊印のおかげで何とか霊圧をコントロールすることが出来る。五分の一だから、ちよつと気を付けなきゃ色々怒られそうな気もするが……。

『試合の続きが早く見たいのお』

紅鯉はさつきからそればかりで五月蠅い。よく考えたら、十刃<sup>エスパーダ</sup>は一護くんに興味を示しているから彼のところに行ってるはずだ。だったら、私のところに来るはずがないじゃん。

そう思ったとき、私は青髪で顎のところに仮面の残骸がある口の悪い男の破面と対峙した。死神如きに負けないか……。すげー自信満々じゃん。

私と破面との戦いが始まった――。

戻って試合が早く見たい紅鯉は絶好調で霊丸のコントロールも急上昇。何か破面が避けた方向にグニツと曲がっていったんだけど……。

霊丸が炸裂して、やって来た破面を一瞬でポロポロにする。

ネムや阿散井くんたちも限定解除してからは一方的に敵を打ち破った。ネムは破面の霊圧に中てられて出てきた雨うるさちゃんを守りつつ、相手が気の毒になるくらいボコボコにしていた。

「……。つーか、なんで私だけ限定解除の許可下りないんだよ。使わないけど、何か腹立つ……。」

で、私の相手は意外とタフでまだ生きてる。十刃以外ならやれると思ってたけど、結構耐久力あるな……。とか、思ってるよ——。

「軋きしれ——豹王バンテラ！」

何か目の前の破面……帰レスレクション刃してかなり強くなってる気がする……。もしかして十刃

? そういや、「一番デカイ霊圧辿ったが……違ったか」みたいなことを言ってたような……。」

「王虚グラン・レイ・ゼロの閃光——！」

あっ——オサレな虚閃撃ってきやがった。やつぱり十刃だ。あいつ……。

私も霊力をありつた吸わせた霊丸を撃つと空間に歪みのようなモノが生じてそれを貫き、目の前の破面は大爆発に飲み込まれる。

やばっ! あいつが空中に居なかったら……始末書じゃ済まなくなるところだった。その辺のビルの壁が亀裂が入ってる気がするけど、セーフということにしてもらいたい

……。

オサレな虚閃と霊丸を同時に食らって、息を切らせてる破面。そこに東仙がやって来て、彼を強制的に連行した。

なんか、私を殺したいのは自分も同じとか言ってるけど、恨まれるようなことしたっけ？

「はあ、はあ……、俺は……、グリムジョー……、グリムジョー・ジャガージャック……！ 絶対にお前を……がふっ……、殺してやる……げふっ……」

破面はグリムジョーと名乗り、吐血を繰り返しながら、私を殺すと捨て台詞を吐いて帰って行った。

あー、あいつが6番目の十刃のグリムジョーだったか。これ、良いのかな……？ 一護くんのライバル取っっちゃつたらまずいんじゃないや……。

とりま、虚化のことを兄貴に相談するように促しとこう。じゃないと一護くんがパワーアップしないまま終わっちゃうかもしれないし……。

一護くんの相手の破面は弱かったみたいで彼は無傷で戦いを終えてた。

碎蜂は限定解除する前に結構やられちゃったみたいで、怪我を負っていたが織姫ちゃんに治してもらっている。彼女の能力が藍染の計画の鍵になってるんだっけ……。

とりあえず、織姫ちゃんの家のキッチンを借りて傷が癒えた彼女や仲間たちに霊力が

回復する料理を作って、振る舞ったので全員が戦闘前の状態まで一気に回復してくれた。

「陽葵さんって料理出来るんだ。なんつーか、超意外……」

一護くん、そりゃあねーよ。これでも随分と長いこと女の子をやってるんだ。曳舟さん直伝のこの料理だけは好評なんだぞ。

何にせよ、みんなが無事でよかった。テレビでは空座町で謎の大爆発とか竜巻発生とかそんな報道がされていて兄貴から久しぶりにお説教を受ける羽目になってしまったけれど……。

そうそう、カープはあのあとゲッツー取られて、9回の裏にサヨナラ犠牲フライを食らって負けたんだって。紅鯉はご立腹であった……。

「カープが勝ったら卍解？ 寝ぼけてんスカ？ 卍解に野球の結果なんか関係あるはずがないじゃないですか」

ちなみにカープの試合が見たかった理由を兄貴に話すと真顔でそう返された。

私と碎蜂が話し合った結論だと力説すると、「お察し」みたいな表情をされた。「脳筋同士らしいアホな思考っスね」とか思ってたんだろうな……。

じゃあ、どうやったら卍解習得できるんだよ！ ちくしよー！



## 十八ページ目

●月◆日 晴れ

一護くんの内なる虚のことを兄貴に相談するように促してみた。でも兄貴にこれ以上迷惑かけたくないって拒否する彼。

あれを出さなくても戦って勝てたから大丈夫とか言う。

そりゃ、甘い。甘すぎるよ、一護くん。君は虚化をマスターしなきゃ、この先の戦いについていけなくなるんだから。

とりあえず、彼が倒した破面は最弱クラスだから虚化を恐れないように戦えなきゃダメだよって伝えて、兄貴がダメなら平子さんに相談したらって、つい口を滑らせちゃった。

そしたら、一護くんは「あいつ、陽葵さんの知り合いなのか!？」って肩を揺すつてきたから、古い知り合いだと教えてしまう。これって……秘密にしなきゃいけないことだっけ……。

一護くんの悩みは解決できると思うから、一回相談をしてみたと頼むと、そこまで言うならって渋々納得してくれた。

これで、虚化の訓練を受けてくれるはず……。一護くん、頑張つて強くなつてくれ。

●月\*日 くもり

一護くんの友達のチャドくんと阿散井くんの特訓に付き合うことになった。

兄貴の指導のもと阿散井くんはボクシングの動きと蛇尾丸での戦いを融合したトレーニング。チャドくんは私がやった目隠しトレーニングに加えて、インパクトの瞬間に爆発的に霊力を高めて攻撃する方法などを習得しようとしていた。

チャドくんといえば、霊圧が消えるで有名だけど……。いつも相手が悪いんだよね。

せめて防御や回避は上手になって欲しい。この人、体がやたらと頑丈だったから避けるのが下手なのよ。一発当たったら即死みたいな状況で、それはよろしくない。

私がチャドくんの弱点を指摘すると、目隠ししてるチャドくんに私が霊丸をグミ撃ちするという特訓を兄貴は考案した。

ついでに阿散井くんにも隙あらばグミ撃ちをして神経を研ぎ澄ましてもらおう。

もちろん、私の霊圧は限定霊印とリストバンドで2パーセントから4パーセントに抑えた状態で訓練してる。

これなら被弾しても死ぬことはない。死ぬ一歩手前まででやめることが出来るから……。

傷付いた体を鉄裁さんが回道で治して、消費した霊力を私の料理で回復させる。こうすることで、死ぬ直前から全回復した状態で再び瀕死まで追い込むという特訓の図式が出来上がる。

「未だかつて死の恐怖をこれほど感じたことはない。あなたに比べたら先日の破面が優しく感じる」

「限定霊印されてて、なんでこんなハチャメチャ出来るんすか？ 後悔ならとつくの昔にしますよ」

弱音を吐くチャドくと阿散井くんだけど、そこにスパーリングパートナーとしてネムが加わり、さらに修行は厳しくなった。

つか、ネムの動きが格段に良くなってるな。

——って、腕からサイコガンみたいなのが出てきた。あつ、よく見たらブレスレットからか……。

あれって……、霊丸だよな……。まさか兄貴がネムにあげたモノって……。

「陽葵ちゃんのリストバンドの応用つス。吸収した霊力を弾丸にして放つ武器を作ってみたんス。霊圧に余裕がある方じゃないと干からびちゃうんですが、陽葵ちゃんと同じ体質のネムサンにはうってつけだと思ったんスよ」

ネムの弱点の遠距離が改善した瞬間だった。でも、勝手なことするとマユリさんが怒

りそう……。

そんなことを言うと「ボクの妹の遺伝子を好き勝手したんだから、これくらいはいいでしょ」って何食わぬ顔して言っていた。

「そういや、なんで他の人には一人称が「アタシ」になつてんだ？ オネエになつたんか」と疑つてしまったぞ。

●月☆日 晴れ

チャドくんと阿散井くんの特訓はネムに任せて織姫ちゃんの家に行った。

何でも碎蜂が総隊長と通信をするそうさ。

ちよと織姫ちゃんも帰つてきて、3人で総隊長と話すことに。

藍染の目的は霊王宮に行くために王鍵を創り出すことで、そのために空座町の魂だか何だかを生贄みたいにするらしい。

「そういや、そんな話だったっけ。あいつ、霊王を倒したいとか思つてたんだつたな。」

崩玉が完全覚醒するのに、大体三ヶ月くらい……。つまり、決戦までそのくらいの準備期間があるってことだ。

私も薬に頼らずに全力で戦えるくらいにはならないと。

織姫ちゃんが「一護くんが居なくなつたこと心配していて、初めて私は平子さんのところに行つたことを誰にも伝えてなかつたことを思い出す。」

未来の旦那さんの大事なことを黙ってごめんって彼女に伝えたら、面白いくらい赤面しながらワタワタしてた。いやー、青春だなあ。

私の青春っていつだったけ？ アイマススクつけて、リストバンドつけたときだった……。うわっ……。かなり痛い子じゃん。

「私も夜一様と……」

碎蜂と私は同時に同じセリフを言って恥ずかしくなる。

あれ？ 私たちって100年以上もの間——精神的に全く進歩してないんじゃない？

●月：日 くもり

ここんところ野郎どもの修行に付き合いつばなしで、せっかくの現世を楽しめてないので碎蜂とネムを誘って出かけることにした。

職務怠慢？ いやいや、たまには羽伸ばさないとやってらんねえって。

当たり前のようにゲーセン行ったり、カラオケ行ったりしていると、碎蜂に馴染みすぎじゃないかと変な顔をされる。そして浮かれ過ぎとも言われてしまった。

つい、前世以来の娯楽に調子に乗ってはしやぎ過ぎてしまったみたい。

でも、碎蜂だってUFOキャッチャーで熱くなつてアホみたいに小銭ぶつ込んでたじゃん。結局、ネムに黒猫のぬいぐるみを取ってもらって、上機嫌そうにしてたのを私

は見逃してないんだぞ。

思えば、こうやってのんびりする時間って大事なモンだったんだなあ。

◇月□日 雨のち晴れ

鉄裁さんが結界を超強化してくれたので、兄貴の指導による霊圧コントロールの修行が本格化した。

実はあの薬はこの特訓用だったらしく、最初は一分しか全力の状態をコントロール出来なかったが、今はその持続時間がちよつとずつ伸びている。

それで、もう一つの修行も並行して行っているのだけど、こっちの方がより実践的に使えるようになるかもしれない。

とにかく、自分の力くらいそろそろ自由に使えるようにならなきゃ……。

あと、卍解の修行もしてるんじゃないけど……。こっちの方は全く上手いかん。

屈服させるには私自身がカープ女子にならなきゃならないのかもしれない。なんてこと言つたらまた兄貴に馬鹿にされるんだろうな。

◇月●日 晴れ

まだ崩玉の完全覚醒まで二ヶ月近くあるはずなのに破面共が強襲してきた。

先に彼らと遭遇した碎蜂やネムたちがピンチっぽいので私と兄貴は急いで破面たちの下に駆けつけた。

「おおーっ、一護くんが虚化して片腕のグリムジョーを圧倒してるじゃん。」

ネムはタコみたいな触手がある十刃と戦っているのか……。遠距離からの霊丸がい仕事して善戦してるように見えるけど……。一角くと弓親くんはダウン……。

碎蜂が戦ってる、デカブツがヤミーか……。そして、あの子供みたいなのは恐らく総隊長対策で作られたワンダーワイズって奴だろう。

とりあえず、一番ピンチっぽいのは不意打ちで利き腕に大ダメージを負って得意の雀蜂が出せなくなってる碎蜂だな。

「脳筋のヤミーとは相性が良さそうだし……。確か、こいつが0番で一番強いんだよね……。……。」というところで、アカリ紅鯉片手に彼の下へ……。

「お前を待つてたぜ、浦原陽葵。ひまりグリムジョーをボロ雑巾みたいにしたらしいな。だが、パワーなら負けねえぜ」

ヤミーがそんなことを言いながら、腕を伸ばしてきたので、本気でやらないとまずいと思つて薬を飲んで「安解」した。既に限定解除済みなので、これで全力が出せる。兄貴との特訓の甲斐があつて薬を飲めば、「安解」しても10分くらいなら何とか自分の

靈圧を完全に掌握することが出来るようになった。

こいつは確か怒れば怒るほど強くなる十刃だったな——力比べは望むところだ。とりあえず、ヤミー相手にフルスイングでどれだけのダメージが与えられるか試してみよう。

——ヤミー……吹っ飛ばされて動かなくなっちゃった。

他の破面がすげーこっち見てくる……。

その後、連中はさっさと撤退していった。何しにきたんだろう。ヤミーの靈圧は微妙に感じるから生きてはいるのか。ブーツと見てないでトドメを刺せば良かった。

◇月★日

織姫ちゃんが破面に連れ去られた。てか、自らそっちに行っちゃった。一護くんの怪我を治して。



ウルキオラか何かに唆されたんだっけ。あんにやろう——ぶっ飛ばしてやりたいけど、それは一護くん譲ろう。

で、私らは破面や藍染の本拠地に乗り込んで織姫ちゃんを連れ戻そうと意気込んだんだけど、総隊長がそれを許さない。

こつちへの迎えとして市丸と白哉くんを送って来やがった。

頭に血が上ってる私と碎蜂を宥める市丸。なんか、お前が大人の対応みたいな感じなのが腹立つ。

後でこつそり向かわせるだつて？ 本当だろうか……？

とりあえず、瀨霊廷に戻るとするか。思ったよりも早く決戦開始しそうだし。

しかし、昨日は安易に薬を飲んで“安解”したけど、こつからの戦いはそうは言ってもらえない。温存することも考えなきゃ……。

藍染の野郎をボコボコにするには全力を出すことが最低条件なんだから……。

◇月◎日

長い一日だった。とにかく疲れたけど、晩御飯も美味しかったし、風呂にも入って、ビールを飲んだことだし、そろそろ日記を書こうと思う。

それにしてもさつき食べた晩飯のすき焼きは美味かった。最初にすき焼きについて

書こうかな……？ 私には春菊が特に好きなんだけど——まあ、それは最後でいいか。

とりあえず、ルキアちゃんと阿散井くんよりも遅れたけど、私も虚園ウエコウ園に行ったのよ。メンバーはマユリさんとネムと、卯ノ花さんと勇音ちゃん、そんで私。

白哉くんはルキアちゃんのこと心配じゃないのって聞いたたら、私がいるなら心配はないってさ。漫画よりも偽空座町の陣営に人を回している気がするけど、どういう采配だろう……。

白哉くんは戦闘力だけは誰よりも信頼してるって言ってくれた。いやー、照れるじゃん。

虚園に着いて、さっそく十刃に出くわしたのよ。ノイトラとグリムジョーとゾマリがいつぺんに私の目の前に。

なんか、私がかつちに来るまで待機するように命じられてたんだって。そんで、絶対に消せって言われてるみたい。あの腹黒……本当に私のことを疎んじてるんだな。

私は修行で出来るようになったあれを使うことにした——。

《日記はまだ続いている》

## 十九ページ目とルキアの戦慄

海燕殿の霊体を喰らったという十刃エスパーダと私は死力を尽くして戦い、打ち倒すことが出来たが重傷を負ってしまふ。

井上を助けるために意気込んでいたのに……もう地に伏すようなことになるなんて情けない……。

せめて霊力を少しでも回復することが出来れば、傷の治療をすることが——そんなことが頭に浮かんだとき、先程の十刃よりも大きな霊圧が近くに現れた。

私は一瞬身構えようとしたが、すぐに安心する。この大きくて温かい霊圧は陽葵殿の霊圧だ。

「おろつ？ ルキアちゃん、大変じゃない」

陽葵殿は私の傷口の応急処置をして、持ってきたという弁当を私に少しずつ食べさせる。これこそ、彼女だけが使える特技……霊力回復料理だ。

彼女の大きすぎる霊力が込められた手料理はまたたく間に私の霊圧を完全回復させるに至った。これなら、自分の回道で傷の手当ては出来る。

「そっか、十刃を倒したんだ。さすがはルキアちゃんだね。私も負けないように頑張

らなきや。一護くんとかネムに先を越されて十刃と戦う機会がなかったりするかもしれないけど……」

陽葵殿はいたずらっぽく笑って、いつものように私の頭を撫でてくれた。

この人がいるだけで負ける気がしないのは、どうしてだろう。

恐らく、陽葵殿の実力なら十刃の一人や二人——。

そう思っていると大きな霊圧が三つもちちらに向かつてくるのを感じた。

これは——まさか……。陽葵殿を狙って……。

「ちっ、藍染もビビりすぎだな。たかが女一人に三人がかりたあ、苛つくぜ」

「ノイトラ、藍染様と言いなさい。殺しますよ」

「浦原陽葵<sup>ひまり</sup>イ……！ 必ずこの手で殺してやる！」

先程のアーロニーロよりも明らかに霊圧が大きい。恐らく三人とも十刃なのだろう。

藍染のやつ、陽葵殿をかなり警戒しているのだな。

「祈れ——聖<sup>サン</sup>哭<sup>タテ</sup>螳<sup>テ</sup>螂<sup>レサ</sup>！」

「軋<sup>バン</sup>れ——豹<sup>バン</sup>王<sup>テラ</sup>！」

「鎮<sup>ブル</sup>まれ——呪<sup>ブル</sup>眼<sup>ヘ</sup>僧<sup>リ</sup>伽<sup>ア</sup>！」

破面共特有の刀剣解放……帰<sup>レス</sup>刃<sup>レクシオン</sup>。

三人の霊圧は先程までよりもさらに増大する。しかし、さすがは陽葵殿だ。刀剣解放

状態の彼らの霊圧を更に超えている。

奴らの能力は解らぬが陽葵殿なら……増援が来るまで或いは――。

しかし、私の希望的観測は見事に打ち破られる。

「それでは、さっそく絶望を味わって貰いましょう」

「女一人に三人つてだけでもムカつくつてのに、ウルキオラの借り物までもう使うのかよ」

「じゃあ、テメーだけ使わずに死んでりゃいい」

――異形……姿形だけではない。霊圧そのものが暗く重いモノへと変質する。

大きさもそうだが、今まで私たちが対峙してきたどの虚や破面とも質が違う化物が目の前に現れた。

「――刀剣解放第二階層レスレクシオン・セグンダ・エターバ。刀剣解放の第二段階……尤も、私たちがこの存在を知った

のすらい最近でしたが……。藍染様がウルキオラから話を聞き、崩玉の力を利用して我々にだけ力を与えてくれたのです。浦原陽葵、あなたを倒す目的のためだけに……」

「藍染様には感謝してるぜ。リベンジのチャンスをこうして与えてくれたんだからなア」

「グリムジョー、テメーは下がってな。俺が一瞬で終わらせる。護廷十三隊、最強だか

なんだか知らねえが。この力を手に入れた俺はスタークにだつて勝てる」

レスレクシオン・セグンダ・エターバ  
 刀剣解放第二階層……？

何ということだ、不気味な霊圧が陽葵さんに匹敵するくらいまで上昇したぞ。

「ルキアちゃん、ちよつと離れようか」

こんな状況でも陽葵殿は優しく微笑みながら、私を抱きかかえる。凄まじい霊圧のせいで息苦しく感じていたが、こんなにも彼女の腕の中は安心感があるのか……。

しかし、あいつらが化物であることは紛れもない事実だ。如何に陽葵さんが強くとも

「じゃあ、二分の一に調節してつと……」

彼女がそう呟くと、陽葵さんの霊圧が爆発的に上昇する。

な、なんだ……、この霊圧は……!?! 卍解状態でもないにも関わらず……先程までとは比べ物にならないくらいまで大きくなつたぞ。

に、二分の一とはどういうことだ？ まさか、フルパワーの半分だともいうのか……。

十刃たちもあまりの霊圧の上昇に若干怯んでいるようにも見える。

彼女は一瞬で距離を取り、私を下ろす。そして、いつものように「かつ飛ばせ」と解

号を唱え——目にも止まらぬスピードで十刃たちに肉薄した——。



◇月◎日 晴れ（二ページ目）

おいしい、レスレクシオン・セグンダ・エターバ 刀剣解放第二階層つてウルキオラ以外も使えるのかよ、と心の中で私は  
ツツコミを入れた。

私がフルパワーの持続時間を上昇すると同時に訓練したのはリストバンドによる  
霊圧の抑制を少なくしていくことだ。

兄貴が100年もかけて準備してくれたおかげで、私は何とか二分の一まで霊圧を解  
放しても戦うにあたって不自由がない程度までコントロールが出来るようになった。  
まあ、時々些細なミスをすることもあるけど……。

藍染と戦うにはまだまだ不足だけど、戦闘力的に言えばかなりパワーアップ出来たと  
思う。

兄貴は私よりも私のことを知ってるなあ。あんな訓練は自分じゃ絶対に思いつかな  
かったよ。

ルキアちゃんを抱きかかえて、連中と距離を取り……彼女の安全を最初に確保する。さて、十刃の三人は見た目がかなり変わって禍々しい感じだな……。こりや、骨が折れそうだ。

「とにかく、十刃最速の私があの子の支配権を奪います。動きを封じれば、如何にパワーがあろうと関係ありません」

ゾマリって、足が早い子なんだっけ？ 色黒の子って確かに足早そうだよな。

「わ、私の響転ソニードに付いてくるなんて……、これが死神の瞬歩……」

いや、足に力を入れて無理やり速度を上げてるだけだけど……。動くたびに建物の床に穴が空いちちゃってるけど、藍染の家だしまあ良いか。

「しかし……双児響転ヘメロス・ソニード……！」

ゾマリが増えた。こいつの能力が私は全然思い出せずにいる。

分身の術が特技だったのか……。

「今です！ 私の愛アモールで動きを封じます！ お二人とも攻撃を！」

「ちっ！ ゾマリなんかのおこぼれに飛びつくなんざ——まあいい。殺しとくか」

「粉々に砕いてやる！ 豹王デスガロンの爪！」

ゾマリの特技が目で睨んだところの動きを支配するってことを思い出したとき——既に遅かった。



彼の体にある気色悪い無数の目がこちらを睨んだ瞬間にノイトラとグリムジョーが一斉にこつちに向かつてくる。

ま、まずい——このままじゃ……。

「——ぐふつ……お、俺の鋼皮イェロを……す、素手で……」

「がはっ……！　ゾマリ、て、てめえっ……！」

意外なことに体がなんととも無かったから、ノイトラの腹を左手で殴り、グリムジョーの両手から刃が沢山飛び出てきたので、それを靈丸で彼ごと吹き飛ばした。

二人はその場に蹲り……、ゾマリを睨む。そりやあそうだ。こいつは私の動きを封じたとか言つて、それが嘘だったんだから。怒るよね……。

「まさか、藍染様が仰つていた鬼道を無効化する防御……。わ、私の愛アモールまでも無効にしたとでも言うのですか……？　こ、こうなつたら……双児響ヘメロス・ソニード転！　どうです!?　以前までは五体までの分身しか出来ませんでした、今は百体！　百体もの分身が可能となりました！　これであなをを刺り殺します！」

大量のゾマリが私の周りに現れて、ぐるぐる回る。

どれが本物かわからん。こういうときは頭脳プレーだ。

——全部殴った。百体全部殴れば、どれか本物だろ。

ゾマリは頭から血を吹き出しながら、藍染様万歳とか言って倒れる。

グリムジョーとノイトラムも、そのあと立ち上がって、長い名前のオサレな大技を使ってきたけど、特大の霊丸をグミ撃ちしたら、知らない内に倒れてくれた。

うーん。立派な建物だったのに瓦礫の山にしちゃって悪いなあ。

藍染の家で本当によかった。じゃなかったら始末書何枚書かされることか……。

そして、後ろで見てたルキアちゃんと合流。破面が何体も襲ってきたけど、適当に蹴散らしながら一護くんの方に向かう。

途中でネムやマユリさん、それに阿散井くんとも合流。雨竜さんとチャドくんは一護くんのところにいち早く向かったそうさ。

阿散井くんは、十刃のザエルアポロってやつに苦戦したけど、ボクシング特訓のおかげで軽傷で済んだらしい。

倒したのはネムだから悔しいとも言ってたけど……。

なんか、ザエルアポロはネムの体に卵を産もうとかしたらいいんだけど、それを感知した彼女は逆にカウンターを食らわせて、終始サンドバッグ状態にされたそう。

マユリさんから、「君に似て野蛮な戦い方が板についてきたヨ」とか言ってたけど、これって褒め言葉なのかな……。

私たちが一護くんのところに辿り着いたとき、彼はウルキオラを倒し終わった後だった。

彼は疲労困憊って感じで、仲間に支えられて立ち上がるのがやっとだったので、私はルキアちゃんに預けてた弁当を彼に食べさせる。

マユリさんが黒腔ガルガンダを解析したとかで、それを利用して私や一護くんを現世に送ろうとしたが、そこに馬鹿デカくなったヤミーが現れた。

とりま、卯ノ花さんと一護くんとネムに先に現世に行ってもらおうということで、私が巨大ヤミーと戦うことに。

前に戦ったときは100パーセント、全開の力で戦ったし、ヤミーも小さかったから、すぐ倒すことが出来たけど……、今回はそうはいかんだろう。

「ずっとテメーへの怒りを溜めていたぜ！ 俺が第0十刃ゼロ・エスパーダ！ 俺が最強なんだ！」

とにかく、私はどんどんデカくなるヤミーの攻撃を躲しながら、靈力を紅鯉アカリに集中する。

作戦は何度も避けながら溜めてぶっ放すを繰り返すという、ヒットアンドアウェイ作戦だ。

今日の私つてば頭いい。冷静に考えて戦うことだつて覚えたんだぞ。

そして、靈力を極限まで溜めて、私はヤミーの頭めがけて紅鯉を振り落としたり。

——ヤミー、地面に埋まって動かなくなっちゃった。

これで、私も現世に応援に行ける。一護くんが倒してくれるかもしれないけど、私も藍染を一発くらいはぶん殴ってやりたいし。

ということ、私はマユリさんに黒腔カルフタを開けてもらって現世に行かせてくれってお願い

いした。でも、彼は静かに首を横に振る。

どうしてだよ？ さっきまで行けって言ったのに……。

「君が敵地だからって、力加減も考えずに大技を放つから、余波で装置が壊れたんだヨ！ 相変わらず、君は信じられない脳筋だネ！」

えっ？ わ、私のせいで装置壊れたの？ 一護くんたちは現世に着いた後だったから良かったけど……。

これじゃ、私が本当のバカってことになっちゃう。

「なっっちゃうじゃなくて、バカなんだヨ！ 直すまで時間がかかる。少しは正座して反省したまええ！」

マユリさんの説教を正座して聞く私。

そんな、私を見る阿散井くんたちの視線が痛かった――。

《日記はまだまだ続いている》

## 二十ページ目と碎蜂の独白

黒崎一護、卯ノ花隊長、そしてネムがこちらの戦線に加入した。

陽葵さんが来ていない？ まあ、彼女ほど殉職という言葉と無縁の人物は居ないだろうから心配はしていないが……。

こちらは十刃の三人を片付けて、残りは藍染一人という状況まで追い込んだ。

十刃共は確かに強かった。私が相手をしたバラガンという男は「老い」を司る力を要しており、市丸や大前田の助けがなくては私は五体満足ではいられなかったかもしれない。

しかし、最終的に途中から加入したヴァイザード仮面の軍勢のハツチの力を借りて敵を倒すことが出来たとはいえ、雀蜂雷公鞭の連射は少々疲れたな。あれが使えるのも、あと2、3回が限度だろう……。

藍染の能力は完全催眠。いつ使用してるのかこつちには全く分からないから、同士討ちに注意しろと陽葵さんは言っていた。

彼女からこれほど冷静な言葉を貰ったのは何時ぶりだろうか……。彼女の場合は実体験があるからかもしれない……。

ともかく、完全催眠が効いていないのは、ずっと修行でアイマスクをしていたという陽葵さんと、最近死神の力を手に入れたばかりの黒崎のみだ。

藍染に確実にダメージを与えることが出来るのはこの二人しかいない。

そして、この場には黒崎ただ一人しか居ないということは、彼を守りながら藍染のスキを作る——これが私たちに出来ることだ。

この場で動ける者たち全員が藍染を取り囲んでいる。

「あの気色悪いバケモンしか斬ってねえんだ。黒崎とも斬り合いてえが、テメーを斬るのも面白そうだ」

「黒崎一護、兄は私たちが守る。そのような怯えた顔をするでない」

比較的ダメージが少ない更木や朽木が中心となり、藍染を攻めるが……奴の強さは異常だ。

あの理不尽さは陽葵さんを彷彿とさせる。レベルが高い鬼道や斬術を使うのと、圧倒的な暴力の差はあるが……。

しかし、我々も伊達に護廷十三隊の隊長を名乗っていない。藍染のスキを何重にも張り巡らせた罫で遂に作り上げることに成功する。

式撃決殺が霊圧差で効かない——何となく分かっていたことだ。

霊圧の権化みたいな者と修行した身だからな。試したことは流石に無かったが……。

だが、効かないから受けるとは浅薄な考えだぞ——！ 私は効かないと分かっていたからこそ、雀蜂による攻撃のあと……追撃として彼に足払いをして、バランスを崩すことに成功する。

そして、その一瞬のスキをつき、日番谷が藍染の胸に刀を——。

否——それは神速で伸縮する刃によって阻まれた。

市丸ギン……まさか、あいつ……藍染の味方で……。

「市丸、テメー！ 何しやがる！」

「アカン、不用心すぎて見とれんわ。あの人があんなに簡単にスキを晒すわけじゃないですよん」

「流石だね。ギン……、常に催眠状態であるという意識を働かせていたのか」

鏡花水月——だと？ 藍染だと思っていた対象は雛森であった。

日番谷はもう少しで自分の幼馴染を手にかけてようとしていたのか……。

それにしても、確かに陽葵さんはいつ使うか分からないとまで言っていたが、ここまですら自然に錯覚してしまうとは……。

藍染はまたたく間の間に朽木と京楽、そして日番谷をも斬り捨てる。

「それだけやないです。この子の視線を追ったんですわ。唯一、完全催眠にかかっ



らんなら、自分の目よりも信頼出来ますから……。——それに自分の他にも同じことをしてはるみたいですよ」

「——っ!？」

市丸が言葉を言い終わつた瞬間に、藍染はネムに殴り飛ばされる。あの∞の軌道を描きながら頭を動かす動きは——彼女の必殺技なのか……。次々と拳が藍染に突き刺さる。

「調子に乗らないでもらおう」

「……………んっ！ 腹部損傷……………離脱します」

しかし、ネムも藍染に致命傷を与えることが出来ずに腹を斬られて、彼と距離を取つた。ネムの防御は陽葵さん譲りだが、それを容易く貫くとは……………。

「——所詮は浦原陽葵の劣化コピー。恐れるに足りない。——っ!？」

「藍染隊長……………、いや、藍染☆自演乙☆惣右介！ あなたを斬ります！」

「まさか、君が私に斬りかかるとは……………。躰が足りなかつたのか……………、それともあの女の影響か……………」

頬を雛森に斬られた藍染は血を舐めながら微笑み——霊圧を急激に上昇させる。雛森の目にも止まらぬ剣速にも驚かされたが……………藍染の霊圧……………以前よりも格段に大きくなっているような……………。

雛森は何度か打ち合った後に吹き飛ばされ、それを助けに入った平子も斬り伏せられた。

そこからはまさに一方的な展開だった。蹂躪されていく仲間たち、そして仮面の軍勢たち——。死神の戦いは霊圧の戦いだと言つてのけるだけはある。

動ける者はどんどん減つていき、私も奴の手にかかろうとしていた。

そのとき——爆炎が舞い上がり、山本総隊長が藍染の前に立ちふさがる。圧倒的な熱量を携えて……。

しかし、総隊長の対策をするためだけに造られた破面によつて流刃若火の炎は封じられ、彼は自らの炎が暴走するのを防ぐために重傷を負う。

さらに彼が最後に放つた一刀火葬によつて出来たスキを突いた黒崎一護は藍染にダメージを与えるも、それもすぐさま復元してしまった。

よくわからんが、崩玉と一体化した藍染は防衛本能とやらであらゆるダメージを無にすることが出来るらしい。

そこに現れたのは黒崎の父親である元十番隊の隊長であった男——志波一心……。現世に来たときから彼の存在には気付いていたが、陽葵さんが知らぬフリをしると頼むからそうしてきた。

黒崎自体が自分の親が死神だと知らなかったようだったので、何か事情があるのだから

う。

藍染はドンドン化物になっていった。浦原あの男が造った崩玉とは厄介なモノだ。

今や、黒崎親子を除くと動けるのは私と市丸、そしてネムといつの間にか遠くまで逃げていた大前田。

そこに浦原喜助と夜一様が戦線に加わるも藍染の優勢は揺るがなかった。

それにしても、黒崎親子を除けば元も含めて二番隊が揃うとはな。護廷十三隊最強と呼ばれた我等の力をあの珍妙な姿に変化した彼奴に見せてやる。

幸い、藍染は大幅なパワーアップに浮かれて油断していた。攻撃を敢えて避けられないものも、我々をナメている証拠であろう。

大前田が鬼道で陽動して、ネムが霊力の塊を乱れ撃ちする。そして、私の雀蜂雷公鞭を放つことよって出来た一瞬のスキを市丸が突いた。彼は陽葵さんから、「鏡花水月の能力から逃れる方法は、完全催眠の発動前から刀に触れておくこと」という話を聞いていたらしい。そう、彼は藍染の斬魄刀を素手で掴んだのだ。

なぜ、あの人がそんなことを知っているか知らないが……市丸の卍解から放たれた細胞を溶かす毒”によって——藍染は断末魔を上げて消滅する。”

崩玉は市丸の手の中に落ちて、全ては終わったかのように見えた——だが、しかし……。

藍染は生きていた。崩玉の意志によって神に近付いたとかほざいているが、確かに人智を超えた力を手に入れたのかもしれない。

市丸が斬られようとしていたので、私が咄嗟に彼を突き飛ばして事なきを得る。残念ながらそれもあまり意味がある行為ではなかったが……。

私たちはまたたく間に、彼に黻られ……そして、倒されてしまったのだから……。

それにしても……藍染の霊圧を感じる事が出来なくなったのはどういうことだ……？ 彼は本物の空座町に行ってしまった。

動けるのは……黒崎一護と志波一心のみ。これではあまりにも——。



◇月◎日 晴れ(三ページ目)

マユリさんにごめんなさいして、装置を修理してもらい、ガルガンタ黒腔を開いてもらってみんな空座町に戻った。

織姫ちゃん、一護くんのことをずっと心配していいじらしい。まるで、昔の私を見てみたい。こういう、ヒロインみたいに可愛らしい時代、私にも、あつたよね？ 日記を隅々まで探せばきつとあるはず。

雨竜くんもチャドくんもウルキオラとの戦いに巻き込まれて怪我を負っていたが、彼女と勇音ちゃんの治療で回復していた。

この黒腔ガルガンタ——足場を作るのが超難しい。私が、ポロポロの足場しか作れなかったの  
で、強制的にマユリさんが担当するという結果になった。

既に藍染の姿はなかったの、恐らく彼は空座町に行ったのだろうと予測して、私たちは更に穿界門せんかいもんを開き空座町に向かう。

——無月……。

一護くん自身が斬月になるという最強最大の必殺技。すなわち——最後の月牙天衝。全てを黒く塗りつぶすようなとんでもない霊圧から私は彼がそれを使ったということを察する。

あーあ、もう終わった後かあ。まあ、みんなが無事だったからいつか。

大地を踏みしめて、藍染や消えゆく一護くんの霊圧がある方向にジャンプする。やべ、現世のアスファルト壊しちゃった。藍染がやったことにしよう……。

彼らの下に着いたとき、ちようどウチの何でもありなチート兄貴が「新しい鬼道っス」

とかやつて藍染の力を封じ込めようとしていた。

藍染……、なんか兄貴に私を利用して霊王をどうのこうのとか言ってるし。

あいつ、兄貴のこと何だと思ってるの？ つーか、彼の頭の中では私と兄貴がすげー野望を企んで暗躍してるみたいなストーリーが出来上がったのかよ……。

とにかく、藍染はもう終わり。私は兄貴に劳いの言葉をかけようと近付いた。すると――。

「浦原陽葵イ！ 私が予測したよりも随分と遅い登場じゃあないか！ そうだ！ もはや、天に立つことなど……霊王など……どうでも良い！ 君と雌雄を決することこそ私の望みだ！ 崩玉よ……！ 私に従え！ あの女を超える力を私に……!!」

意味が分からない。兄貴の鬼道の封印が完了しようとしたとき――再び藍染の霊圧がグンと上がった。

見た目も売れないロックバンドやってそうなロン毛のフリーザーみたいな感じに戻ってしまい、思いつきり嫌な予感がする。

「どうやら、陽葵ちゃんが来てしまったせいで、藍染の折れかけた心が蘇って崩玉が鬼道の効果を相殺したみたいっスね。せめて、もう三十秒くらい遅れて来てくれれば……」

ちよつと待つてよ。何それ……まるで私のせいで藍染が荒ぶっているように聞こえ

るぞ。

これ、私のせいなの？ 漫画通りにことが進んだ、と思つてたけど……まさかこんな事になるなんて……。

「君に感謝する……！ 君と出会わなかつたら、ここまでの力を手に入れることは出来なかつただろう」

ロン毛フリーザとなつた藍染は鏡花水月が消失したものの、今まで以上に鋭い殺気を私に送る。なんだかなあ。感謝されてこんな嬉しくないことつてないよね。

「安解——」……私は兄貴の作つた薬を飲んで霊圧を全開にする。

そして、拳と拳がぶつかり合い……衝撃波が発生して兄貴と一護くんが吹き飛ばされてしまった。

へえ、力でゴリ押しするつもりなんだ。私に合わせてくれてんのかな……。

何度か拳をぶつけて、その余波で地形が変わつていく。こりやあ、後で怒られたりしないか……。そういや、なんで私は拳で戦つてるんだ……？

「かつ飛ばせ——紅鯉！」

紅鯉アカリのフルスイングを片手で受け止めて、私に蹴りを放つ藍染。

私はそれを膝で受け止めて、頭突きで彼を吹き飛ばす。彼は地面に激突して大きなクレーターを作つた。

あいつの斬魄刀はもうないから、鏡花水月の催眠に侵されることはない。アイマスクを外しているからなのか、彼の動きが手に取るようにわかる。考えるより早く身体が動く——。

藍染の拳の弾幕をかくぐり、紅鯉を腹にめり込ませる。彼はくの字に曲がり、血を吐き出したが……ニヤリと笑みを浮かべて膝蹴りをかましてきやがった。これほどの痛みを感じたのは久しぶりだなあ。

何分彼と殴り合ったか分からない……。周りの岩山がどんどん瓦礫へと変化する。ていうか、このままじゃタイムオーバーもあり得る。

「流石だね。崩玉を支配し神に等しい力を手に入れた私と互角とは——。いや、君のほうが膂力は少々上かもしれん。しかし、その卍解には制限時間があるはずだ……。残念だったな。私の勝ちだ……！」 浦原陽葵……」

藍染の言うとおりだ。“安解”には制限時間がある。このままだと私の霊圧のコントロールは失われて敗北は必至。

仕方ない……。まだまだ、実用的に使える段階じゃないんだけど——。



「正解——！」

私がそれを口にした時……、藍染の表情が大きく歪んだ——。  
なんか、すんごく狼狽えて何か叫んでるんだけど……。

《日記はまだまだまだ続けている》

## 二十一ページ目

◇月◎日 晴れ（四ページ目）

やっちゃまった。卍解を使っちゃまった……。藍染が驚いてるのも無理はない。恐らく私が本来……卍解を使えないことなど、とつくにお見通しだったんだろう。

そうなの。私、卍解を——ミミも動かせないよ。

ひと月ほど前に兄貴との特訓で半ば強引に紅鯉アカリの具象化には成功していて、あとは彼女を屈服させる段階で私はもがき続けていた。

彼女の投げる球（霊丸）を打ち返したり、掴んだり、バットで殴り合ったり……色々したけどこいつは頑なに私を主として認めてくれない。

つまり、この卍解は未完成——張子の虎。私は自分の卍解がどんな力を持つてるのかも殆ど知らない。

「斬魄刀に遊ばれてるようじゃ、卍解修得とは言えないっスね。いいっスか、安易に解放だけはしないようにしてください。もし使うのでしたら——」

兄貴からは卍解はまだ未完成でとても実用的な段階じゃないから、絶体絶命の事態以

外では使わないようにと言われていた。

でも、藍染がこうなつて。実質戦えるのが私しか居ないんだつたら、出し惜しみして負けるより、使えるものは使つたほうが良いと判断する。

だって、負けたら空座町がなくなるんでしょう？ そんな結末許せないよ。

つて思つてたんだけど——荒ぶる紅鯉アカリの力が思つた以上に強い。

兄貴は私の霊圧で卍解の力を暴走させたりなんかしたら、現世への被害は計り知れないと忠告していた。

今の私は指一本動かせないスーパー無能タイム、略してSMTに入つていた。

どうしよ、これ。解いちやおうか……。いや、解いたら解いたでタイムオーバーで負けは必至だし……。

「なつ……、なつ……!?! ……ば、卍解だと……? 霊圧がまるで感じられなくなつた。こ、これではまるで……」

幸いなことに藍染はまだ驚いて目を見開いている。でもね、私つてば動けないのよ。

私の卍解は——紅地獄鯉アカヘルグンダシ。

私の背後で赤い帽子と法被はつびを身に着けた人形たちが九体現れて、メガホンやトランペットや太鼓をもつて待機している。そして、そいつらを指揮するかのごとく紅鯉アカリが先

頭に立っている。

カープ女子の延長線だから応援団ってことらしい。名前はカープの選手みたいなの……。

斬魄刀が人形になっちゃってるから、当然私は素手である。今は、全力で紅鯉アカリの動きを止めてるところだ。

さて、そんな未完成の卍解をこの絶体絶命の場面で使う意味は何なのかというと、それは卍解の霊圧の上昇量が関係する。

——斬魄刀を具象化した時点で約十倍に上昇する霊圧。

私が幼いときより修練したのは右拳に霊力を集中することだ。

故に卍解の暴走を食い止めつつ、あいつに全力のグープンをお見舞いすることが出来れば必殺になりうる——。

つまり、この未完成の卍解は私の霊力を爆発的に上げるための餌なのよ——。

「警戒すべきはあの九体の人形と斬魄刀の本体——。特にあの人形からは一体、一体から私と変わらない程度の大きな霊圧を感じる……」

藍染は私の後ろの人形たちをめっちゃめっちゃ警戒していた。

まあ、恐らく卍解を使いこなせるようになったら、何らかの能力が働くんだろうけど、今は動かしたら現世に甚大な被害が出るかもしれなので動かさないよ。ていうか、動か

せないよ。

これらは全部……ハリボテとか、デコイみたいなモノだし……。

私は精神を集中させて卍解の靈力を拳に集めた。

『……ううっ……、やるのお。じゃけど、ウチはあんたの言うことは聞かんよ。認めたらんけえのお』

紅鯉は頑なに私に屈服する気はないと頭の中に声を送る。

しかし、拳に靈力を集めたおかげで私の体は少しだけ自由を取り戻した。

藍染がこつちを警戒して動かなかつたのもラツキーだったな。おかげで右拳に靈力を充満させることが出来た。

まともに動ける時間はどれくらいだろう。1秒……、いや、もつと短いか……。

「こ、こうなつたら、崩玉よ——私に全てを消し去る力を与えよ！ 全知全能に相応しい神の力を——！」

藍染は崩玉にさらに願いを込め——崩玉はそれに呼応して禍々しい光を放つ。靈圧がさらに上がるのか……。なんつー道具を作ったんだよ。兄貴のやつ……。

「ぐはっ——！ はあ、はあ……、ふははははっ！」

しかし、彼の全身から血が物凄い勢いで吹き出す。これは、あまりの靈圧の急上昇に体がついていけなくなつたとか……そんな感じ？ 藍染はそれでも嬉しそうに笑つて

いる。

「ふはははは！ 浦原陽葵イイ！ この霊圧を見よ！ 君自身の霊圧が感じられぬのは、全霊圧がその人形たちに吸収されているからだ！ だが、人形がどんな能力を持っているようと関係ない！ これだけの力があれば、君が能力を発動する前に片付ける事が出来る」

藍染は愉快そうにニヤリと笑い、霊圧をドンドン高める。

そして、彼は音速よりも遙かに速く私に肉薄して——その剛腕で私を捉えようとした。

——アイマスクを取った現在の私の霊的な感知能力は研ぎ澄まされている。

——このとき、私は脳が反応するよりも速く右の拳を繰り出していた。

藍染の拳は私に届かず——私の正解時の霊力が込められた右ストレートはカウンターの要領で彼の胸の崩玉を捉える。

——彼は回転しながら吹き飛ばされて地面に激突して——地面には底が見えないほどの大穴が空いた。

ラッキー……どう動こうか迷ってたら、藍染がこつちに近付いて来てくれて……。もうタイムオーバーだ。卍解を解いて……リストバンドを再び装着する。

で、なんか藍染の崩玉が一時的に機能が停止しちゃったんだってさ。

兄貴がどうやっても処分しようとしても無理だったのに、まさか殴ったくらいで止まるとは思わなかったって言ってた。それで、その間に彼は藍染を封印しなおしたらいい。

彼は崩玉が止まったことに関して、通常では考えられない量と濃度の霊力を注入されたことよってオーバーヒートしたことが原因だって分析してたけど、「我が妹ながらちよつと引くつス」って言われたのには傷付いたよ。これは、可愛い妹系ヒロインキャラはもう卒業せねばならないみたいだ。

かろうじて——本当に虫の息でかろうじて生きていた藍染はその場で拘束されて、尸魂界に送還された。

兄貴によれば清々しい表情をして倒れていたみたいだ。まるで、ストレス解消した後みたい……。

私や一護くんは結局は彼のストレス発散に付き合っただけなんだよね……。藍染の処遇は四十六室が決めるんだってさ。

一護くんには土下座して謝った。君が死神の力を失ってまで決着をつけてくれたのに余計なタイミングで来てしまっただごめんって。

彼は「別に気にしてないっすよ。陽葵さんが無事なら良かった」と心までイケメンな対応してくれる。やっぱりこの人……凄いわ。私よりも随分と若いのに人間が出来る。

その後、織姫ちゃんたちがこっちに来て……程なくして……彼は倒れた。

兄貴によればひと月程眠りについて死神の力を失い……霊力を失うらしい。

彼が復活するまでは暫くお別れか。ルキアちゃんほど親しいわけじゃないけど、ちよっぴり寂しいな。

んで、怪我人の事後処理なんかは私の出る幕じゃないから、早々に尸魂界に戻されて……今日はこうして休んで良いよって言われたってわけ。



ノリで卍解した時は、本当にヤバかったわ。藍染との戦いは本当に神経削ったよ。怪我が数カ所しの打撲だけで済んで本当に良かった。

で、すき焼きの話なんだけど――。

《このあとは如何に晩飯のすき焼きとビールが美味かったか、長々と書かれているだけである》

◇月♡日 晴れ

現世の被害を全部藍染のせいにしてたら、総隊長にめっちゃめっちゃ怒られた。

私の霊圧で未完成の卍解を使うなど言語道断だと言われてしまう。下手したら藍染が王鍵を創り出す以上の被害があつたかもしれないって。

総隊長も自分の能力知ってるからこそ本気出せなかつたんだもんな。それを分かっているから私にも厳しいこと言うんだと思う。

ユーハバツハとかいう奴との戦いのときはもうちよつと自分の力を使えるようにならなきゃ、酷いことになりそうだ。

市丸は私が未完成の卍解を使つてるところ見てたらしく、結局ぶん殴つて決着つけたところが私らしく笑つてた。

うっせー、乱菊ちゃんにとつと告白して来いよ。何が「今さら照れくさいですよん」

だ。あっちだつて待つてんだから、じれつたいなあ。

◇月◆日 雨のち晴れ

日番谷くんがバットの素振りしてた。桃ちゃんと一緒に。

碎蜂曰く、藍染との戦いするとき……桃ちゃん剣速がアホみたいに速くなつていたことが判明してみんなを驚かせていたらしい。

そこで、何故か日番谷くんは私に稽古をつけてくれつて言ってきた。この天才で斬魄刀ガチャ大当たり少年はまだ強くなりたらしい。

とりま、始解でも卍解に負けないくらい強さを身につけられるような訓練をしたほうがいいとだけアドバイスした。

卍解奪つちやう奴らが現れるからちよつとでもそれを意識してトレーニングしたら、なんか変わるかもしれないし。

それだけなのかと不満顔だったので、あんまりやりたくは無いけど、拳で岩を粉々にする芸を見せる。

——日番谷くんと桃ちゃんは拳を怪我して、私は乱菊ちゃんに怒られた。

▼月◎日 くもり

ネムや碎蜂に修行に付き合ってもらう日々。霊圧のコントロールの特訓の方は順調だけど、卍解の方はあれ以降……<sup>アカリ</sup>紅鯉がますますへそを曲げてしまつて上手くないかない。

これは、次の戦いまでにマスター出来るかどうか甚だ疑問である。

ネムは霊圧がかなり上がっており、動きも俊敏で頭も良いのでいつかは隊長になるのでは……と噂されている。彼女は十二番隊から離れるつもりはないみたいだけど……。

「マユリ様が死んだら考えます。なんちゃって……」

「最近、そのセリフが洒落にならんヨ！」

包帯グルグル巻きのマユリさんが冗談を言うネムにツツコミを入れていた。アメリカンジョークの本……ちゃんと、読んでくれたんだ……。

☆月□日 くもり

ルキアちゃんに十三番隊の副隊長の座を譲った。

彼女は自分で良いのか自問自答してたけど、私などよりもあらゆる点で彼女の方が有

能である。

これで私は久しぶりに二番隊の副隊長のみに専念ということになった。長らく離れていた事務仕事……さっぱりわからん。碎蜂、助けて。

♡月◎日 晴れ

どうも最近、碎蜂の家で寝泊まりすることが多い。歯ブラシとかも私のやつを置いたりしてるし。

藍染との戦い以降、彼女は張り切って修行していて、そのまま崩し的に私が彼女の家で霊圧回復料理を作って食べさせて、そのまま泊めてもらうって生活してるからだろう。

「……一緒に住むか？ いや、何でもない」

この前、酔った彼女はそんなことを言ってたけど、やっぱお互いにいい歳して独り身は寂しくなってきたっていうことかねえ。

♣月◎日 晴れ

兄貴が久しぶりにこっちに来た。一護くんは死神の力を取り戻させるための刀を持って。

全部月島さんのおかげで有名なプリングルズ編が始まったか。

あれは、世にも奇妙な物語テイストで私は結構好きだったけど、今回は出番なし。

刀に霊圧は込めたけど、現世に行くメンバーから漏れたからだ。

一護くんは無事に死神の力を取り戻して、月島さんやら銀城さんやらはお亡くなりになつたそう。

彼は銀城の死体を現世で埋葬したいとこちらに現れた。相変わらず慈悲深い人だ。

★月▽日 晴れ

雀部長次郎副隊長が殉職した。

見えざる帝国とはよく言ったもんだ。私は全然、連中が来てたことに気付かんかった。

総隊長も気落ちしている。絶対に奴らを許さんつもりだろう。

私の知りうる一番大きな戦いと尸魂界の危機がそこまで迫っている。せめて、彼の遺志だけは受け継いで行きたいと思った。

★月◎日 晴れ

気分が悪い。まったく、連中ときたら人の縄張り好き勝手に暴れまくって。

見えざる帝国——滅却師<sup>クインシー</sup>たちが攻めてきた——。  
《日記はまだ続いている》

## 千年血戦篇

## 二十二ページ目

★月◎日 晴れ（二ページ目）

あかん……私の素行が悪いせいで「卍解使うなよ、絶対に使うなよ！」がフリになってしまつて、白哉くんや日番谷くん、そして狛村さんが卍解を使つちまつた。普段からインテリキャラで売っていればこんなことにならなかつたのに……。

碎蜂は近くに居たから直接止めることが出来たけど。

彼女だったら「ふっ、私の卍解など奪つてもどうせ連中は持て余すだろうから構わなかつたのだから」とか冗談なのか反応に困ることを言うんだから。あの卍解ミサイルを使いこなせるのは確かに彼女くらいだけど。

最初に私たちの目の前に現れたのは何かサイボーグっぽい滅却師。名前は忘れたのでサイボーグマンという名前をつけてあげた。

ガトリングガンみたいなのとか放ってくるし、今までの敵とは一味違う。「特記戦力の浦原陽葵ひまりか」とか言われたけど、ユーハバツハには警戒されてんのか。藍染をぶん殴ったせいかな……。

正解が使えないということ。碎蜂は新技を使うと口にする。

——無窮瞬間。瞬間を改良して、より長時間発動することが出来るこの技は風の性質を含む白打と鬼道を組み合わせた超必殺技だ。

速い——蝶のように舞い——蜂のように刺すとはまさにこのことである。

彼女がこつちにサイボーグマンを飛ばしてきたので、私は紅鯉をフルスイングしてそいつを吹っ飛ばした。

サイボーグマンは壁に突き刺さってそのまま動かなくなっちゃったから、多分倒せたんだろう。

私と碎蜂のチームプレーの勝利だと彼女の露出した肩を叩くと「私の無窮瞬間……：必要だったか？」とか言って首を傾げていた。

いやいや、隊長が素早く不意打ちをしてくれたから、あっさり片付いたんだって。こいつら、変な最終形態みたいな切り札があるんだから。

とりま、一護くんがこつちに向かっているって報告を受けたから私たちはバラけて戦闘中の仲間を助けに向かった。

白哉さんと阿散井くんの霊圧が近かったので、そちらに向かっていると、無数の刃が



空中に浮かんでいる光景が見えた。

あれは……千本桜景敵か。奪われちゃった卍解を使われてるんだ……。

「真ノ恐怖トハ——」とか高説を述べてるロン毛で変なマスク付けてる滅却師が白哉くん千本桜で攻撃しようとしていたので、私は霊丸を飛ばす。てか、そういう喋り方はサイボーグマンの方がするやつだろ。

生憎、滅却師には命中はしなかったけど、攻撃を逸らさせる事が出来た。まあ、爆発の余波で白哉くん阿散井くんが吹き飛ばされちゃったのは申し訳無いけど。

「無事で良かった」って声をかけたら、「おぬしにはこれが無事に見えるのだな」と軽口を叩いてきたから大丈夫そうだな。

ロン毛マスクは「お前ニモ真ノ恐怖ヲ——」とか言ってきた千本桜を飛ばしてきたので、さつきより巨大な霊丸を乱れ撃ちして弾き返しながら反撃した。

よし、ここから距離を詰めて紅鯉で——とか思ってたんだけど……。ロン毛マスク、「コレガ恐怖力……」って呟いて動かなくなる。

「一応、味方には当たらないように調節してるのは知ってるんですけど、怖すぎます」瓦礫から傷付いた白哉くんを守ってた阿散井くんが苦言を呈してきたので、とりあえず謝っておいた。

彼は滅却師の皮膚が異様に硬かったから、殴ってもビクともしなかったとか言ってる

けど、何故素手で戦おうとしたし……。

それにしても、漫画で見たよりも連中の攻めが消極的のような……。被害もそれほど出てないみたいだし……。

てか、奴らより私の方が建物壊してるって、後で怒られたりしないかな……。

そして、山本総隊長が動いた……。口煩い爺さんだけが温情をかけてもらっているのも事実。亡くなった雀部さんの意志を引き継ぐためにも——あの人を死なすわけにはいかん。

ユーハバッハもどきが剣八を倒したところに、私と総隊長はほとんど同時に到着した。

それにしても総隊長のせいで暑いなあ。まったくビール飲みたくなるじゃないか。

私と総隊長を狙っていた滅却師が何人か付いてきてたらしく、背後から攻撃をしてきたので、私たちは斬魄刀を振ってそれを迎撃する。どうやら、消極的に見えたのは私や総隊長を見張ってた連中がそれなりに居たからようだ。

雀部さんのことで頭に血が上ってる総隊長は卍解しようとしたので、私は頭を叩いて

「止めろ、少しは頭を働かせろ」と声をかけた。

総隊長ブチ切れ。「おぬしにだけは頭を使えと言われたくないわ!」と怒鳴ってくる。いやいや、未知数の正解だから奪われなくて根拠ないじゃん。あんたの正解奪われたら、終わりだよ。

私が反論すると総隊長「ぐぬぬ」つてなつて、始解で戦うことを了承。ついでにあいつが偽ユーハバツハだということを伝える。

偽ヒゲ野郎は「何をバカなことを——」みたいな感じでしらばっくられてたけど。近くにいた、ピアノが上手そうな副官っぽい奴は眉を少しだけ動かしてたから、凶星つかれて動揺したんだろうな。

私と総隊長が二人がかりで偽ユーハバツハに挑む。副官くんは手を出すなという命令を律儀に守ってるけど、あいつも結構強はずだから警戒しなきゃいけない。

聖域礼賛——ザンクト、ツヴァンガー追い詰められた偽ユーハバツハは滅却師の極大防陣とやらを繰り出したが、私と総隊長の同時攻撃で木っ端微塵に弾け飛ぶ。

そして、私はそのスキに偽ユーハバツハとの間合いを詰めて、彼の苦し紛れの斬撃を躲しながら、紅鯉で彼を突き上げた。

彼は口から血反吐を吹き出しながら上空に舞い上がり、体勢を何とか立て直そうとするも、そこを総隊長が流刃若火で一撃。

偽ユーハバツハは胸から血を流しながらぶつ倒れる。

「申し訳ございません……ユーハバツハ様……」

正体を現した偽物。しかし、彼は一瞬で消し炭になった。

本物のヒゲオヤジ——ユーハバツハが現れたからだ。

「山本重國に、特記戦力……浦原陽葵か。二人がかりとはいえ、正解すら使わずに倒れるとは——」

ユーハバツハは藍染に会いに行つてたらしい。自分の麾下に入るように説得するた  
めに。

さて、ラスボス相手に手加減するわけにはいかない。一応、総隊長に「色んなモノを  
壊すけどごめんね」つて先に謝ると「今さら何を言つとる」つて渋い顔をされる。

最近、やつと薬を飲まずにリストバンドを外してまともに戦う事が出来るようになった  
んだよね。

まあ、破壊の規模が抑えられない弱点があるけれど。

「——安解！」の言葉と共にユーハバツハに紅鯉で殴りかかる。こいつをここでやつ  
つければそれで終わりなんだから、そのつもりで私は彼に挑んだ。

——避けられた上に斬られちゃった。ブンブン紅鯉を振るうもティツシユペーパー

でも相手にしてるみたいで一向に手応えがない。

じれったいから、霊丸をグミ撃ちする——しかし、あいつは被弾しないポイントが解っているのか、当たらない上に逆に反撃してきた。

「並外れているのは、霊圧の高さだけか。取るに足らん」

喉元に剣を突きつけられて、私はこれまでにないくらいに敗北感を味わう。

すぐさま紅鯉で弾いたけど、こいつには藍染以上に勝てる気がしない。しかも、こいつってまだ力をすべて取り戻してないんだろ……。いつの間にか、何回も斬られちゃってるし。

相手が総隊長でもユーハバツハは見事に躲し続けた。

ちくしょう。動きを読もうとしても更に上を行かれる。相性が最悪なのかもしれない。

総隊長はざっくり斬られて大怪我。私は体が頑丈なだけ取り柄だから、軽傷で済んでるけど、一撃も与えられずにいた。

そんな中、主人公の一護くん登場。そして、速攻で返り討ち——からの静ブルート・ウエーネ血装発動。滅却師の血の力も解放されたみたいだね。やっぱり、あの男を倒せるのは一護くんしか居ないのかも。

しかし、そんな一護くんも時間切れで撤退しようとしたユーハバツハに手を出そうとして、副官くん到天鎖斬月を折られてしまった。

悔しい。悔しい。悔しい……。あいつに勝てる気がしないって思っちゃった。

こっちの被害は漫画ほどではないけど甚大だ。殉職者も多かった。漫画と違って白哉くんは軽傷で済んだけど、阿散井くんとルキアちゃんも重傷。どうやら、阿散井くんは私が居なくなつた後で滅却師に不意打ちでやられてしまったみたいだ。

市丸は卍解無しでもそれなりに戦えたみたいで、軽傷だったらいい。京楽さんは片目を失明してしまっている。ネムは元気というか滅却師返り討ちにした。

私は結局、五十三箇所斬られてたけど、浅い傷なのでもう治ってる。

朗報なのは総隊長が重傷ながら生きてることだ。彼がいるから護廷十三隊の士気は依然として高かった。

一護くんは死神の力を取り戻して以前よりも霊圧が凄く上がったから負ける気がしないと思つてた矢先に天鎖斬月が折られたから私よりも意気消沈しているみたい。

次は絶対に負けちゃいけない。でもどうやって勝とう……。  
こんなに不味いビールは初めてだ。

★月△日 晴れ

零番隊が現れた。一護くんを霊王宮に連れてくんだってさ。

連中の尊大な態度にキレた碎蜂にリーゼント頭がちよつかい出そうとしたから、イラツとしてそいつを小突いたら、曳舟さんに怒られた。リーゼント頭の方が。私は料理頑張ってるかどうか尋ねられて、抱きしめられて久しぶりの再会を喜んでくれた。

この人とは百年以上ぶりか……うわあ、こうやって考えると私も年を取ったなあ。ピユアで可憐な乙女だったあの時期が懐かしい。

和尚のおじさんは上機嫌そうに笑いながら、私に見所があるから零番隊に来ないかって言われたけど断っておく。だって私の居場所は二番隊だもん。

というわけで、重傷のルキアちゃんと阿散井くん、そして一護くんは霊王宮に行ってしまった。

総隊長も重傷だから行くことを勧められたけど、自分がいなきや指揮を取る者が居なくなるということで固辞したみたいだ。

あと、兄貴は虚<sup>ウエコムンド</sup>圏にいた。こつちに帰るあてはあるみたいだけど。

なんか、すげー私の名前を叫んでる奴が居ただけど……。聞き覚えがある声だ……。

それで、何でか分からんけど総隊長命令で剣八と戦い続けることになった。こつちは、落ち込んでるつつーのに、嫌だなあ。

★月 ♡ 日 晴れ

やっと、終わった。まったく、あの野郎容赦なく斬りやがって。

かれこれ、2日くらい戦い続けてたかな。剣八のやつ、ドンドン強くなるの次元を超えてるだろ。

剣八は斬り合いじゃないことに不満げだったけど、私ももつと不満だよ。

それで、つい反射的に半殺しにしてしまったら、始解は覚えてくれたからこれで良かったみたい。

とにかく疲れた。こんな仕事は二度としたくないね。

★月 ♡ 日 くもり

今日は見えざる帝国が攻めてきた。こうして日記を書いているからって、浦原☆ネタバレ乙☆陽葵と呼ばないでほしい。

色々大変だったんだから。そりゃ、今は3本目のビール瓶を空けるところだけど、これは頑張った自分へのご褒美というか何というか。

あいつらは、瀨霊廷を塗り替えるみたいなやり方でいきなり現れやがった。

ピカピカの衣装で戦うネムはめっちゃ目立ってたな。マユリさんは影から侵入して



くる見えざる帝国の手段にいち早く気付いて自分の研究室を守ったみたいだ。

正解無しでも戦えないことはないけど、やはりこっちは戦力的にかなり不利だった。

しかし、兄貴による解析で虚の力をちよつと取り込むことで正解奪還が出来るということ、正解を使えない制限が取つ払われる。

まあ、滅却師たちは滅却師完聖体とかいうチート技が使えるから別にいいやつて感じだったんだけど。

——私が紅鯉アカリを屈服出来なかったのはこつぴどく敗北する経験が無かったかららしい。

前にナイターを見に行った時、カープが惨敗したのを見て、あいつは何も話さなかったりしてたけど、ああいう敗戦を続けても折れずに立ち直る強さこそがカープの強さなんだと嘯み締めてたんだって。知るかよバーカ。

それで、私が何でもかんでも力任せでぶん殴って解決してたことが段々と腹が立ってカープっぽくないってムカついてたんだそう。お前の能力のせいだろうがつてツツコミを入れたいのだが……。 「命を刈り取る形だろう？」とか「故に侘助」とか言えるオ

サレ斬魄刀ならまだ戦い方変わってたよ。

劍八との修行中に、紅鯉はユーハバツハにやられまくった事で私が悔しさを嘯み締め  
てる姿がちよつとだけ気に入ったとか言い出した。うるせえとしか言いようがない。

あと、叩かれれば叩かれるほど強くなった劍八からカープっぼさを見出して良いもん  
を見せてくれたと機嫌が良くなっていた。

『度重なる敗北から立ち上がる不屈の闘志こそカープ魂じゃけえ。まだまだ負け数が  
全然足りんけど、オマケじゃ』

紅鯉アガリはそう嘯くと今までにないくらいの力強さを私に感じさせてくれる——。

私は後出しジャンケンが嫌いだ。あいつらにはとつと居なくなってもらおう。

これで終わりだ。絶対に勝つ。負ける気がしない。

死亡フラグのセリフを立て続けに吐き続けながら私は約二年ぶりにオサレなセリフ  
を吐く——。

「卍解——！」

全てを塗りつぶす真っ赤な光が身体から発せられ——赤の軍団が私の後ろに整列していた——。

《日記はまだ続いている》

## 二十三ページ目

★月<sup>♁</sup>日 くもり(二ページ目)

卍解——紅地獄鯉団<sup>アカヘルグンダン</sup>。

私の霊圧を帯びた九体の人形たちは応援団である。こいつらは味方をパワーアップさせてくれる。

例えば最初にパワーアップさせたのは碎蜂なんだけど、人形が碎蜂に触れると消えて、彼女は赤いヘルメットにユニフォーム姿に変わる。これで能力は発動したことになる。

「ち、力が溢れる。こ、これはどういうことだ……!」

人形に含まれた霊圧がそのまま碎蜂に付与されて彼女の霊圧が急上昇する。彼女の体自体も私の霊圧で守られているから身体への影響はない。

純粹に私の増えた霊圧を貸してパワーアップさせることが出来る——これが私の卍解の能力なのだ。

霊圧を貸し出すことが出来るのは最大で九人まで。卍解を解除するまで継続する。簡単に言えばナルトが九尾のチャクラ貸してるみたいなものってこと。

靈圧の上昇でスピードもパワーも強化された碎蜂はめっちゃめっちゃ強かった。なんせ、式撃決殺がチート技になるんだから。

さつそくペペとかいう偽物の亀仙人みたいな滅却師をすぐさま雀蜂で戦闘不能にしていた彼女はちよつと複雑そうだった。「靈圧で勝敗が決まるのって理不尽だな」という疑問が浮かんだかららしい。そういうもんなあ……。

比較的近くにおいて交戦中だったネムと市丸、桃ちゃんや乱菊ちゃん、そして日番谷くんにも靈圧を貸した。

——思ったとおり大紅蓮氷輪丸がヤバい。一瞬で氷河期が来たみたいに寒くなり、猛吹雪が吹き荒れる。それはもうアナと雪の女王かよつてくらしいの氷の世界が完成していた。

彼はB級カンフー映画に出てそうな滅却師とはつちやけた東仙要みたいな滅却師を氷像にして砕く。驚くべきスピードで。

氷属性の流刃若火みたいなモンだから当たり前か。それにしても寒い……。焼き芋が食べたくなる。

総隊長が怪我で前線に出られないから彼の広範囲で高火力という卍解は非常に貴重であった。

「浦原が色んなモノを破壊し続けた理由が解った」

本人は軽く一撃を放っただけの認識で尸魂界の全体の天候が変わってしまったので、日番谷くんは苦笑していた。

ネムはゾンビ軍団みたいなのを拳の弾幕で全部お空の彼方に吹き飛ばして、マユリさんは自分の兵士を出すタイミングが失われたと嘆く。

桃ちゃんの飛梅は流刃若火顔負けの巨大な火球で全てを燃やしつくし、バーナードフィンガーとかいうオサレ技を使う滅却師をドン引きさせ、乱菊ちゃんの灰猫は広範囲に及んで見えない強力な刃を飛ばす凶器と化していた。

市丸は卍解は使わずにスマートに戦っていた。あいつは本来、切り札はトドメの時にしか使わないような奴だもんな。

「あーあ、死神たちがあんまり頑張ると僕の仕事が増えるんだけど。僕からすると全員雑魚なのは変わりがないけどね。君……あれだろ？ 護廷十三隊最強って言われているんだろ？ 僕も最強なんだ。シュデルンリッター星十字騎士団で。どっちが本物か比べ合いつこしようよ」

空想を現実にする「夢想家」のグレミイって奴が私に挑んできた。

擬人化して、メガホン持って応援してる紅鯉を呼び戻し金属バット状にする。

卍解状態でも始解の能力は使えるが、貸し出した霊圧は私から削られる。

想像が現実にかあ。想像の夜一様とあんなことやこんなこと——。  
な、なんていやらしい能力なんだ。

そう思った私は紅鯉でグレミイとやらをぶん殴ろうとする。

グレミイは地面を隆起させたり、マグマを出したりして応戦してきた。凄いな……全部頭で考えているのか。

マグマもちゃんと熱いし、よく出来た能力だなあ。

「何故だ!?」 何故、体がクッキーみたいに柔らかくなってるはずなのに」とか「マグマに触れて何で平気そうな顔してるんだ」とか「この化物が」とか勝手に動揺してるけど、何言ってるのかよくわからん。金髪ロングの可愛い系の女子を捕まえて化物扱いって酷くない? 失礼しちゃうよ、まったく。

つーことは、あれだろ? 考えが及ばないくらいいっぱい攻撃すれば防御貫通するだろ?

卍解で霊圧が上がって、ガトリングガンの如くグミ撃ちが出来るようになったんだ。これなら——。

しかしグレミイは頭も良くて、自分を無数に増やすことでそれに対応してきた。

お空でドンドン増えていくグレミイたち。何人居るだろう? ソマリ分身よりは沢  
山居そうだな。

そいつらの同時攻撃を全部弾き返して、ぶっ飛ばすと、彼らはこっちに巨大隕石を何個も落としてきやがる。まあ、それは全部、殴って砕いて粉末にしてやったから良いんだけど……。

んで、それを見て呆然としていたグレミイを片っ端から殴って地面に叩き落とした。地面に大量に頭から突き刺さるグレミイたち。

——動かないので意識を失ったに違いない。なんか、ムーミンに出てくるニヨロニヨロみたいに見えるなあ。

やっぱり、シュテルンリッター星十字騎士団は面倒な奴が多い……。

そんなことを考えてると背後から雷撃の矢が飛んで来た。

——そして、それを霊王宮からこの場に颯爽と駆けつけて来た一護くんが弾き返してくる。

うおおおっ！ 斬魄刀新しくなってんじやん。格好いい。

私が一護くんの斬魄刀に見惚れてると、地下劇場で絶大な支持を受けてそうなガールズバンドみたいな四人組が現れる。雷撃を撃ってきやがったのもその一人のようだ。

それがきっかけで、こっちにどんどん滅却師も死神も集まってくる。

警戒されてるのは、私と一護くんと剣八。理由はユーハバツハの指定した特記戦力だから。



一護くんは「こつちでカーブが流行ってんのか？」って碎蜂たちの衣装を見て首を傾げていた。

死神と滅却師の戦いは終始死神側が押していた。あの赤いヘルメットの連中がヤバいと滅却師の女の子が連呼したことから、私は理解する。なるほど、紅地獄鯉団とは最強の赤ヘル軍団を生み出す卍解だったということか。

霊圧が急上昇した上に私と違って鬼道も白打も斬術も出来るとなれば、その力は語らずとも想像できるだろう。

しかし、それを嘲笑うかのようにユーハバツハは雨竜くんたちを引き連れて霊王宮に行ってしまった。

ついでに強力な衝撃波をこちらに見舞いながら。

ということ、友達のことを心配してる一護くんとチャドくん、そして織姫ちゃんは兄貴と共に霊王宮に行くこととなった。トンボ帰りとはこのことである。

よし、ここで一気に決めよう。こちらに集まって来てくれたルキアちゃん、阿散井くん、白哉くんにも霊圧を貸出した。

これによってこちらの優位は揺るがないモノとなった。阿散井くんに至っては斬魄

刀も使わずに素手で戦ってるし。コークスクリューとかジョルトカウンターとかいつの間にか覚えてんだ？ ルキアちゃんの袖白雪も氷輪丸に劣らない性能だ。

——だが、死神側に軍配が上がるうとしたその時……。

空から光が降り注ぎ、滅却師たちが急に苦しみだした。おそらくユーハバツハがアクスウェレン聖 別によつて要らなくなった仲間を奪い取っているのだろう。

漫画では生き残っていた滅却師もいたけど、こつちがあまりにも優勢過ぎたから……全滅しちゃったみたいだね……。

こちらの戦いの決着はついた。私たちは兄貴の下に向かった。

そして兄貴の下には平子さんたちも含めて動ける隊長格が勢揃いする。

「陽葵ちゃん、ちょっとこの玉に霊圧を込めてくれないっスか？」

兄貴は霊王宮への門を作るために大量の霊力が必要だとして私たちに玉を渡して霊圧を込めるように指示した。

私たちがその指示に従おうとしたその時、霊王が死んだらしく、尸魂界中が揺れる。何かが崩れ去ろうとしているみたいに。

兄貴が珍しく動揺してるけど——どうすりゃいいんだっけ？

——浮竹さんが霊王の右腕を体内から放出して霊王の代わりをするといい出す。彼

の体は大丈夫じゃなさそうだ。これは……やばい気がする。

そのおかげで崩壊は食い止められたが、すぐにユーハバツハが霊王の右腕を吸収し始めて、尸魂界は暗黒に包まれた。

そして、空から彼の仕業なのか、ドス黒い目玉の化け物共が大量に降ってきた。

「陽葵ちゃん」——そう、兄貴が声をかけた瞬間——私は再び「卍解」し……膨れ上がった霊圧を使って——これまでに無いほどの特大サイズの霊丸をお見舞いしてやった。

「相変わらずデタラメな強さやな」

「そりゃ、俺らにとんでもない量の霊圧を渡してもピンピンしてるわけだ」

「藍染くんを一騎討ちで倒したんだ。始末書王からよくこれだけ成長したもんだよ」  
みんなが褒めてくれたけど、京楽さんの言葉で私は大事なことを思い出す。

あれ？ 藍染は……？ 確か、漫画だと藍染も戦線に加わるんじゃないか……。

「馬鹿言っちゃいけないよ。そんなの山じいが許可するわけじゃないじゃない」  
それを質問したら、京楽さんは当たり前前みたいな顔してそう答える。

まさか、ここまで漫画ほど苦戦してないから、藍染が解放されなかったの感じなのか……。

そりゃあ困る。あいついなきやユーハバツハが倒せんのでは——？

そんな心配を他所に兄貴は霊王宮への門を作って私たちはその中へと足を踏み込んだ。

そこで、見えたのは真つ白な滅却師たちの世界。

どうやらユーハバツハはとんでもない力を手に入れたみたいだ。霊王宮はすでに落ち——ここは連中の縄張りになってる。

うわつ、夜一様の弟君の夕四郎くん、下に落ちそうになってるし。ドジなところが私に似てるって夜一様は言ってたけど、私ってドジなんか……。

白哉くんが霊子の支配権が向こう側とかよくわからんこと喋ってるけど……なんのことが分からんからまあいいか。

「陽葵様……、マユリ様が居ません」

さつきまで一緒に居たマユリさんが居ないとネムが呟く。

そして、彼女は彼の下に行くと言ってマユリさんの霊圧を探り、そこへ向かった。

あれ……ネムって……ここでマユリさんと一緒に戦って……。

私は嫌なことを思い出して、彼女を追うことにした。

そして、対峙する。霊王の左腕である化物。ユーハバツハの親衛隊……。ペルニダと

「あら、マユリさん……腕が潰れてるじゃん。すぐに再生させるあたりが凄いけど。こいつは強そうだ。近付いたら、体が潰されるからネムと距離を取って霊丸で倒そう。……ふつつ、こんな感じにクールに作戦を即座に思い付くあたり、私も成長してるな。」

「陽葵様、そこに居たら肉団子になるはずですよ。何で無事なのか、マユリ様は疑問に思ってます」

えっ？ こんな距離で肉団子なの？ 怖っ……！ でも……何ともないけど……。  
——そういや、私ってば卍解しっぱなしだな。

「君の戦い方を見ると私の常識を疑いたくなるヨ！」

卍解の霊圧を込めて紅鯉でぶん殴ったら、ペルニダ……粉々になって消えちゃった。

《日記はまだまだ続いている》

## 二十四ページ目とユーハバツハの最期（最終回）

——夢を見た。真の世界を創る私には似つかわしくない夢であった。

ハツシユヴァルトに能力を預けているから悪夢を見ることもあるだろうが、今考えようと滑稽で陳腐な夢である。

赤い軍団が私を蹂躪せしめようとするなど——黒崎一護に斬られるなど……あり得ないのだから。

The ability  
全知全能——「未来を見通し、未来を思うままに改変する能力」。藍染惣右介などの矮小な力とは違い、敗北とは無縁の力だ。

しかし、夢は現実のものとなった。一護の斬魄刀と心を折り——そして、力を回収し終えたとき——浦原陽葵を筆頭に赤い兜と奇妙な衣装を着た集団がこの場に現れたのだ。

親衛隊たちが思った以上に早く敗北したのは把握していたが……此奴らの霊圧は一体——。

私が特記戦力として数えていなかった取るに足らない塵芥にも等しい死神共が——藍染惣右介に匹敵——いやそれ以上の霊圧を噴出しているとはどういうことだ……？

ふむ……どうやら、この現象は浦原陽葵の正解の力のようなだ。未来を改変し、奴の斬魄刀を折ってしまえば全てが水泡に帰すのは目に見えている。

——改変できぬ……だと……？ いや、未来に干渉は出来るのだが、恐ろしい硬度でどうしても折ることが出来ん。

そういえば、あの女……急所を何度も斬られながらも、紙一重で致命傷を避けていた。霊圧による防御力が異様に高く、こちらの攻撃を殆ど受け付けないのだ。

全くもって理不尽な女だ——忌々しい。

それでも、取るに足らんと思っていたのは、動きが荒く単調で奴の攻撃が私に当たる要素が無かったからだ。潜在能力が不明瞭で特別な出生をしている黒崎一護の方が私には脅威であった。

——世界を崩壊させてしまえば、どんなに霊圧が高かろうが生きてはいけない。

そう、藍染惣右介であれ、浦原陽葵であれ、黒崎一護であれ、私の前では等しく虫けらのような存在だったはず……。

なぜ、私はここまで不安を煽られているのだ？ 目の前にいるのは多少霊圧が高くとも、私には遠く及ばん雑魚ばかり。赤の軍団がどうした。すべて蹂躪して、私は世界を

塗り替える——。



★月 ☼ 日 くもり（三ページ目）

アカヘルゲンザン  
紅地獄鯉団を使い、先程と同様に碎蜂たちを強化すると親衛隊たちは呆気なく蹂躪されてしまった。

兄貴や夜一様は珍しく驚いた顔をしていた。そして、逆に自分たちが戦線に加わると足手まといになると話して帰り支度の準備を始める。

グリムジョー久しぶりじゃんって声をかけたら、殴りかかってきて、ネムに吹き飛ばされちゃった。

さて、一護くんや織姫ちゃんがいるところまで急ぎますか。

あれ？ あの優男とオールバックって……月島&銀城じゃない？

そういうえば、漫画だと一護くんの斬魄刀を直してくれたんだっけ。

私は彼にお願いした。——アカリ紅鯉にカープのセ・リーグ優勝シーンを見たという過去を

挟むことを。



紅鯉は気分屋だ。機嫌によって靈丸の威力がアップしたり、ホーミング機能がついたりする。つまり、カーブ優勝という幸せな過去を挟めばパワーアップが可能だと考えたのだ。

私の鬼気迫る勢いに圧されてくれたのか、可愛い女の子の願いを聞いてくれる紳士なのか、わからないけど、案外簡単に願いは叶った。

すげー、紅鯉の奴めちやめちや上機嫌になってニッコニコになった。

こりゃあ、活躍が期待できるぞ。ユーハバツハにキツイ一撃を与えることが出来るかもしれない。

私たちは横たわる一護くんの前に佇んでいたユーハバツハと対峙した――。

ラスボス戦で私はまずは一護くんと織姫ちゃんを助けだし、折られた天鎖斬月を回収。月島さんが斬月を修理して、織姫が一護くんの怪我を治してる間、彼らを守る盾の役割を買って出た。

そして、ユーハバツハに攻撃を加えるのは九人のカーブのユニフォームを着た赤ヘル軍団。

碎蜂、ネム、市丸、乱菊ちゃん、桃ちゃん、日番谷くん、そして阿散井くんとルキアちゃんと白哉くんだ。

未来改変で卍解を壊されると元には戻らないから、出来るだけ始解で攻めるようにと、日番谷くんは冷静に指示を出す。

さすが隊長だな。一護くんから貰った少ない情報で危機管理をしてくれるなんて。

この間、卍解奪われたことをしっかりと反省してるんだね。私と違って、同じミスは2度しないんだ……。

一護くんのは、月島さんと織姫ちゃんのコンボで直ってるけど、彼がいつまで協力的かわからないし、卍解が壊されると霊力の負担と身体も半端ないだろうからな。始解で戦うのは悪くない作戦かもしれない。

「浦原の卍解が壊されないからって油断するな」とか言ってたけど、そーいや壊れてないな……。

霊圧強化状態の水輪丸はいつもの卍解以上の火力かもしれない。広範囲に影響を及ぼすので、ユーハバツハも避けきれないみたいだ。

彼は未来改変で凍らされた手足を治すが、嫌な顔をしていた。

そこに桃ちゃんやんが飛梅で隕石みたいな大きさの火球を彼に放つ。ユーハバツハはそれも改変の力でかき消し難を逃れたように見えた。

——しかし、それを目くらましに、市丸と乱菊ちゃんが息を合わせて同時攻撃をする。未来視と未来改変は恐ろしい。流れるほどの連携で超火力の攻撃——普通ならこれ

で勝負は決まっているだろう。

ユーハバツハはそれを躲して、罨を発動させ——四人を同時に叩き伏せる。ダメージは四人とも受けていないみたいだけど……。

ネムと阿散井くんの拳の弾幕も、碎蜂の無窮瞬間も白哉の千本桜までも——彼に致命傷を与えられない。どの攻撃も全てを粉塵に変えるほどの威力があるのに——。

ユーハバツハの顔が歪んでるといふことは余裕がないのかもしれないけど……。この野郎、確か死ぬことだって油断してたら改変してたよな……。

そんな奴に——ど、どうやって勝ったんだっけ……？

とにかく、月島さんと銀城さん、それで織姫ちゃんも遠くまで逃げてくれたことだし……私も行くでしょう。

月島さんのおかげで紅鯉アカリは絶好調。霊丸がウネウネと曲がつてユーハバツハを追いかける。

すげー、あれなら当たるぞ。と、思ってたんだけど……。

「陽葵さん、霊力の塊がユーハバツハを追いかけるのは良いが、彼が逃げれば我々にも

被害が及ぶぞ」

碎蜂が真顔で私に注意した。あー、そっか。この辺を縦横無尽に霊丸が動いたらそこから中に被害が及ぶよね……。相殺しとくか。

私はもう一発霊丸を放ってユーハバツハを追跡してた霊丸を相殺する。やばっ！  
爆発の余波で建物が半壊してしまったぞ。

戦いは長期戦になりそうだったが、ユーハバツハは作戦を変えてきた。一人ひとりの斬魄刀を破壊していく作戦をとってきたのだ。

始解だから復活はするが、すぐにではない。彼はニヤリと笑いながら「死神など斬魄刀が無ければ羽のない昆虫だ。地べたを這いつくばっている」みたいなことを抜かしてきたが、そんな彼の腹を桃ちゃんが殴り——剣で受け止めたユーハバツハを吹き飛ばした。

斬魄刀を失っても素手で殴りかかる日番谷くんや阿散井くんと。そして、もともと素手の碎蜂とネム。

彼は自分の誤算に気が付いてまた顔色を悪くする。

その時——私の脳内に電流が走る。まさに悪魔的発想。胸がざわっ……とするくら

いの天才的な作戦を考えてしまった。

これならあのホームレス野郎にキツイ一撃を与えられる——。

私は皆んなにユーハバツハを空中に誘導するように頼んだ。「戦闘中に作戦を大声で話すのは軽率ではないのか？」と白哉くんに言われたけど……。

ユーハバツハはもちろん話を聞いていて警戒はしたんだけど、皆んなの執拗な攻撃によつてたまらず空中にエスケープする。

そして、私も足に靈力を込めて空高く舞い上がった。

「どんな作戦か知らんが、ここで私と空中戦とは愚かな……浦原陽葵よ。靈子の支配権が私にある限り……」

そこまで話してユーハバツハは目を見開いて、初めて火を見た原始人みたいな表情になる。

どうやら私の作戦を未来視で確認したみたいだな。

——私は紅鯉の解放を解いて、もとの斬魄刀（浅打）に戻し——あえて靈力をコントロールせずに流し込んで斬魄刀を超巨大化させた。

霊術院を卒業したときはリストバンドを付けていてビルくらいの大きさだったけど、今はこの霊王宮の上空一面を覆い尽くすくらいの大きさはありそうだ。

出来上がった超巨大斬魄刀——こいつでユーハバツハをぶつ叩く——。

これなら、わかってても回避は出来ないはずだ。我ながら、なんてスマートな作戦なんだ。

「こんな莫迦げた理不尽——罷り通る筈——ぐあつ!!」

バチンと——ハエ叩きの要領でユーハバツハを叩き落とす私。

落下点には一護くんが直してもらった天鎖斬月を構えている。

バツター、一護くん。ユーハバツハに向かって——天鎖斬月をフルスイングした……

!

「——月牙天衝!!」

見事に決まった一護くんの月牙天衝。ユーハバツハは真つ二つになって——ついに倒れた。

……  
——だが、私は知っている。彼は自分の死すら改変することを。だから私は再び

「卍解——！」

すべての——そう、卍解のすべての霊力をこの拳に込めて——。

兄貴に最初に教えてもらったこの技術の方がより純粹なダメージを与えることが出来るはず。

復活したユーハバツハに最大の一撃を与えてやるんだ。

ちようど駆けつけて来てくれた雨竜くんが滅却師の能力を一瞬だけ無にするという銀の矢を彼に放ったその瞬間に——。

鼓膜が破れそうになるくらいの轟音と共にユーハバツハだった黒い塊は四散して——  
すべては消え去った。

ついでに余波で靈王宮が全壊しちゃって、兄貴とマユリさんが来てくれなかったら皆んなで仲良く下に落ちるところだった。

すげー、怒られちゃった。で、皆んなの説教と後始末とか終わってビール飲みながらこれを書いてる。

ユーハバツハは倒したけど……失われたモノは多い。  
漫画よりは多少は抑えられたとはいえ、被害は甚大だ。明日が来るってことは特別なことで……何かスゲーいいこと言ってる締めようと思っただのにビールのせいで全部吹っ飛んでしまった。

眠いし、廁行つて寝よう。碎蜂の寝顔可愛い。

★月\*日 晴れ



尸魂界の修繕が急ピッチで進んでいるが、見えざる帝国の残した爪痕は大きく時間はまだかかりそう。

総隊長の怪我はようやく完治して陣頭に立って張り切って指示を出している。

忙しい日々は続いているけど——平和な日常はありがたい。

そういや、私はリストバンドを取ることに一々許可を取らなきゃいけなくなった。霊圧がバカデカく成りすぎて。

じゃないと復興作業の邪魔になるかもしれないんだつてさ。

あれから一回も卍解を使っていないなー。

◆月◎日 くもり

浮竹さんが亡くなって、空位になっていた十三番隊の隊長にさせられてしまった。半ば強制的に……。

泣いて二番隊が良いと駄々をこねるも却下される。碎蜂——味方だと思ってたのに、なぜ私を突き放す。生涯二番隊だとあれだけ語っていたのに……。

「そろそろ、あなたの上司という重責から解放させてくれ。それに前から私はあなたと対等の関係になりたかった」

微笑みながら彼女は私にそんなことを言う。夜一様もめでたい、さすがは儂の見込ん

だ女じゃと言ってくれたから——そんなに嫌じゃなくなっただけ……。

ルキアちゃんが嬉しそうにしてるし、受け入れるしかないかー。

■月○日 晴れ

ユーハバツハとの戦い以降、尸魂界ではカープブームが起こっていた。赤ヘル軍団は尸魂界の伝説となっており、プロ野球がこちらでも映像で見られるようになった。

その上、彼の死後から数年……カープが強いなのって。日本シリーズにも出るようになって……。

んで、紅鯉がうるさいので、碎蜂とネムと一緒に日本シリーズを見に行ったのよ。

カープ負けちゃった。紅鯉はまた黙祷中。噛み締めてるのかな……カープらしさってやつを。

◆月●日 晴れ

ルキアちゃんと阿散井くんが結婚した。

いやー、めでたい。それで、めっちゃめっちゃ泣いたなあ。嬉し泣きだよ。

二人とも立派になって。私よりもずっと大人になって、なんか本当に時間が過ぎるのって早いなあ。

白哉さんの泣き顔とか久しぶりに見たよ。

ちなみによくやく市丸のバカも乱菊ちゃんと一緒に決心をしたそうだ。あいつにはいつも言い負かされてるから、絶対に冷やかしてやろう。

◎月●日 晴れ

碎蜂と新しい屋敷を買った。お互い独り身だし、なんとなく一緒に住もうかって話になって。

夜一様、いつでも遊びに来てください。お客様用の寝室は綺麗に毎日掃除してますから。

こつちの世界に転生して女になったときはどうしようかと思っただけ——そして色々な事があつたけど、元気に楽しくやれてる今が幸せだ。

可愛いヒロインにはなれなかつたっほいけど——人間的にはかなり成長したつもり。

始末書をとつと書き終えてビール飲もつと――。

## 番外篇

## 後日談 其の一

◇月◎日 くもり

ユーハバツハとの戦いを終えても私は鍛錬を欠かさなかった。そして——ついに……出来るようになったんだ。

「——瞬歩オオオオオツ！」

そう。私は瞬歩を遂にマスターした。ずっと、ずっと練習してた。何だったら幼い時から練習した分、卍解と比べ物にならないぐらい長いこと練習してる。

兄貴は匙を投げ。夜一様も諦めムードを醸し出していた。

当然だ。走術の中でも基本に位置するこの歩法を練習するたびに地面に穴を空けてたんだから。最近まで二番隊に居たのに……。

こんな私に碎蜂は実に根気よく瞬歩を教えてくれた。「出来る、出来る、絶対出来る！自分を信じろ！」と某テニスコーチのような彼女の指導のおかげで私はようやくこの

目を迎えたのである——。

「瞬步って叫んでる人……初めて見たぞ」

「それだけ感極まってるということです。瞬步の習得は陽葵様の悲願でしたから」  
兄貴の設計した最新鋭の鍛錬場で一緒に訓練してた阿散井くんとネムが私の瞬步を見て感想を述べていた。

君らは良いよな。才能ある側の死神なんだから。この嬉しきは本当にやばい。

そんじゃ、もう一回——瞬步オオオオオオ！

調子に乗ってたら、力加減をミスって、体が吹っ飛び——鍛錬場の近くの一番隊舎の屋根を突き破ってしまった。

踏み出す瞬間に足に靈力を集中するんだけど、やり過ぎちゃったみたい……。「マス

ターした」は言い過ぎだった……。

「ぶあつかもん莫迦者ツツツツ！」

総隊長の雷が私を襲う。その後、私は三時間ほど説教を受けて、始末書を片手に家に戻った。

「だから、あれほど覚えたてのときは靈圧を抑えて、尚かつ歩幅を小さくと言ったのだ。総隊長殿は本気で瞬歩禁止と言いつい出しかねなかつたぞ」  
せつかく覚えた瞬歩を禁止にされるところだったお話。

■月♡日 晴れ

引つ越してからというものの来訪者も増えた。私たちがいつでも夜一様が来ても大丈夫なようにやたらと居心地が良くなるようにしているからかもしれないけど。  
特に桃ちゃんや乱菊ちゃんをよく家に遊びにくる。乱菊ちゃんは市丸を連れてくることも多い。あとはネムもよく泊まりに来るな……。

——しかし、今日は久しぶりに碎蜂と二人きりの夜だった。

私らもなんか酒がいつもよりも進んで、気付いたらお互いに寄り添ってて——。

「陽葵さん……、今更だが……一緒に住む提案を何故受け入れてくれたんだ？」

いや、そりゃあ碎蜂みたいな可愛い子が一緒に住みたいって言ったら二つ返事に決まってるだろ。

「か、可愛い……？ まったく、私を子供扱いたくないでくれ」

頭を撫でながら可愛いと口にする、彼女は口を尖らせて不満を言う。そうは言っても長年上司だったけど、後輩感が抜けないのよ。ずっと昔からあんまり変わってないから。

「でも、嬉しい。寂しい夜とは無縁となったから」

今日はヤケに酔ってるな。いつの間にか碎蜂は私の膝を枕にしてるし。こんなに甘えることなんて珍しい。

そもそも、半同棲みたいな生活してたんだから、こうなっても私としてはあまり違和感ないんだよね。

でも、確かに一緒に住むようになって寂しさとは無縁の生活になったよな。

さて、そろそろ寝るとするか。彼女もかなり酔ってるし……。

——と、思ってたんだけど。



「むっ……、誰か来たみたいだな。このような時間に……。この霊圧は——」

気配に人一倍敏感な碎蜂は来訪者にいち早く気付く。

しかし、こんな夜遅くに誰だ……。

「夜分遅くに申し訳ない」

現れたのはルキアちゃんとその娘の莓花ちゃんだった。莓花ちゃん、見るたびに大きくなってるなあ。ちよつと前まで赤ちゃんだったのに。

どうしてこんな時間に子連れでやって来たのか尋ねると——阿散井くと喧嘩したらしい。

おいおい、痴話喧嘩の延長でウチに来たのかよ。白哉くんの家に行つたほうが良いんじゃない……?」

「兄様の所より、こちらの方が行きやすかったです。下手をすれば、兄様は恋次の味方になるやもしれませんので」

まあ、白哉くんも妹と部下の喧嘩の仲裁が出来るような器用な子じゃないもんな。

つーか、私も器用じゃないし、碎蜂も……。

「お邪魔します。陽葵おば様、碎蜂お姉様」

礼儀正しく躡けられている母花ちゃん、丁寧にお辞儀してウチに上がった。

ううっ……、私はおば様で碎蜂はお姉様なのね……。子供って時に残酷じゃないか。

この前、こっそりと空座第一高校の制服を着てみたけど、割とまだイケる気がしたんだけどなあ。

まあ鏡の前で「皆んなのアイドル陽葵ちゃんだよー」ってピースしてポーズ決めてたら碎蜂に見られて死にたくなつたけど……。

で、とりあえず話を聞いた。要約すると母花ちゃんの教育方針で揉めてるみたい。

真央霊術院に入れる時期とかそんな話で……。

うーん。あそこもあそこで私らが通つてた頃とは違うもんね。隊士不足で死神見習い制度なんて出来たから早めに現場入りするようになったし。

お互いがお互いに家族を想い合つて喧嘩か。なんか、羨ましい話だよ。

結局、深夜になった頃に恋次くんがウチに来て……ルキアちゃんも頭が冷えたみたいでお互いに謝り合つて帰つて行つた。

こんな感じで引つ越してからというもの毎日、なかなか騒がしい日が多い。

▽月◎日 晴れ

「いいですか、浦原隊長。絶対に黙っててくださいよ。市丸隊長が何を聞いても」  
私は吉良くんにキツく念押しをされる。

実は市丸と乱菊ちゃん、結婚したのは良いけど特に結婚式みたいなことはしなかった。

いわゆる地味婚ってやつだ。乱菊ちゃんなんて盛大にああいうことするタイプかと思ってたんだけど、市丸がなんか嫌がったみたい。

それで、吉良くんが幹事でサブライズパーティーを開くことになったんだけど……どうやら彼は私から漏れることを恐れたみたい。

いやいや、私ってば口は固い方だよ。そりゃあ、使っていない市丸の卍解の能力とか口を滑らせたことはあったけれど。

彼の計画でパーティーは最近出来た大きな飲み屋を貸し切って行うことになった。そして、二人をそこに連れて行く役目を私が担うことになったのである。

「浦原隊長、自然にですよ。自然に……。一度、僕で練習してみますか？」

あー、練習すんの？ 市丸と乱菊ちゃんを飲み誘う……。まあ……。良いけど……。練習だと、軽く見ていた私が阿呆だった。

「どうして目が泳ぐんですか？」

「一言目で瞞んでるじゃないですか……！」

「はあ……。これじゃ、市丸隊長どころか阿散井くんも騙せませんよ……。い」  
思った以上に完璧主義な吉良くんにダメ出しされまくる私。

演技とか苦手なんだよ。前に桃ちゃんに探りを入れたのとかバレバレだったし  
……。

「はあ、はあ……。そ、それでは頼みましたよ……」

しっかし、こんなに熱くなる吉良くん初めて見たかも。市丸のことでこんなに一生懸命になるんだ。

よし、これだけ練習したんだ。自然な感じでイけるぞ！

「陽葵さん、何を隠しとるん？ イヅルが影でコソコソ動いとったけど、そのことなん？」

「……………」

一発目でアウトでした。つか、吉良くんのことともバレとるやないか！

どーしよ。こうなったら、力づくで……。

「あー、陽葵さん、あれでしょ？ サプライズパーティーのことでしょ。あれ、楽しみ

にしてたんだ。大丈夫よ。あたしもギンも知らなかったフリくらい出来るから……」

乱菊ちゃんにも筒抜けじゃねーか……。  
てことで、市丸と乱菊ちゃんの完璧な演技のおかげでサブライズパーティーは大成功だった。

今はビンゴ大会の景品でもらったビール飲みながらこれ書いてる。

◎月?日 晴れ

しかし、あれだな。隊長になると戦闘に駆り出されることがめつきり減ったな。

よく考えりや、藍染のバカが大虚を大量に呼び寄せてたんだから、隊長格が出張らなきやいけない案件って本来は少ないんだろう。

「とはいえ、油断してはいけませんよ。陽葵さんに限ってそんなことはないと思います。——ああ、今でも思い出してしまいます。あの日、殺されかけた私を守ってくれたこと」

いつものようにランチタイムになると、いち早く十三番隊舎に来てくれる桃ちゃんは目を輝かせながらそんなことを言う。

油断してはいないけど、隊長が出るのって部下の子たちのピンチのときってわけじゃない。

桃ちゃんのおときは都合よく駆けつけることが出来たけど……。不安ではある。碎蜂みたいな機動力があれば良いんだけど……。

「でも、瞬歩を覚えられたんですよね？ それで十分じゃないですか？」

そうなんだけど、私って霊子を固めて足場を作るのも下手くそなんだよね。

その上を瞬歩するって——嫌な予感しかしねえ。

いや、待てよ。空を飛ぶか……。

——いいこと考えた。これは画期的な方法かも。兄貴の天才的な頭脳が私にも宿った的な——。

「画期的な方法ですか？ 陽葵殿……」

「どんな方法か教えてください」

一緒にランチに来てたルキアちゃんと桃ちゃんは私が面白い方法を考えついたと口にする、興味を持ってくれた。

私は森で木を一本引き抜いて、それをぶん投げる。

そして、瞬歩で追いつき木の上に飛び乗った。つまり【桃白白】タオパイパイの真似をしたんだ。

「ひ、陽葵殿……空をあんな方法で飛ぶなんて——」

「素敵……」

「いや、素敵……ではないような」

やった上手くいった。これで颯爽と空から駆けつけるオサレな隊長になれるぞ。

あれ……？ でも、これどうやって止めれば良いんだ……？

「莫迦者ぶあつかもんツツツツ！ おぬしは一番隊に恨みでもあるのか！」

一番隊舎のど真ん前に不時着してちよつとした騒ぎになってしまった。

総隊長にまたもや、めちやめちや叱られちゃう私。

「いやあ、山じいの怒鳴り声を聞くと若返った気がするねえ」

ちようどこちらに来ていた京楽さんは楽しそうな顔をして私を見ていた。

結局、私の編み出した桃白白方式の移動法は禁止にされてしまう。うーん、頭が良い方法だと思ったんだけどな。

もしかして私はまだバカなのかもしれん――。



## 後日談 其の二

『さあ、盛り上がってきました。3勝3敗で迎えた日本シリーズの最終戦。広島の先発は月島——！ 新人ながらセ・リーグで最多勝利、最優秀防御率、最多奪三振、勝率第一位と化物級の記録を残しています。〃全て月島さんのおかげじゃないか〃は今年の流行語大賞間違いなしだと言われているのも頷けますね』

『いやあ、まさか日本シリーズの初戦でノーヒットノーランを達成するとは思いませんでしたねえ』

セ・リーグを制したカープは日本シリーズに挑み、連敗こそすれ遂に日本一に逆王手をかけた。

不調だったカープがここまで躍進してきたのは今年——トライアウトで入団した謎の男。月島秀九郎の活躍に他ならない。

誰が言い出したのかわからないが、〃カープが優勝できたのは全て月島さんのおかげじゃないか〃は瞬く間に野球ファンの中で流行語と化して……彼は一躍野球界のカリスマとなる。

——とある完現術者フルブリンガーのやきう無双——

『二番、サード——阿散井……！』

0対0で迎えた8回の裏——広島 of 攻撃。バッターボックスには阿散井恋次が立つ。彼は今年、打撃の精度を上げるためにボクシング特訓をしたらしい。

チームメイトは野球をして欲しかったらしいが……。

「見てるか。苺花——お父さんのバットで決めてやるぞ」

『ピッチャー振りかぶって投げたくらく！』

「——これが俺のボクシング特訓でマスターしたアアアア！ アツパースイングだあ——」

阿散井は垂直にバットを振り上げて見事にボールにヒットさせる。

ボールは見事に打ち上がり——。

ピッチャーフライとなった。

『三番ショート——吉良……！』

「打たれた球は重みに耐えかね……必ず地を這いつくばり侘びるように頭を差し出す

——」  
ただならぬオーラを醸し出して打席に立つ吉良イヅル。

彼の打球は重さが2倍になるといふ噂がある。だから何って話だ。

『ストライク！ バッターアウト！』

これでツーアウト。

『四番、指名打者——更木……!』

ここで、四番——チームの主砲の登場だ。更木剣八——セ・リーグのホームラン王である。

「おい、知ってるか？ バットつてのは、片手で振るより、両手で振ったほうが強えエんだとよ!」

この日——負けられない試合。四番としての仕事をまっとうすべく……更木剣八は生まれて初めて両手でバットを握った——。

——バックスクリーンに直撃した打球。これでカープの勝ち越し。

次の打者である日番谷はショートゴロに倒れ……、広島は9回の表の守備に回る。

月島さんなら何とかしてくれる。そう、カープがここまで来れたのは全て月島さんのおかげなのだから……。

「さあ、終わらせようか——」

不敵に笑う月島さんは、大きく振りかぶる——。

次回……月島さんがカープに入団を決めた理由……！

「——つて、夢を見たんだ。止めてほしいよね。クライマックスに長々と回想シーンを挟むのって」

「はあ……。陽葵さんの寝言が大きいと思ったら、そんな夢を……」

今日の天気は晴れ。尸魂界は相変わらず平和である。てか、いつの間にか同じ部屋で寝てるよね。私たち……。

◆月○日 くもり

始末書に追われる情けない隊長がいるせいで、五番隊の副隊長の桃ちゃんに十三番隊の書類整理まで手伝わせてしまう。

私は申し訳なくなり、彼女に謝り倒した。

「いえいえ、あたしが押しかけちゃっただけですから。お喋りしながら、仕事するの楽しかったですし」

彼女は天使のように笑いながら、楽しかったと言ってくれた。

いやー、彼女のおかげでびっくりするほど早く終わっちゃったよ。

さすがは「書類仕事の虎」と呼ばれている桃ちゃんだ。

「そ、そんな。あたしなんて藍染隊長に比べたら全然……。あつ……!?!」

久しぶりに藍染の名前を出した桃ちゃんには気まずそうな顔をする。

別にいいじゃん。藍染の仕事ぶりが有能なのは確かだったし。そこは尊敬しても。

あいつの残してつた効率のいい鬼道の鍛錬方法とかは今だって実践されてるし、死神の待遇改善なんかもしてるから、未だに復帰を望んでる隊士は多いくらいだ。

桃ちゃんが無理して恨まんでもいい気がするよ。殺されかけたから、普通は恨むけど……。

「陽葵さんはおおらかですよ。あの人が陽葵さんが好きだった理由も何となく分かります」

「いやいや、あいつが私のこと好きとかおぞましいし。桃ちゃんの妄想だし。」

「まったく、まだこの子は誤解してたのか……。」

「いいえ、誤解じゃないです。実際、あの人と戦って——何となくわかったんです。憧れとかそういう感情を無しにして見ると……あの人は孤独を感じていました。そして、唯一自分と同格になり得る陽葵さんが来るのをずっと待ってたように見えました……。」

戦闘民族の思想じゃねーか。私はあいつの喧嘩に巻き込まれていい迷惑だったよ。

その結果、全部あいつのせいにも出来ずに始末書アホほど書いたんだぞ。

考えてみたら藍染のせいで大虚と戦いまくることになったんだから、始末書も大半はあいつのせいのような気がしてきた。

「つーか桃ちゃん、まだやつぱり藍染のこと好きなんか……。」

「……そんなはず無いじゃないですか。あたしは……、あの日からずっと……」

桃ちゃんが顔を真っ赤にして俯くもんだから、私はどうしたもんかと思つて——彼女をご飯に誘う。

書類整理のお礼になんか美味しいもんを彼女に奢ろう。

最近、カレー専門店が出来たんだよね。東仙に似た店長が居るんだよ。ナン食べ放題で、それが美味しくってさ。

なんて話をするよ、桃ちゃんは笑顔で「お供します」って言って付いてきてくれた。ホントに桃ちゃんのおかげで助かったわー。

●月◎日 晴れのち雨

「王手——」

説教されたついでの世間話で総隊長が将棋が好きだとか言ってきたから、私も好きだと答えて勝負することになった。

好きだったのはかなり前というか前世の話で、こっちの世界に転生して一回もやっけないけど……。

ふーん。王手かあ……。じゃあ、これでどうかな。私は王を守りつつ逆王手をかける。

「な、なん……じゃと……」

総隊長は私に逆転の一手を指されたことに驚きを禁じ得ないらしい。

これで、詰みだろう。おお、私ってば結構強いじゃん。総隊長に勝っちゃった。



「……おぬしに負けるとこれほど悔しくなるとは思わなんだ」  
本気で悔しがる総隊長。手がプルプルしてる。

さては、私のことを馬鹿だと侮って油断してたな……。

「へえ、山じいさんが陽葵ちゃんと将棋ねえ。僕とも一局指さないか？」

京楽さんが興味深そうに将棋盤を覗き込んで、私と一局指そうと誘う。

いいでしょう。総隊長を倒した私の棋力を見せてやる——。

ボロ負けした。六枚落ちでもボロ負けした。

どうやら総隊長って将棋がめっちゃめっちゃ弱いらしい。その辺の子供よりも……。だ  
けど、好きなんだってさ。

せっかく私にも知的な特技があるって胸を張ってたのに……。

◆月◎日 晴れ

昨日は夜一様が遊びに来てくださった。私も碎蜂もずっとソワソワしてたよ。

居心地が良いと笑みを見せてくれたので、二人とも手を握り合って感激を共有した。

夜一様の好きな花を飾り、彼女の好きな酒を用意して、料理もデザートまで一生懸命作った甲斐があった。

そこで彼女が帰りがけに一言――。

「で、おぬしらは……そういう関係なのか？」

「……………」

静寂……。私も碎蜂も黙ってしまふ。

なんだろうな。このぬるま湯みたいな関係。

恋人って言われても違うような、いやそうと言われればそうなんかもしれんけど……。

夜一様が帰ってから、私たちはずっと黙っていた。

でも、何となくお互いの布団をくつつけて、いつもよりも距離を縮めてみた。

不思議とぐつすと眠れた気がする――。

◆月◎日 晴れ

マユリさんによつて技術開発局に呼ばれた私。

なーんか、嫌な予感しかしねえんだけど。でも、彼には迷惑かけてるから断れない。あれ、七番隊の副隊長の射場くんじゃないか。粕村さんが狼になっちゃったから、近いうちに隊長になるんだっけ……？ 珍しい人がいるもんだ。

「浦原隊長……、粕村隊長を助けてやって下さい」

射場くんったら、すげー頭下げてくれるけど私にはまったく話が読めない。

「粕村が『人化の術』の副作用で獣同然になつてるのは知つているネ。実はその副作用を治す方法が偶然分かつたんだヨ。ネムの霊圧上昇体質の研究によつてネ」

難しい話は割愛するけど、霊圧がドンドン上がる細胞が人化の術の副作用を解くための特効薬になり得るけど、その薬を活性化させるのに、私の霊力が必要なんだって。ネムじゃ力が足りないらしい。

要するに粕村さんを元に戻す手助けをして欲しいという話みたいだ。

なーんだ。人助けか。だったらいくらでも力を貸すよ。  
私はマユリさんに言われるがままに——機材を掴んで霊力を流し込んだ。

「…………た、隊長？」

「射場か…………？ 儂は一体…………」

射場くんは目を丸くした。私も同じ表情となっている。

マユリさんは「ふむ…………」と腕を組む。

目の前に——ケモ耳の幼女が立っていた。髪は茶髪で狛村さんの成分はそれしかない。  
い。

「人化の術の作用が中途半端に残ったようだネ。浦原陽葵の霊圧が何らかの影響を及ぼして性別も変化した…………と見るのが自然だネ。実に興味深いヨ」

いやいやいやいや、狛村さんがロリコン向けのV t u b e rみたいになっちゃったじゃないか〜！

私、責任取れないよ。射場くん、こつちを見ないで……。悪いのはこのマッドサイエントティストだから。

こ、これは良かったのか……。？ 確かに狛村さんは復活したし……。霊圧も前よりも格段に高い気がする……。

でもなあ、この見た目の変わりようは……。

とりあえず、狛村さん本人はこんなに早く死神として復帰出来るとは思わなかったから、姿は変わったけどありがたいと言ってくれた。

そして、大恩のある元柳斎殿のために護廷十三隊で戦いたいとはつきりと言葉にする。

この人、人間出来過ぎというか受け入れるの早すぎだろ……。

しかし、ケモ耳幼女になった狛村さんは大人気となる。七番隊の隊士たちの士気は高

くなつたんだそうだ。

どーなんだ、これ。私は今回は悪くないよね……。  
まあ、本人が良いなら。良いんだろう……。

## 後日談 其の三

◆月●日 晴れ

今、七番隊が熱い。

狛村隊長の人氣が凄い！

完全にケモ耳幼女な見た目で、声も萌声っていうの？ あのだかつた狛村隊長の面影は一切無くなっている。

射場くんとかに怒られることも覚悟したが、そんなことは全く無くて、寧ろメロメロになっており……ちよつとだけ引いた。

最近も何か綱彌代時灘つなやしろときなだっていう私の漫画の知識には一切無い敵が出てくることがあつただけだし、どうもこいつが狛村隊長の親友の東仙を歪ませた張本人らしい。

この人、煽るのが趣味らしくつてき。

色んな人を怒らせてたんだよね。兄貴は無理だつたみたいだけど。

どういう訳か、私の目の前には全然出て来なくてね。執拗に狛村隊長を煽りまくつたり、してたんだけど……あつさりと彼に負けちゃつたんだ。

どうも、この人は他人の始解を真似る斬魄刀を持つていて藍染の鏡花水月を真似て完

全催眠をかけようとして、失敗したらしい。

兄貴は霊圧差が大きいと鏡花水月も無効になると推測してた。碎蜂も以前に藍染に式撃決殺が効かなかったこともあるから、理屈としてはあるかもしれないと言ってた。

つまり、狛村隊長はそれだけ高い霊圧を持っていて、人格的にも聖人レベルなのでみんなから愛されてるってこと。

このときは彼というか彼女が大活躍して、七番隊の名が尸魂界ソウルソサエティ中に響き渡った。

しかし、なんで時漣って人は私の前に出て来なかったんだろう。彼の部下みたいな子供とは戦ったんだけどね。

碎蜂の前に出てきて夜一様と結婚が云々とか言ってたらしかったから、ぶっ飛ばそうと思ってたのに……。残念だったなあ。

そういうや、檜佐木くんが「また卍解を披露出来なかった」って愚痴ってたけど、本当に覚えたのだろうか……。

◎月★日 晴れ

ソウルソサエティ  
尸魂界には娯楽は少ない。

最近の私の楽しみと言えば碎蜂と晩酌としてビールを飲むくらいである。

とはいえ、科学の進歩というか技術開発局の力というのは時に無茶を聞いてくれるも



ので……我が家に念願のテレビが来た。

テレビといつても、現世の放送を何やかんやして傍受して尸魂界ソウルソサエティに送り込み、映像を見えるようにする装置なので……尸魂界ソウルソサエティにテレビ局が出来たわけではない。

さて、このテレビ……超高額の品物だった。

どのくらいかと言うと、隊長格の給料の2年分に相当する。婚約指輪もびつくりな品物なのであった。

——私はこれを迷わずに購入する。少ない貯蓄を使って……。

恐らく現世で生活したことのない者には大して魅力的に思えないかもしれないが、私には宝物に見えた。

おおよそ煩惱とは縁遠い、可憐なヒロインである私もこのテレビの誘惑には勝てなかつたのである。

しかし、驚いた。

まさか、碎蜂がテレビの購入に半額払うと言ったことに。

「二人の家なのですから、当然です。それに私の貯蓄は陽葵さんのものでもあると思つていますから、同じ財布から出している感覚ですよ」

いやいや、そう思ってくれるのは嬉しいけどさ。

それだったら、尚更テレビを買うのが憚られるんだけど。

だって私一人の快樂のために大金を出すなんて、申し訳ないじゃん。

「私も興味がありますよ。ネムが出来が良いものだど報告していましたし。それに隊長である私たちが率先して手に入れれば、他の隊士たちも購入しやすくなるでしょう。そのうち、量産されて手頃な値段になると思いますし」

碎蜂は自分もテレビに興味があると私を氣遣っていることが丸わかりな発言をする。

そういうところが、昔から奥ゆかしいんだよな、この子は。だから可愛い後輩として何年も喧嘩もせずに仲良くやれてる訳だが……。

こんな経緯でテレビを購入した私たち。

そんな私たちは特に私の斬魄刀である紅鯉あかりの影響なのか、ナイター中継を見るようにもなった。

まあ、関東のテレビを傍受してるからカープ戦はそんなに放送されないわけだが――。

「あーあ、またカープは負けちまったか」

「うーむ。陽葵殿のイメージで強そうには見えるのだが……中々どうして好機を逃す」

「陽葵おば様、修行の成果を見てください」

尸魂界に数台とないテレビを私たちが購入したという噂はすぐに友人たちに広まり、

ほとんど毎日誰かしら訪ねて来ては一緒にバラエティ番組やナイター中継を見ることが日課となった。

私も碎蜂も、おつまみの作り方だけ上手くなつて仕方がない。

今日もルキアちゃんと恋次くん夫婦が娘を連れて遊びに来ていた。

いやー、今年のカープは厳しいね。ここ数年は珍しく調子が良かったんだけど。

紅鯉は「これもカープっぽくて良いけえ、ウチは好き」とか言つてるけどよくわからん。

まあ、テレビのおかげで現世に行けとか煩くされずに済んで良かったんだけどね。

☆月◆日 くもり

今日は四番隊舎にいる卯ノ花さんに呼び出された。

何の用件だろう？ 最近は四番隊舎の物は何も壊したりしてないんだけどなあ。

「呼び出しの理由は狛村隊長のことです」

狛村隊長……？ なんてまた、狛村隊長のことで卯ノ花さんが？

「浦原隊長なら女性死神協会の会合に彼女を誘えないものかと思ひまして」

「どうして、私が？」

女性死神協会の理事長である卯ノ花さんが自分で誘えば良いのに。

てか、ちよつと前まで男の人だったし言いにくいよ。

「言いにくい……まさに議論はそこです。聞けば、陽葵さんの霊圧による結果だとか。皆さんも話しかけ辛いみたいですし」

「いやー、卯ノ花さんが話しかけ辛いとか嘘でしょう」

「浦原隊長、今……何か仰せになりましたか？」

「なんでもないです……」

「こ、怖い……」

めっちゃめっちゃ、怖い……。

ニコニコ笑つてるのに、なんでこんなに怖いんだろう……。

そんな経緯で狛村隊長を女性死神協会の会合に誘うという大任を預かった。

仕方ないので、恐る恐る七番隊の隊舎に訪れる。断つたら、断つたでゴリ押ししなく

ても良いよね……？

「女性死神協会……？ 儂が？」

「あはは、そりゃあ無理な頼みですよね？ 狛村隊長」

変な雰囲気になったので、笑って誤魔化す私。

今は護廷十三隊で一番可愛い見た目と言つても過言じゃない彼女だけど、あの厳つい狛村隊長が女性死神協会なんて浮ついた場所に――。

「わかった。出よう……。恩人たる浦原隊長の頼みを無碍には出来んよ」  
こういう人だったわ。この人……。

護廷十三隊の隊長で一番人間が出来てるんだもん。私の上司になってほしいくらい。という事で、狛村隊長が次回から女性死神協会の会合に姿を現すことになった。

☆月●日 晴れ

今日は総隊長に一番隊の隊舎に呼ばれた。

いやいや、今月はまだ何も壊してないのになんの用事だろうか？ 怖すぎる。

まさか、知らないところで霊圧の余波で総隊長の可愛がつてる盆栽を割ったとか？

それとも、盆栽に名前を付けて毎朝話しかけることを言いふらしたことかな……？

「全部違うわい！ 莫迦者！ そして、その件に付いてはまた後で説教じゃ！」

藪蛇を突いてアホみたいに怒られた私。

これじゃ、正直に話した私がバカみたいじゃないか。

「そろそろ、儂も引退を考えとつてな。新しい総隊長を誰にするか考えとつたのじゃよ」

この爺さん、めっちゃめっちゃ元気なクセに引退とか似合わないこと言ってるのか。

3時間くらい怒鳴りっぱなしでも余裕だし、怒鳴るのが趣味なくらいバイタリテイに

溢れているし。

「怒鳴るのが趣味なはずないじゃろ！ 誰が怒鳴りとうて、怒鳴つとるか！」

とまあ、こんな感じのいつものやり取りをして、私を呼んだ理由を聞く。

まったく、年寄りというか私の周りには本題よりも前置きが長い人が多いよな。兄貴も割とそうだし……。

「それは置いておくとして、本題じゃが……一番隊の隊長……つまりは総隊長の第一条件は強いことじゃ。全隊士の中で一番の強さを持つ死神が成ることが必然。儂がこの歳までこの役職に付いておつたのは千年以上もの間……儂よりも強い死神が現れなかったからなのじゃよ」

はあ、脳筋ここに極まれりなセリフをどうもありがとうございます。

総隊長の条件は強いことって、マジで言ってるのかな……この人。

もしも、その強い奴が頭が悪すぎて周囲に迷惑ばかりかけるような粗忽者ならどうするつもりなんだよ。

もつと頭を使って人選について考えたら良いのに……。

大体、そんな話が私に何の関係があるんだよ。

「で、非常に不本意じゃが……考えた結果。お主が次期総隊長に相応しいという結論に至った」

マジでこの人、痴呆が始まつてるんじゃない？ 私を総隊長つて絶対に反発が来るに決まっているでしょうが。

てか、私みたいな可憐な女の子……敵つい総隊長つて柄じゃあないし。可愛さの欠片も無くなつちやうじゃん。

「という訳で、引退までの間に引き継ぎを——」

「厭いやです」

何、この人は私がオツケー出す前提で話してんだらう。

あり得ないから。総隊長とか絶対にヤダ。

京楽さんに頼めよ。そういうのは。あんたの自慢の弟子だろ。

「春水のやつに相談して、まさか浦原の名を出すとは思わなんだ。確かに霊圧の大きさだけなら、尸魂界の歴史上……お主以上の存在はおらんからのう。人格についての難ありは目を瞑つても得難い人材であることは確かじゃし」

絶対に京楽さん、面倒と興味本位で私を押し付けやがったな。

面倒なことになつたぞ。私は絶対に総隊長はやりたくない。

第一、私が総隊長になったら誰が私に始末書を渡すんだ。

「私が総隊長になるなんて、隊士たちが絶対に納得しませんよ。やるなら、年齢的に京楽さんや卯ノ花さんでしょう。あの二人なら人格も能力も含めて文句が出ないはずで

す」

私は精一杯の抗議をした。

てか、本当に組織のトップが強くないといけないなんてこと無いし。ていうか、二人とも強いし……私よりもずっと慕われているし。

自慢じゃないが……私なんて、未だに下から敬われてるかどうか怪しいんだぞ……。「ならば、認めさせるのみ。全隊士の前で死合うとするかのう。儂とお主で……」

この人はアホなんかな。私と山本総隊長が戦ったら尸魂界が消滅するでしょうが。やっぱり、痴呆なんじゃ……。

「安心せい！ 安全に戦える場所なら技術開発局に作らせたわい。それを映像化して、放送する準備も出来とる」

映画の撮影みたいに言うな……。

確かに私の修行場を造ってくれたマユリさんなら可能かもしれないけども。

「絶対に嫌です」

「若い先短い、年寄りの頼みも聞けぬほどの薄情者じゃったかのう？ 粗忽者じゃが、

敬老精神くらいは持ち合わせと思うとつたが」

あと千年くらいは生きそうなくせに、こんなときだけ年寄り振りやがって……。

でも、まあ……暴れるだけ暴れたら、当分死なないってことを自覚してくれるか。



という訳で、ひと月後に総隊長と戦うことになってしまった——。素面でやってらんないから、ビールを何本か飲んでから行こうつと……。

◆月●日 晴れ

兄貴にもらったリストバンドを安解したのはユーハバッハとの戦い以来だ。

立ち合いの前にビールを飲もうとしたら、碎蜂に取り上げられて、ボサボサの髪の毛を手入れされる。

そんなにきつちりしてやるもんかな。

「陽葵さんが総隊長になれるかどうかの試験のようなものなのですから。全隊士に恥ずかしくない姿を見せなくては」

生真面目な彼女はそう言って、今度はクリーニングに出していた羽織を持ってくる。

ヨレヨレだと締まらないんだそうだ。

でも、そもそも気になってたんだけど……。

「碎蜂は私みたいなのが、総隊長になっても良いの？」

「えっ……？ いや、そのう。そうですね……。ええーつと」

碎蜂は私の質問に急にしどろもどろになる。

ようやく、冷静に考えてみたらヤバい事態だということに気付いたみたいだ。

「た、確かに陽葵さんが総隊長になったら、始末書では済まないようなことになりそうではあります……」

そして、奇譚のない意見を述べる彼女。

碎蜂のこんなふうにはつきりとしての所は好きだなあ。

「それでも、そんなダメな所が多い陽葵さんだからこそ……助けてくれる輩も多いかと。二番隊や十三番隊以外にも慕っている者が沢山いるのですから」

うーん。喜んで良いのやら、悪いのやら……。

助けてもらえるのは嬉しいけど、迷惑かけてるんじゃない……。

色々と感謝しなきゃいけないよね。感謝を込めて一本だけって、碎蜂に許しを貰おうとしたら怒られた。

そんなやり取りをして、マユリさんが頑張って造った……地下闘技場へと足を踏み入れた。

本当に力を出しきっても大丈夫なんか……。

「万象一切……灰燼と為せ 〃流刃若火〃……！」  
何の躊躇いもなく、総隊長は斬魄刀を解放する。

マジで殺る気満々じゃん。

こんな可愛い女の子に向けてメラメラ燃える刀を向けるなんて、酷いじゃん。  
「かつ飛ばせ 〃紅鯉〃……！」

アホみたいな質量の炎の渦が私を包もうとしたので、慌てて紅鯉で振り払う。  
せつかく化粧したのに、汗で落ちちゃうじゃん。

「相変わらず、デタラメな霊圧じゃのう」

「いや、総隊長には言われたくないです」

辺り一面が炎で包み込まれている現状は全部この人のせいだ。

だからこそ、総隊長が出張ることは滅多にない。

戦ったら、大体こうなるからだ。

「卍解——！ 残火の太刀……！」

卍解まで使ってるし……。

そっからはまさに地獄だった。

一点に集中した火力で私の髪の毛が焦げ付いたり、近付いたら指先が火傷して水ぶくれが出来たり、散々な目に遭う。

最終的にはゾンビみたいなのをウジャウジャ出してきたから、グミ撃ちでふっ飛ばす。まったく、ハロウィンじゃないんだからさ。

あーあ、完全にメイク落ちた。早くトイレで直してきたい。すっぴんを全隊士に見せるのは抵抗があるし……。

「残火の太刀 北」……てんちかいじん 天地灰尽——！」

「今だッ——!!」

私は総隊長の霊圧から大技が繰り出されることを読んで、それを避けながらキツイ一撃を総隊長の脳天めがけて繰り出した——。

あー疲れた。もう二度とこの人とは戦いたくないな……。

「なんじゃこりゃ!? 浦原! お主、儂の頭に何をした!?!」

「よくお似合いじゃないですか。技術開発局、特製のカツラ……」

私の目の前には黒髪がフサフサしてる山本総隊長が立っている。

マユリさんに頼んで流刃若火の熱量にも耐えられるカツラを造ってもらった。

古い先短い爺さんに若返って貰おうと思つてさ。

ついでに鬱陶しい髭も剃らせようつと。

「お主、随分と消極的だと思えば……最初から！ しかも、これ……取れんぞ！ 何のもりじや!？」

「そりゃあ、私の霊圧で固定してますからね。マユリさんによれば、私じやなきや取れないらしいですよ。やつぱり……私はまだ総隊長の器ではありませんので、若返ったつもりで頑張つて下さい!？」

「さて! 浦原ア! 何処へ行く!？」

カツラを引つ張つて抜こうとする総隊長に私は取れないことを伝えて、この場を瞬歩で逃げ出した。早く厠で化粧直しやらなきや……。

どう考えても、私に総隊長とか務まらないだろう。

だから、明日が誕生日の山本総隊長にプレゼントを渡して逃げるつもりだった。

カツラを付けた総隊長は大ウケだったみたいで、京楽さんには「思つた以上に笑わせてもらつた」と褒めて貰えた。

どうやら、面白半分で私を推薦していたらしい。

マユリさんも「いいデータが取れたヨ」みたいなことを言つてて比較的に上機嫌だったし……何よりも汗かいた後のビールが美味かつた――。

こうして、私を総隊長にするという酔狂な話はたち消えてくれた。

いや、本当に疲れたよ。今日ばかりは……。

ある意味、藍染やユーハバツハと戦うよりもね……。  
とりあえず、カープ頑張れ（風呂上がりにはビール片手にテレビを見ながら）。